TOP and LOW

それは、僕達の生き方そのものだ
いつまでもTOPで走り続けることはできない。
LOWでよたよたと走らなければならないこともある。
それでも走り続けなければならない。
それは、僕達の人生そのものだから…

目次

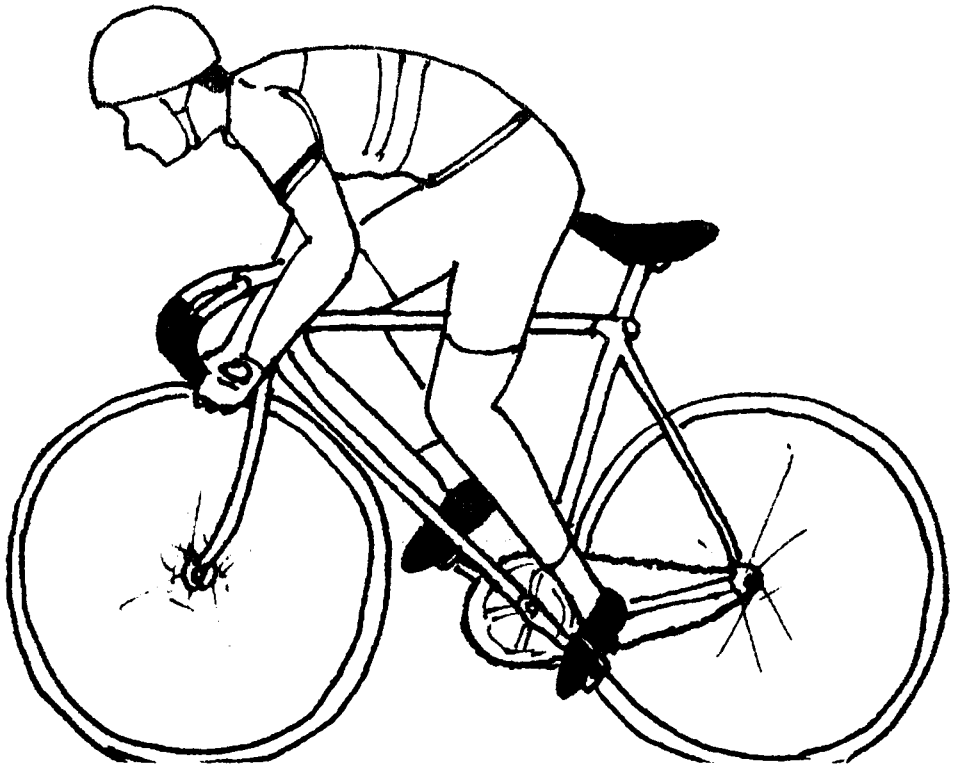
I. クラブ行事

			ページ
クラブ行事日程			1
オリエンテーリング	3年	安井孝男	3
春合宿 (西口班)	3年	高橋俊充	11
〃 (名無しの権班)	3年	永見 哲	19
〃 (雨ニハ マケタ!)	2年	三浦充永	23
新歓ラン	1年	嶋 信夫	29
予備予備ラン	1年	守佐見健太郎	31
予備合宿	1年	小林昭美	37
〃	1年	葉山宏幸	44
夏合宿 (ゴキブリキスカ班)	1年	吉田松夫	47
〃 (東横組)	1年	石田 績	63
〃 (おっさん班)	1年	今泉浩幸	73
〃 (山形ごもり班)	3年	鈴木真人	81
タイムトライアル	1年	三ッ井欽一	89
〃	2年	有藤篤志	95
ナイトラン	2年	名取 誠	105
工大祭	1年	村瀬 健	109

Ⅱ. その他 (クラブ行事もあるんじゃないかな。)

			ページ
Mt. Norikura und Ö. B. Rally	3年	小川武史	111
サイクリング部をふり返って	4年	鈴木道夫	117
最狂雑記帳	4年	小島正也	121
本州縦断の記	4年	曽我部成一	133
びょんどでぃすくりぷしょん	4年	古木登	139
The Theory of Characterization of Cyclingclubtic Person	4年	大塚隆夫	149
日本経済の高度化	3年	志波邦男	153
理想的帰キョウのしかた	3年	小川武史	155
フォッサマグナは日本の割れ目	3年	永見哲	161
Random writing	4年	浦島恭司	171
富士タイムトライアル	3年	渡辺秀樹	175
四年間を回顧して	4年	小野賢治	179
「ふりいRUN」の思い出	2年	畠山敦	181
金井均だぞ	3年	金井均	185
無題	3年	山口晋二	189

なにも考えず
ただペダルを
踏むモノたちよ
……。



クラブ行事日程

——1979——

1月	オリエンテーリング	(鎌倉)
	追出しコンパ	(生協第1食堂)
2月	整備合宿	
3月	春合宿	(九州)
4月	新入生勧誘	
5月	新歓コンパ	(生協第2食堂)
	新歓ラン	(村山貯水地)
6月	輪行講習会 部室移転	
7月	予備予備ラン	(日塩もみじライン)
	予備合宿	(渋峠)
	夏合宿	(東北)

8月	夏合宿	(東北)
9月	忘夏休み会	(部室)
10月	タイムトライアル 工大祭	(富士)
11月	ナイトラン	(九十九里浜)
12月	忘年会	(三吉ね)

『オリエンテーリング』

安井孝男

「オリエンテーリング'78年度」。これは、ぼくが参加した唯一のオリエンテーリングだが　一年以上も前のこととなると、物覚えのいい(?)ぼくとしても、かなりの部分を忘れてしまった様である。まあ、思い出したことをポツリ、ポツリと書いてみることにしよう。

まず思い出されるのは、電車の中のことである。電車の中で数人と一緒になった。あれは、志波、金井、渡辺だったと思うが定かではない。遅れたと思っていたら役員の志波がいたので安心したことを覚えている。そして次に、駅名は忘れたが、たしか乗り換えの駅だったと思う、そこで西尾さんを見かけたが乗ってこなかったのだった。みんなでおかしいなァと思っていたのだが、後に聞いたところによると、電車が混んでいたので乗れなかったとのことであった。そこで「力(りき)ネェー」と笑われてしまったのだった。中心になって笑ったのは吉水さんだったと思うが、これも定かではない。

とにかくこうして江ノ島の駅に着いたのだった。当日は、サイクリング日和であった。食料などを買い込み準備ができた。

例のごとく出走20分前に問題が配られる。人の言ったのを聞いてか、又は、自分で読んだが忘れたが、問題を知ってガビ

ッた。何と時間を測る問題があったのだった。なぜサビッたかというと、ぼくは時計を持って来なかったのである。例のごとく山口サイアッホデー。」と言ったんじゃなかったかな？　そうそう、山口も秒針のない時計だったのでガビっていた。

さて、問題を受取り、どのようにして作戦を立てようかなと思って敵々をながめると、マップにせっせと点を書いているではないか。みんな頭いい！ぼくも真似してせっせと地図上に書き込んだ。ぼくのコースは、だいたい東半分だったと思う。

ところで、遅れて来る人はいつでもいるもので、あのときは確か鈴木さん（道夫さん）が遅れて来た。しかし、今年（'79年度）の斉藤、名取ほどではなく、鈴木さんが来たときには、まだ担当の人が残っていた。

さて、ぼくの番が来て、いざ出陣。まずは江ノ島へ。確かそこで、小島さんに会った。例のごとく、もう勝ったようなホホエミを浮べていたんじゃなかったかな。前にも書いた通り、かなりの部分を忘れてしまっているので、ぼくの先入観によって多少事実とは異なっていることを書くことは大いに考えられる。

江ノ島を出ると道路を東にとり海岸辺りを走った。初めのころは、敵に会うと相手は自分よりはるかに多くのポイントを回っているような気がしてしょうがなかった。そうしてポイント人

を回っているうちに、ぼくにもドッボルときがきたのだった。

あれは、とにかく住宅地だったと思う。そこから細い地を通ってどこかへ抜けるはずだったのだが、その道がまったくわからなかったのである。誰か来ないかなと思いつつ捜したが見つからず、確か結局はわかりやすい道を大回りしたと思う。

中盤戦はよく覚えていない。とにかく、自転車をホッポうかしておいて畑の中を走って行ったり、他人の家へ通じる道を飛ばして走ったり、幽霊の出そうなトンネルを通ったりしたのは覚えているが、順番がゴチャゴチャでちっともわからん。ただ問題の地図が25000分の1だったので、いつも50000分の1の地図を見慣れているせいか、一つか二つぐらいポイントをとばして走ってしまって残念に思ったことは印象に残っている。

さて、そろそろ終盤戦、time limitを考えて走らなければならないということをぼくの腹が教えてくれている。あれはどこだっただろうか、とにかく山の中でまたドジってしまった。というのは、一本しかない鉛筆を落してしまったのだった。そうそう、その鉛筆は、江ノ島の駅前のお店でもらったものだった。さて、そこは山の中、度はないし困ったが、まあ、安倒だったかな、その墓へ行ってみようと思って行ってみると天の助け。電気工事？のおじさん達がいるではありませんか、そこで一言「あのー、何か書くもの貸していただけませんか、すぐもどっ

て来ますので。」とボールペンを借りて安針の墓へと登って行ったのでした。借りたものは貸してくれた人に返さなければいけないし、返すと書くものがなくなるしと思って登っていたのでした。すると道は登山道チックな道で、岩の山を歩くというであいだったので、もちろん自転車には下で待っていてもらいました。そして墓に着いてみるといい道が付いていて車が上がってきているではありませんか。そこでこの墓に来る前のポイントで曽我部さんに会ったことを思い出し、曽我部さんが、安針の墓の下りは気を付けるよと言っていたのを思い出して、曽我部さんは、よくあの道を自転車を担いでおりたなと感心したのでした。

さて、ボールペンを返さなければならないかと心配しながら下っていったのでした。唯一の希望は、ボールペンを貸してくれた人は、そろそろ仕事を終えて引き上げているころだということでした。ジャーン。天はぼくに味方してくれて、おじさん達は、もう跡形もなくなっていたのでした。オジサン、ボールペンを返せなくてゴメンナサイ。

さて、そこを離れて次のポイントへ行くべきか帰るべきかの決断のとき。疲れてきているにもかかわらず、100点の誘惑に負けて(?)一路大頭山山頂をめざしたのでした。なんで、実は、十分に行ける自信がその時にはあったのです。(後の苦しみも

知らないで）走り出してわかったことは、ぼくは、もう疲れを知らない子供ではないということでした。後のほうになると、少し急な坂では、押しの連続。ゴルフ場でゴルフを楽しむ人を尻目に、こちらはヒーヒーゼーゼー。最後には、自転車をホッポラかしてついに山頂へ。景色を見るまもなくポイントへ、と行ってみると、感激と拍子抜けとの混じった変な気分。というのは、その問題が、自動販売機で売っているものは？というものだったのだが、その答が、いつも見慣れた「ビープル」だったからである。

休む暇もなく、一目散に山をかけおりたのだった。やはり下りは楽だった。山を下る途中、鈴木さんに会った。確か何かの青色のタンクのポイントのところだったと思う。鈴木さんは、これからあの大槻山へ登るというのだった。「もう時間がありませんよ。」と言ったら、どうしても100点のところを回りたい人だよ、とか何とか言ったと思う。

さて、ふもとの大きな道へ出て大進撃開始と思ったら、腹のカラータイマーが赤でピカピカしているのに気づき、ここで何か腹へ入れておかないと途中で北尾ると思ったぼくは、店で何がいいかなと考えていた。すると時計が目に入ってザッピーン。自動販売機でおしるこを買って食べたのでした。

さてこれからは、ほんとうの大進撃。逗子の駅を目ざしてま

「つしぐら。とにかく長い道のりだった。逗子の町の中へ入ると、あった！駅へ行ってみると逗子は逗子でも違う駅。あれ駅がないぞーとまた走り出すと、もうゴールした連中がウロウロしている。でも駅は見えない。駅はどこだ、駅はどこだ～でやっと発見。役員の高橋がいる。やっとゴール。確かつ分ぐらいの遅刻だったと思うが定かではない。

ホッと一息。浦島さんと鈴木（真人）とで、鈴木のライバルのマクドナルドだったと思うが、そこへハンバーガーを食べに行った。きたならしいカッコウでキレイな店へズカズカ入っていった。

食べ終って出てくると、まだ帰ってこない人がいるという。誰かというと、例の鈴木さんであった。かなり待って鈴木さん登場。やっと表彰式。下位のほうから表彰される。ここで問題が出た。何位だったかは忘れたが、賞品は知らされないままでジャンケンとなった。あれは、小島さんと土井さんだったと思う。結果は、ジャンケンでは小島さんが負けたのだが、賞品は小島さんのほうがよかったので、また例の小島さんの勝ち誇った顔が出た。

さて、3位まで来た。ぼくの名は出ない。ということは……しかし、最後までは残らず、2位であった。1位は地元の大塚さんであった。ぼくの賞品は、ゼファールのインフレーター。」

しかし、小判に売りつけ、金に変った。こうして無事、オリエンテーリングは終ったのであった。

あとで聞いたところによると、採点ミスがあり、ほんとうの1位はぼくであった。まあ、これで満足々々。

『テレビゲーム合宿』

さて、それから、あの有名な「テレビゲーム合宿」が始まったのでした。まず、大塚さんの家に自転車を置かしてもらい、そこでテレビゲームが出たのです。大塚さん宅で少しくつろいで、当日の宿泊場所である、吉永さん宅へ行くと、また、テレビゲームが待っていたのでした。そう言えば、夕食には、たいへんrichなものを出していただき感激々々。

さて、明日を楽しみにして寝たのです、ナーンケヤッテ、実は、みんな疲れて、明日は何が起らなくて済むようなことが起きないかなァーなんて思っていたんじゃなかったかな。

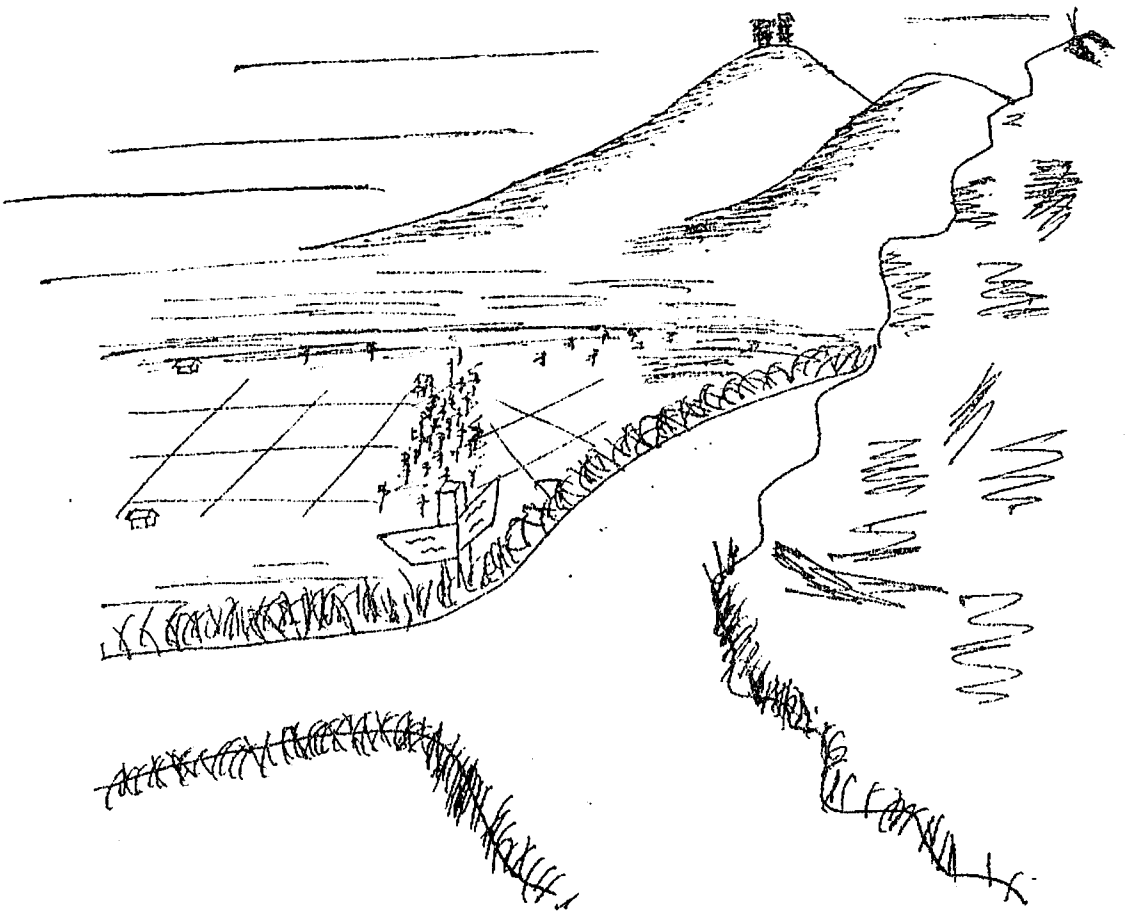
しかして、起きてみれば、ワッハッハー、雪が積っているではありませんか。みんな、安心したような、しかし、残念でもあるような変な気分だったと思うよ。

結局、また昼まで吉永さん宅でテレビゲームをやり、昼食までごちそうになって、さんざんに、吉永さんの家族の方々に迷惑をかけて帰ったのでした。

しかし、テレビゲームができたことと、吉木さん、大塚さんの妹さんを発見できたのは、大きな収穫でした。

しかし、あのとき少し意地を張って走ったほうが良かったんじゃないかなあなんて思ったりして……

おわり



春合宿［西口班］

機械工学科　3年

↑こんな名前だっけ？

高橋　俊充

メンツ：　金井均，志波邦男，西口正文，山口晋二，ボク

まずはナイトラン

今回の合宿は、まず、ナイトランから始まった。長崎駅に12:00全員集合して始められた合宿ではあった。その晩、長崎の夜景を一望できる稲佐山へのナイトランがそれである。3月22日、季節は春と言えども、夜はまだまだ寒い。道は狭く、全くの暗闇、そして急勾配という悪条件の中を5人は走っていくのでした。やっとのことで頂上へ着くと、さらに寒さは強まり、夜景もそこそこに逃げるように下山した。下りは風をうけて、いっそう寒く、急勾配のためスピードは出るし、まっ暗で先は見えないというスリルとサスペンスに満ちた最高の気分だった。

九州は日本の領土？

島原から船で三角（みすみ）へ渡り、天草五橋の第一を渡りしばらく走ると後ろが来ない。ということで町の中の道端で地図を見ながら待っていると、家の中から1人の老人が現われ「〜〜〜〜」と言って家へ引っ込み、「なんだ、あれは？」と思っていると、今度は眼鏡（もちろん老眼鏡）を持ってやってきたのでした。そして、

「〜〜〜〜〜〜，〜〜〜〜」と言ったわけ。たぶん日本語だとは思うのだが、意味がとれないままに、さようなら となったのでした。

きょうは楽しき キャンピング

天草五橋を5つとも渡り終わり、天草上島に侵入した我々は初めてのキャンピングをすることにした。松島の町から東へ2,3km入った海岸沿いのキャンプ場だった。そこへ着いた時は、確かに お日さまは高々と笑っていた。ところが、今合宿最初のキャンプ、そして夏から長い間やっていないということで、事がうまく進まず、なんやかんや とやっている間に お日さまは低くうす笑うようになってきた。しかし、まだ、食事ができていない。参考までにメニューは焼肉。それが敗因となった。カレー等と違って、作りながらの食事のため、暗闇には非常に弱い。それでも、何か得体の知れない物を焼けたかどうかもわからずに一応食べ終わった。その時、同場所にテンパッていた岡山大学サイクリング部は食事を終了して、ラジオなんぞを聞きながら くつろいでいたのでした。キャンピングでは、早く寝てはいけない，早く起きてはいけない、という我クラブルールによって、その日も遅くまで起きていた。翌朝、起きた時には、当然のごとく岡山大学サイクリング部は見えなくなっていたのでした。

九州は人情いっぱい、思いやりたくさん

天草下島は2ケ所でテンパった。牛深と今回全部の班が通った富岡だ。これは富岡で起きた事件だ。富岡城址公園(ヤヤ山の上にあって、ながめは最高)にテンパった我々は、今日は外食にすることにしました。そこで、ご存じの方も多いあのフェリー乗り場近くの店(そうです、ハンバーグの安かったあの店ですョ)へ食事に行き、テントへ戻った時です。金井がテントの中を見て突然、すごい騒ぎ方だ。「オイ、オイ、ちょっと来てみろ!」という意味のことを叫んだ。この時の騒ぎ方は本当に言葉では、表現できない。残りの4人も恐る恐るテントの中をのぞき込んだ。この時の4人の考えは同じだった。(テントの中に何かが居るのだろう。ゲジゲジか、ムカデか、はたまたアリの大群か)すると、ナ・ナ・なんと、そこには、折り詰め+カステラ+お菓子が、ちょこんと置いてあるのでした。それには手紙が付いていて、「余り物ですが、どうぞ食べて下さい。楽しい旅行ができますように。あすなろ学園、給食部」と書いてあったのです。これには、本当にみんな感激した。なかには涙を流す者さえ、さすがにいなかった。

そして、次の日、昼食はパンということになり、店でパンを買ったのだが食べる所がない。道端で食べるのも、なんだし、としばらく走って小学校を発見。春休み中だから、かまわないだ

ろうと グランド(運動場とも言います)の隅の方で、おとなしく食べていると、教官室の窓がガラッと開いて何やら手招きしているのだ。怒られたら素直に出て行こうと覚悟して近寄ると、「お茶でも飲まんかねえ」というわけで、お茶を頂いたのでした。まだまだ 物わかりのよい先生もいるもんだなア〜〜。(ついでに個人ごとで恐縮ですが、ここの鉄棒で例によって蹴上かりをやろうとしたのだが、なんと できなく落っていたのです。確か去年の春合宿、足摺岬の小学校では、できたのに。これ程、悔しかったことは ありません。)

次の事件は出水(いずみ)から大口(おおくち)へ向かう峠の上で起きた。全員、何とか峠へたどり着き、あとは下るだけとくつろいでいた所へ1台のトラックが止まった。車から降りたその若い男は リカリカと近づいて来ると、「大変だなあ、頑張れよ」と言うと みかんを手渡して、カッコよく去っていくのであった。

以上、3件のアッタカイお話を述べた。何かと言うと、他人は信用してはいけないとか 他人は他人、かってにやらせてろ、という考え方が広まっている昨今だけど、こういった人間もいるということで、ほっとしたような気がした。我クラブ員もこのような、思いやりのある心の広い人間をめざしてほしいと思う今日このごろです。

船は出て行く 煙は残るに決るか？

牛深では、港を見下ろす丘の上の公園(その名も港が見える丘公園ではありません)にテンパった。翌朝8:20発の船に乗る予定だったが、朝食の途中で船が港に入って来るのが見えた。さあ、それからが大変だ。急いで片付けてテントをたたんで、荷物を詰めると、港までダッシュ！ 全力で走ったかいあって、港には8時ジャストに到着、その時、船はすでに出港の合図をしていた。少し出港を遅らせて我々は乗船することができた。それは、8:00発に変更になっていた船だった。

あ～～～～あ、本当によかったネ

天は我々をどうしたのでしょうねェ

それは栗野(地図で捜して下さい)からえびのYHまでのでき事である。午後から雨になるという天気予報だったので、少し遅く走って、(それでも途中、えびの市内の駅で暇をつぶしながら)けっこう急いで行ったのだが、それでも、間に合わなかった。麓の小林に着く前に雨は本格的に降り出し、そこからえびのYHまでは登りだ、その時の雨は本当にバケツを引っ繰り返したというか、風呂の底が抜けたというか、すごい騒ぎだった。雨粒は大きく顔に当たって痛い、道は川になり水がジャンジャン流れてくる、登りはきつく、全力で走るため足はきれてくる、

かと言って雨やどりする所も無いし、たとえ、あっても、当分、やみそうにないので、早く着くために、全力疾走！　でも全然、速くない。それを何分か続けた結果、やっとこさでYHに着いた。格好は汚い濡れネズミだった。全身ビショビショ。当然、中までビショビショ。靴は逆にするとジャー、くつ下をしぼるとジャー、全くすごいもんでしたョ。雨の中を走って何がおもしろいかと言って、これほど、完璧にビショ濡れだとかえって おもしろい。（とは、後からの感想であって、その時の騒ぎようったら ありませんよ）　翌日も風雨ともに強くYHから脱出できず、連泊となるのだ。連泊にもいろいろあるが、今回の連泊間の自転車の移動距離：0.0cm という快記録を作ってしまった。全く、天気の野郎、オレたちをどうしようと言うのだ。

そして、翌日。やった！晴れたゾ。絶好のサイクリング日よりだ。元気よく走り、ついでに韓国岳（1700m）に登山。そこまでは絶好調だったのだが、誰のせいか知らないが突然の雨。急いで下山する途中、道で危いような所を通りながらも無事に自転車にたどり着いた。ところで、あの時、自転車にシュラフを干しておいたのは誰でしたっけネ。

やったぜ 東南西北（トンナンシャーペイ）

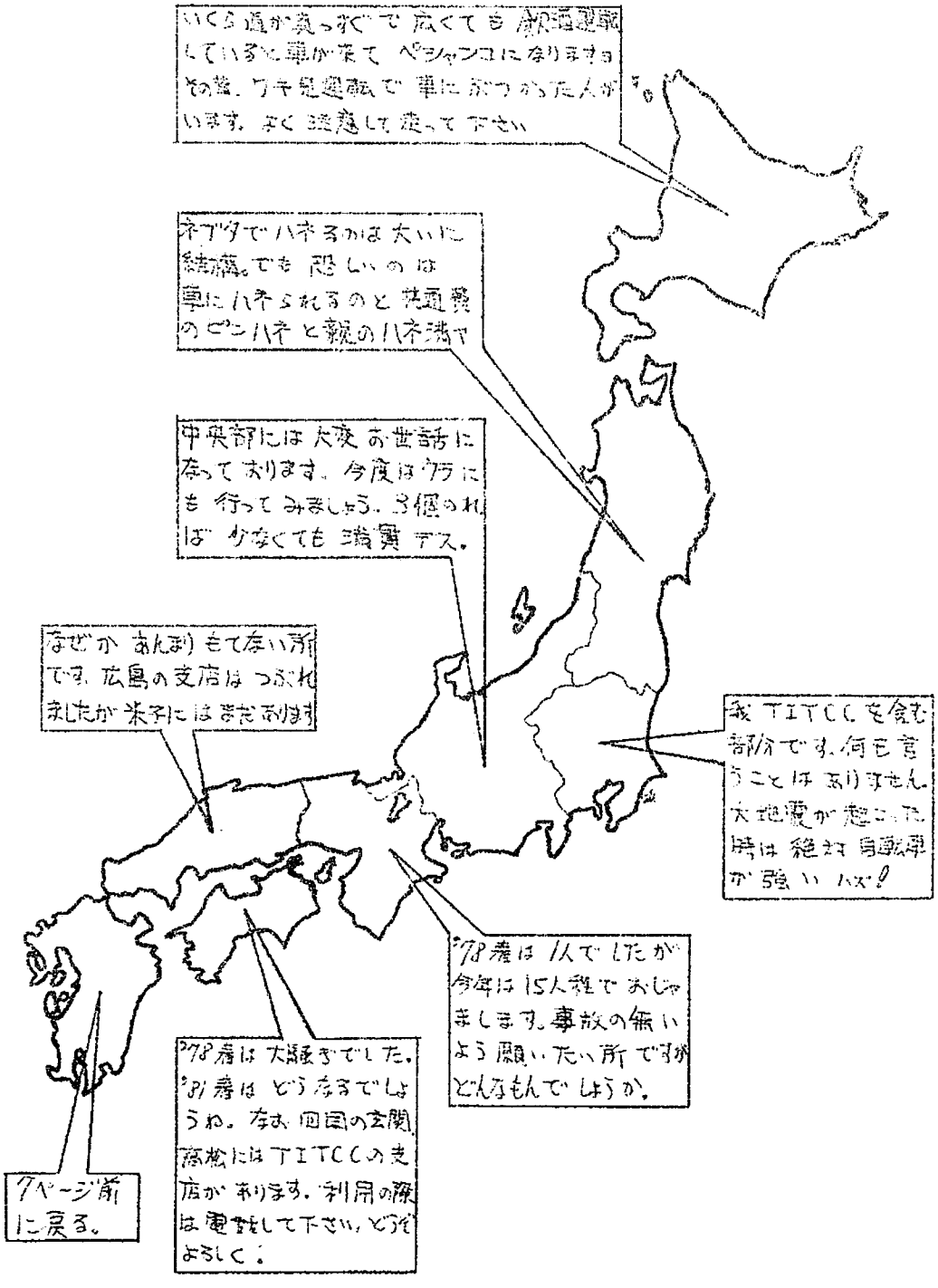
指宿の先に西大山という無人駅（日豊線の西小山と似ているが全然違う）がある。それは国鉄最南端の駅なのだ。他の2つの班も近くまで行きながら、ここへは寄らなかった、という我班、自慢の1つである。みんな知っているように最北端は稚内駅である。（ここは終点であるため、その付近へ行った人は必らず見ている）最東端は根室本線の終点、根室ではなくて、その1つ手前の東根室。北海道夏合宿でこの2駅（東根室は見のがしてしまった）の付近まで行き、東と北をおさえておいて、今回の南で、3つそろったのでした。ところが驚いたことに、雀士、山口君は合宿前ソロフリーランで、見事に西（長崎県の平戸口駅）もしっかりとおさえていたのだ。1年間に東南西北を全部おさえたというのは、すごい事ではないだろうか。（ただし、東と西は見逃がしたのが イマイチ弱い）我クラブも全国的やのう〜〜〜〜〜。

さて、全国的に広がり、各地にその触手を伸ばしつつある、我クラブの今後や いかに。同じクラブの班とすれ違っても、気付かずに、通り過ぎて行ってしまうような後輩に期待するしかないのだろうか。 頑張れ サイクリング部

頑張れ 青春 !!

おわり

日本地図のページ


いくら道が真っすぐで広くても高速運転していると車が来てペシャンコになりますョその為、ワキ見運転で車にぶつかった人がいます。よく注意して走って下さい
ネブタでハネるのは大いに結構。でも恐いのは車にハネられるのと共通費のピンハネと親のハネ踊り
中央部には大変お世話になっております。今度はウラにも行ってみましょう。3個のれば少なくても損賃デス。
なぜかあんまりもてない所です。広島の支店はつぶれましたが米子にはまだあります
我TITCCを含む部分です。何も言うことはありません。大地震が起こった時は絶対自転車が強いハズ!
'78年は1人でしたが今年は15人程でおじゃまします。事故の無いよう願いたい所ですがどんなもんでしょうか。
'78年は大騒ぎでした。'81年はどうなるでしょうね。なお四国の玄関高松にはTITCCの支店があります。利用の際は電話して下さい。どうぞよろしく。
7ページ前に戻る。

'79 春合宿 名古屋の旅路　　永見 稔

。プロローグ（フリーランの部）
①国東半島　走っても走ってもあまり変わりばえのしない風景，つまりは日本中どこにでもある様な田園風景の中に突然岩に掘られた仏が突を見せる。

もし本当に国東の仏を見たいなら迷子覚悟で適当な横道に入って見ると良い，それこそ500mも行かない内に，風景に溶け込んだ様な，半分風化した野仏に出会えるだろう。

熊野磨崖仏，さすがに自転車を放棄せざるを得なかった。なんともすごい岩積みの石段を登ってやっとたどりついた所にそれはあった。それと言うのはあまりにも不適当だ，彼は、あまりにも人間的すぎる。

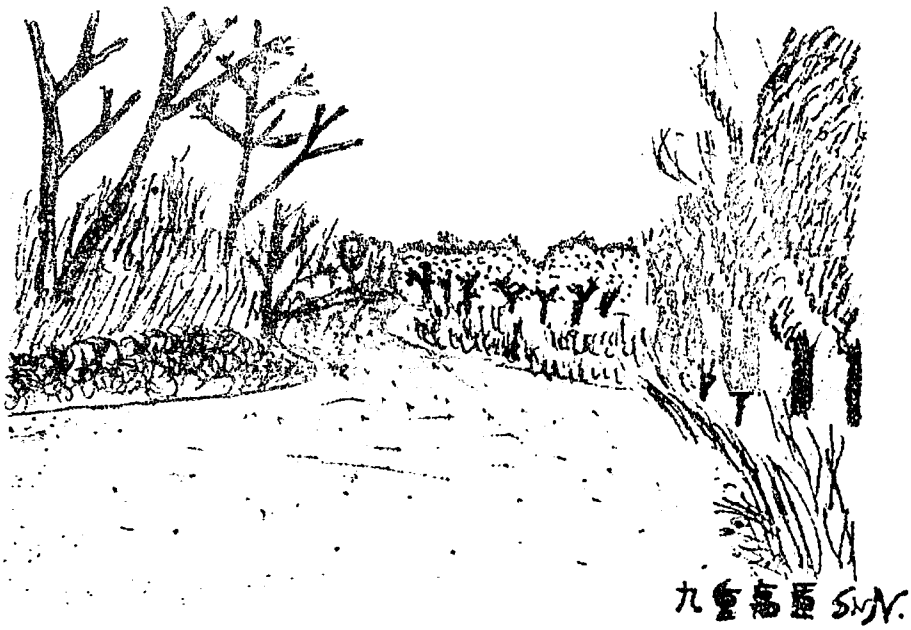
国東の仏たちは、寺院の本堂におさまってとりすましている仏とちがってどことなくとぼけた人間的な所がある。

そしてそこにあるのが，少しも不思議でない。

②九重高原，　どことなく大陸的な，それでいて荒れた感じのない道である。山なみハイウェイを走るのも良いが，長者原で横道にそれて見るともっと良い。サイクリングは路線バスじゃない，もし急がないなら細い方の道を走るのがおもしろい。

河原湯で一泊して，瀬ノ本へ向かう。地熱発電所を過ぎると登りも終り，瀬ノ本までまた高原の道を行く。

「そして、竹田へと信じられない様なダウンヒル
距離的にも時間的にもスバルラインより短かったはずだが未知の道であったせいか直線が多く、スピードが低かったせいか、とても長く感じられた。白丹へ向う。



○本題　昨年に引きつづき西かんなりの日々

○宮崎駅前、西都原古墳群から到着、合宿に入る。約一名自転車はドロだらけ、つかれた様な顔をしている。

○露天風呂、最早、日は暮れポルシェはぶっとんで行き、不動池で後を待つ。伝令が来る、「オーイ、バックだ。露天風呂で泊まるぞ。」

そんな気もしたなどと言い訳けしつつも反省、つ・ぱしりは良くないよねやっぱり。

暑をつまされてもわからない闇の中，手さぐり足さぐりで露天風呂に入る。星がふる様な下これで酒でもあれば最高なんやけどなー。M氏のおなら一発がでる。ゴボッ

○大浜池，移動見り，なぜかこの日めっぽう暑く全人では全員グロッキー。この日，大分で28℃を記録。

その夜 海水浴場にキャンプ O氏のオプティマスM氏の引き線花火を吹く。これをアラブの油田と人はいふ，O氏はういたは錦江湾に何かをぶちこんだそうであるが以後錦江湾ではM氏の顔をしたダボハゼがとれるという話である。

○移動，CIVICのオバ様に千円もらった。やっぱり雨が降った。やけくそに降りよったのでS3氏の宿決めオー弾が出て駅前C組旅館に泊まる事ができた。トン骨はうまかった。

○指宿へ やけくそに吹く白い風と雨，それにしてもかったるい道であった。

○ソールド九州，車が来ないのを良い事にちょっとあそぶ。知覧に着いたとたん雨が降り出す。これまたやけくそにふるもんだから吹上浜でS3氏の宿決めオ二弾が出る。

翌日も雨で停滞，伊作まで買い物に行き，帰りは一台のタクシーに運転手ふくめて6人つめこんで帰る。

S3氏かぜを引き，この日から五日ならべリーグ戦始まる。やたらに「ピイーン，コンコンコンー」がはやる。(桃太郎さむらい参照)

○天草　八代までワープしてフリーで戻る。天草五橋を見る。本渡の少し先でキャンプ，最後のキャンプなのでボリリンで火あそびをする。

○長崎，吹上浜からは自転車に乗るより他の乗り物に乗っている距離が長かったのだがここに至っていよいよロートル軍団は正体を現わし自転車をすて，市街電車による市内観光を始めた。吉宗本店で晩メシを食う。F氏のおごりで角煮が出る。

ところでS氏が出てこなかったが，彼が両刀使いであるのは有名であるが本題とは全く関係ないのがあえてまっとうする。

○博多，皆と再会，そうそう，一年とは長崎で会った。

ところで，これだけ雨に降られるとだれのせいか当然問題となる。もちろん合宿に参加した者が雨を望むはずはない！

となると当然幹事のたたりと考えるだろう。ついでに合宿の雨は土曜でうじっていたO氏のたたりと言う説が有力である。

○理の名前は？　つまりよーするにわすれてしまったのです。ロートル軍団とでも言ってしまおう。

○参加者は？　これはわかる。その①古賀氏（→F氏）その②小島氏，その③三浦氏，その④佐藤氏　以上3年　その⑤小川氏，その⑥鈴木氏そしてその⑦はれ，以上　以上2年でした。

○注，M氏とはその②の小島氏の事である。またS_3氏とは佐藤氏の事で，あとの略号はだれかにはていても偶然の一致かな？

春合宿（ボニハマケタ）　2年　三浦充永

S54，3月26日～4月6日（この時は1年生）

斉藤，名取，亀山，佐藤，三浦の1年生5人が春合宿のメンバーであった。（酒井もついてくるはずだったがイヌの目の病いにかかったのでオッコチ。）

さて話ははずんで、ここは宮崎県延岡市，3月27日のことである。前日に東工大から出発し，日本カーフェリーではるばるやってきたアホの5人は、ホントにここが九州なのかしらん，と，日ざしは強いが、さわやかな風が吹く南国に上陸して，感じていたのである。フェリーを降りた所に、斉藤のダチだといいはる正親（まさちか）といっしょになった。まあここまでは，打ち合わせ通りであったが…

さて話は，進んで、3月29日。青島のキャンプ場をいさんで出発した6人であったが，日南海岸を軽快に飛ばしたのだが、空模様がおかしくなり，死んだ。…　雨が降ってきたのは大堂津（おおどうつ）というあたり。こりゃ走れんと思った6人は、駅で雨やどり。その時から6人の悲劇は始まった。

雨はやむどころか、勢いついて嵐になってきた。6人は顔を見合わせタラー。午後1時ごろであったが、宿泊所をリーチしておいた方がよいと思った三浦は、近くのYHに予約の電話を入れた。しかしその後6人の協議で民宿に泊まろうということになり、三浦はYHの件でチョンボをとられ、満貫払いだったのだが、ダマで逃げた。雨の中を6人は民宿を求めて、ペダルをこぎだした。雨は弾丸となって6人を襲い、風は前へ進もうとする者を引き戻そうとする。ある商店へ飛び込んで、民宿はどこにあるかと尋ねたら、あと4km先だと聞いてしばし放心状態。ここまで来たら意地だと思い、その店で買ったヤキイモ6コを斉藤が持って長い道のりへの旅に出た。その商店のお兄さんが親切にも車で誘導してくれたのだが、その車にながながついてゆけないのだ。前を向いて走ると目に雨つぶがとび込んできて何も見えなくなるので、6人が全員前を向いては走っていなかったのである。横目、横目で、ただ早く民宿に着きたいという気持だけで走っていた。途中、信号待ちの所で、ヤキイモの袋が破れ、3,4コがゴロ

ゴロゴロに転がって、だれになったが、だれも文句は言わない。ただ口を開けて見ていただけだった。

さて ここは民宿の玄関。当然 全身ずぶぬれでミミになった6人が、玄関の前に山積みになった どうしようもない荷物に目をやり、完璧なる放心状態。三浦は、ジョージの話をしようとしているが、体が思うように動かない。少し指を震わせ、タバコをくわえている斉藤は、自分の指が焦げているのにまだ気付かない。なぜこんな思いをしなければならないんだと考えようとするが 頭がいたいのでヤメにして、順に風呂に入った。パッと気分が落ち着いた6人は、やっと放心状態から脱出できたのである。夜中、床についた三浦は こんなに苦しかった日は もう二度とないだろうと勝手に決めて眠ったのである。

3月31日、日中は雲がたちこめ、いやな予感を感じながらも6人は フラットな道路を飛ばした。3時ごろにキャンプ場に着き 夕食は ジンギスカン。小雨がパラついていたが、大丈夫だと確信してテントの中で トランプなどをやっていたのだが…7時ごろ 雨が強くなり、このままでは ドラエモンじゃない ドザエモンになると思い。三浦と亀山が

キャンプ場の隣りにある老人ホームに助けを求め、快く承諾してもらい。その夜から6人はその老人ホームにずっとやっかいになることになりました。そんなことになるハズ無えじゃねえかバカ。その夜、6人は老人ホームのおばあちゃん、おじいちゃんたちと居間で、楽しくTVのクイズダービーなんぞを見て感激しておりました。親切そうなおばあちゃんが飴玉をくれたのに、ほとんど名取が一人じめにしてしまいました。他の者はみんなメソメソ泣いておりました。(まさか!)

ということで めでたし めでたし。

翌朝6時にたたき起こされた6人は、「たいへんお世話になりました。このご恩は決して忘れません。」と言って金も払わずに旅を続けたのであります。(あたりまえのこっちゃ)

さて時は矢のように過ぎその日(4月1日)の昼ごろアホの6人は佐多岬に着いたのです。この日は雲ひとつない日本晴れで、カモメなんぞが気持ちよさそうに大空を飛び、若い男女のカップルがいちゃつきやがって、海の向こうには、オキナワの島が見え、るはずがないこの日

は、台風の上陸した佐多岬であった。なぜこんなに雨が降るの？ なんにも悪いことしてないのにと思ってみてもしかたがない。当然その日もズブヌレになって指宿のYHへかけこんだ6人であった。 書くのが疲れたので

もう頭にきたぞ。この合宿は雨ばかりで、晴れてよかったなあ～と感激したのは天草だけだ!!

あとはすべて慮の放心状態の連続技で勝負がつき、フィニッシュブローはハリケーンボルトであった。
(意味がわからん)

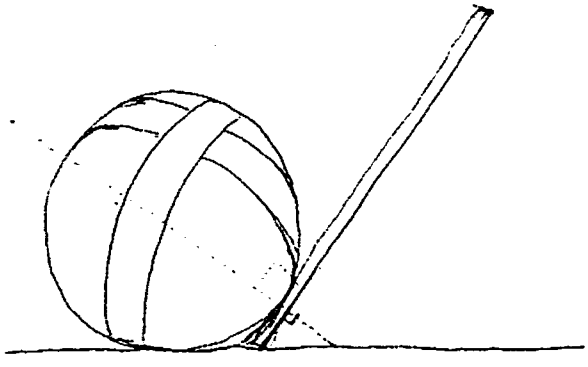
しかし、この合宿で東工大サイクリング部の1年生の団結力がいっそう強まったのは風のたよりに聞いた話だった。

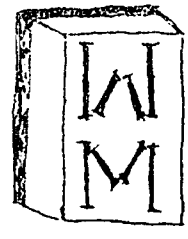
付録

サイクルサッカーについて

2年　三浦充永

東工大サイクリング部の中にサイクルサッカーをやっている人々がおります。彼らはほとんど毎日、練習に汗を流しているのです。勿論、他の部員と同様にツーリングもやっているので、そのサッカーをしている彼らは、自由な時間が、あまりないのです。確かに好きでサイクルサッカーをやっているのでしょう。彼らも土曜日の夜ぐらいは、ゆっくり、友と語らいながら酒でも飲みたいでしょうが、練習でその夜は終わってしまいます。ですから他の部員も少しはサッカーに興味を持ち、彼らの気持ちをもう少し理解してほしいのです。彼らの甘えかもしれませんがね。





新歓ラン

1年　嶋　信夫

新歓ランが行なわれた日時はよく覚えてないが、場所は村山貯水地だったと思う。僕の家から貯水地まではチャリンコで1時間ちょっとぐらいだったが、それをわざわざ遠く離れた東工大まで行ってから出発しなければならないという矛盾を感じながらも、途中参加をせず、皆と共にスタートすることにした。（来年からは途中参加にしようと思う。）

道は多摩川のサイクリングコースに沿って是政橋まで行き、府中街道を通ったりして貯水地まで行った。サイクリングコースは平たんな道のりで走り良かったが、長いこと走っているとケツがいたくなる。しかし、この道でも事故った人がいた。あえて名前はあげないが、一年生の男子は買ったばかりの新車をいためてしまった。その他、ジャリ道でコケた人もチラホラいたようだった。

まだクラブに入ったばかりで先輩たちの実態をよく知らなかったが、是政橋のところでパンチョアのSLに乗って喜んでいる先輩たちをみてあーおこんなもんかと思った。

あとは貯水地でいなたぼったり、昼めしを食ったりして帰ることになった。石田や僕などは、途中で落っこちて家に帰ってしまったので帰り道のことはよく知らんけれど、うわさ

によると、某先輩がかわいい女の子を泣かしたというが、実際に見ておらんのでよーわからん。

紙面があまってしまったので、僕が捉えた先輩たちの第1印象を述べてみたい。まず小川さん。最初の説明会で見た時はクラブの顧問の先生かと思った。何故かいやにふけて見えた。（小川さんゴメンナサイ）次に鈴木さん。この人はっぱったこわいあんちゃんかと思ったけれど全然ちがった。本当はとてもオモロイ人だが、やたらとヒワイな話をしたがるくせがある。古木さんは、さすがに4回生だけあって貫録があるように思ったが実際は……。夏合宿でその実態をみてしまった。古木さんと鈴木さんは非常にいいコンビだと思う。山口さんは非常に渋い人に思えた。高橋さんは人の良さそうな、やさしそうな感じがした。永見さんは自宅生だけにタバコもすわないし、模範的な大学生に見えた。志波さんは小金井の住民だけに親近感が持てた。（ちなみに僕も小金井の住民）西口さんは美男子だと思った。きっとプレーボーイなんでしょう。渡辺さんもやさしそうな感じを受けた。

書ききれなかった人はゴメンナサイ。ちょうど終わりに近づいたのでここでやめることにします。

よびよびふりぃらん

1年　うさみけんたろう

これから、予備予備フリーランの事について、色々と書かなければならないけれど，なにせ五ヶ月も前の話なので、途中、フィクションが多少加わるかもしれないことを、初めに断わっておきます。今年の予備予備ランは、7月1日に日光の日塩もみじライン上走った。東工大サイクリングクラブに入るまでサイクリング経験がほとんどなかった私にとっては、初めての本格的なものに近いツーリングだった。まず予備予備ランの前日の出来事から話を始めることにします。

私は千葉県、船橋市から通学しているので、当日予備予備ランに参加するためには、大学近くに下宿している誰かの所へ泊めてもらうつもりでいた。ところが泊めてもらおうと期待していた村瀬氏が田舎の岐阜へ帰ってしまったらしく、しばらく顔を見せない。遠方にくれていると嶋氏が友人の下宿を確保し、その友人は親元へ帰り、下宿には誰もいないとのこと、そこで私は嶋氏と二人で品川にあるその下宿に泊まることにした。その晩、私は初めて、東京都世田谷区にも蚊という生物が大量に生息していることを確認した。下宿の部屋に入って、しばらくテレビを見たり、マンガ本を読んだりして時間をつぶしさて寝ようということになり我々は寝床へつこうとしたが、そろそ

3本格的な夏が近づきはじめたので暑くて寝苦しい、そこで窓を少しあけて寝ることにした。その開けた窓から蚊が大量に侵入してきた。ブンブンブンブンの大合唱が始まって、その音を聞いただけでも体中がかゆくなる。そう思っていて、蚊に血を吸われて本当にかゆくなる。もうかゆくてかゆくて寝られたものでない。そこで蚊とり線香をつけようと思ったが、勝手しらない他人の下宿なのでそれが見つからない。しかたなしに窓を閉めたが、高級住宅地の下宿らしく窓にすきまがすごく多い、そこから蚊がまた大量に侵入してくる。こうなったら根性で寝てやろうと思い、暑いのにふとんを頭までかぶって必死に寝ようとした。しばらくするとうとうとしてきた、ところがその時蚊がこともあろうに、私の耳の中にまで入りこんできやがった。いっぺんで眠けがさめてしまった。丈夫な嶋氏はもう眠ってしまったらしい。こうして私は一晩蚊に馬鹿にされているうちに夜が明けてしまった。

フリーランの当日、重い輪行袋をエッコラエッコラ部室から東武浅草駅まで運んでゆくと、すでに本日参加するほとんどの人が、これから乗っていく電車の中にいた。ただし浅草まで自転車に乗ってきたある人が、輪行袋を忘れて、また取りにひきかえして行ったとのことで、その列車に乗っていなかった。(ある人とはこの予備予備ランのコースを最初に言いだした人だっ

た。)昨晩ほとんど眠っていないので、列車の中でうつらうつらしているうちに鬼怒川公園駅についてしまった。駅を出て駅前で輪行袋をいろげる、私にとっては初めての輪行だったので、ああだこうだと考えながら自転車を組み立てていると、駅附近にいた人達が、もの珍らしそうに見物しにきた。私達の近くですわりこんで様子を見ているひまな人もいた。この初めての輪行以来、私は駅で自転車を組みたてたりバラしたりしていると必ず何人かの見物人がくることを知った。ほぼ全員、自転車の組み立ても終わりさあ出発しようと言っていると、駅前の道をさっき輪行袋を忘れた人が自転車に乗ってやってきた。私は東京からその人が自転車に乗ってやってきたように錯覚したのでびっくりしていると、なんのことはない、この手前の駅まで特急でやって来てそこから自転車でやってきたとのこと。さて、初夏の日ざしの中、私達は一列に並んで日塩もみじラインに向った。最初のうちは、左手に鬼怒川が見えて、道も平ら、日ざしも柔らか、いい気分で自転車に乗っていたけれども、もみじラインの入口の料金所が近づくにつれて坂道ばかりになり、それもどんどん急になっていくので、これから先がだんだん不安になってきた。料金所をすぎると、私は目の前につらなる道が遠に見えてきた。ああ、なんと上の方まで道があるのだろう。前方を見上げると緑の山はだをうねりながら道が上へと登って

行くのが見える。必死で登って行くと、体中が熱くなり、さっきは柔らかかった初夏の日ざしが、こんどは照りつける真夏の日ざしになってきた。ふと気がついて下を見ると、今まで登ってきた道が下の方に細く見える。よくもまあ自転車でこんなに登れるなあと自分で感心しながらエイッコラエイッコラペダルをこぐ。さらに登って行く。その後の風景など覚えていない。ただアスファルトの道路と中央の白い線と強い日ざしだけが気憶にある。後に知った言葉だが、バーブっていたのだろう。先輩（誰であったかはっきりしない）の少しは休めという声がしたので、木陰で少々休憩をとる。以後、休憩をいんぱんに取るようになる。休んで登り始めると、しばらくの間はリキが抜けるのだが、またすぐ休みを取る前よりひどい疲れがドット出てくる。とにかく登って登って、途中で足がつった人（この人は、以後足つりの名人となる。）を追い抜いて、やっと峠の頂上に着いた。頂上に着いた時はもう最高の喜び，生きかえった気分だった。登っている途中では、体中が暑いという感覚だけしかなかったが、頂上に着くと、涼しい山の微風を感じるようになった。頂上から少し下った所にある店で、先に登っていた人達が待っていた。そこで食事を取ったのだが、私には食欲がなかった。疲れと睡眠不足のせいだったのだろう。店の前の道を、反対から登ってきた別のサイクリスト達が必死に通過していった。

しばらく休んで、写真を撮ったりした後、再び出発。こんどは下りばかりのダウンヒルコース，もう楽だ。大型の観光バスが店の前を通過するのを待ってから、私達は順々に出発して行った。まったくの下りばかりなのですごいスピードが出る。自転車でこんなにスピードを出したのは私にとって初めての経験だった。スピードが出るのはいいが、なにせ山の道なのでカーブがやたらと多い。曲がり切れずに山に激突したり谷へ落ちたりしないように、などと言う先輩達の注意を聞くとなんだかゾッとする。センターラインを越える人は続出した。しばらく下ると先ほどの観光バスに追いついた。そのバスの横を猛スピードで自転車が追いぬいて行く。後ろから見ていると、巨象にハチがまとわりついているように見える。バスの運転手も、自転車をひくのではないかとひやひやだったろう、車間距離を無視しセンターラインも無視し、中にはブレーキに非鳴を上げさせながら、猛スピードで峠を下り、下界へと到着した。その後はただの平らな舗装道路の上を走って、西那須野駅に着いた。駅前の食堂でビールを飲んだり、食事をとったりして、この日の予備予備フリーランはその場で解散となった。

さて、予備予備フリーランが終って、いろいろと感想を考えて見ますと、まず、連続した登り道はなんてきついのだろう、と思った。登っている途中でなんでここを自転車で登らなければ

ならないのだろうと疑問に思ったりもした。登っている途中で車に乗ったイカレたようなお姉ちゃん達に、ガンバッテなどと声をかけられたりしたが、その時は自動車は楽でいいなと思ったりもした。しかし頂上でのあの充実感は、車で登ってきた人には味わえないだろう。登りのきつさと共に、下りのおもしろさも同時に体験できた。峠のダウンヒルはほんとうに楽しい、ただしケガをしなければの話だが。どうやら、我がサイクリング部にはダウンヒルで事故り、その後の伝説にもなったほどの名場面がたくさんあるらしい。私は伝説の人物にはなりたくないので充分注意しようと思っています。

さて、ここまでつれづれなるままにそこはかとなく書いてきましたが、もう話のネタがきれたのでここらへんでおしまいにします。　　おわり

「東京工業大学　2類　サイクリング部　小林昭美」

今日は、なんと1月25日である。しかも、時間は23時30分になろうとしている。そして、部誌の最終〆切りは明日、つまり26日土曜日である。（注意、これを書いたのは、あくまでも字数をかせぐ為である。）ア～ア～どうしたらいいだう？（突然方言が出てしまった！）どうしたらいいのかしら。私にはわからないワ？（今度はオカマチックになってしまった。）もう出すのはやめようか。ワキシマさんチックにごまかしてしまおうかな。しかし、しかしだ。皆の非難の目が見えてくる。特にOO先輩の非難がとんできそうだ。（注意：ここでOO先輩とは小川さん、鈴木さん、安井さん、上浦(II)さんのうちの誰でしょう？わかりになった方は、至急こちらに御連絡ください。〆切日：昭和57年5月5日子供の日、連絡先：東工大サイクリング部部室内小林宛まで。景品：アリス出版発行「少女童話・説行」を1名様に差し上げます。）ア～、又、字数をかせいでしまった。しかし、ここでやっと四百六字だもんネ～。

あとと、くだらないことを書いてないで、本題に入りたいと思います。たしか、私の担当は、「サイクリング部内における諸方々の非人間性と一年生の相関関係について。」ではなかったのかと思うのですが、違うでしょうか斎藤さん。エッ違うんですか？。では、「タイムトライアルにおける人間の疲労度」

「ヒオッコナ（脱落）の生理学的解析でしょうか。」

「違うぜ。」と石田が言うのであった。

「△△先輩のアルコールと破壊行為並びに狂言の相関関係についてダロ。」

「バカだなあ。そんなことやったら小川が怒るぜ。小林の担当は、予備合宿とサッカーだろ！」

と山口さんおよび安井さんがおっしゃるのであった。

そう、そうでした。私の担当は予備合宿とサッカーなのでした。私が初めて、サイクリングというものを経験し、又、T.I.T.C.C.の良い意地のすさまじさを知ったのです。そう、つまり初体験なのでした。初体験ヨ〜。担当がわかったところで一休み。（コーヒーとパンを食べる為に30分程度休憩をとります。）

さあ、ここからはマジにせまりたいと思います。予備合宿は、たしかり月13日から(の)15日の3日間でございました。私は、そのころサイクリング部に入部したばかりで、先輩方々、又、一年の同胞とても親しみがございませんデシタ。それに、私の自転車、約10万円のケルビムは1日にできたばかりでした。そんな状態で私は予備合宿に参加したのでした。あまりの不安のあまり、その前の晩はよく眠ることができませんでした。

（→この「の」は不要）

「（実際は、高崎の新婚の姉の家に留まったので、ある事を期待して眠れなかったのです。ある事とは、もちろん、アレですが）そして、13日、一足先きに私は中軽井沢に行き、皆を待っていたのでした。そして輪行。その時、永見さんが親切に私にわかりやすく指導してくださいました。私は、永見さんてステキな方だなあと実感しました。（この時が、私の永見さんへの第一次接近であった。なおその後の接近はいまだにない）本当に、永見さんてステキな方ねて。そして、記念撮影。この時、私は、サイクリング部の探求心の強さというものを知りました。さあ出発でございまする。

出発から、峠までの私の記憶はあいまいです。それほど、登りはきついとは思わなかったからかもしれません。そして下り。この下りもあまり記憶がございません。ようするに、第一日目で記憶に残っているのは、永見さんと夜だけでした。夕飯はカレーでして、これは、マズーマズーだと思います。そしてついにやってきた初夜。私の隣りには、富田さんというステキなオジサマがいてくださいました。（だって私は18才、富田さんは二十〇才でしょ。）オジサマは、私が緊張しないようにやさしくして下さいました。狭いテントの中で、トクホンダッシュを使い、もろに私の目を刺激してくれました。その時私は、背中をツツーと走る快感を感じました。やはり、オジ

「サマッていうのはお上手ですね。

サー、翌日、起きてみると、昨夜からの雨がいまだにふっておりました。その為、流し台のところで朝食。貧しいものでした。ブルジョワの私にとって、こんなところで食べるなんて初めての経験でした。その割には、場慣れした感じで、たくさん食べましたが。朝食の後、サー出発という時になって、誰か忘れましたが歯をみがいておられた方がいたように思われました。たしか、酒井さんではなかったかと思います。その時、私は、酒井さんのデリケートなことに驚きました。(だってとてもそうは見えないんですもの!)

出発後の記憶が少しはっきりしないのです。どこまでかというと、草津温泉までなのですが。つまり、午前中の記憶はまるでないのです。その草津温泉で、食料調達をしたところ、デリケートな酒井さんが服をもらってまいりました。デリケートな酒井さんがですよ?。私は、酒井さんはデリケートな方だから、そんなものは着ないだろうと思っていましたら、ちゃっかりその後着ておりました。

さあ、これから、最大のキモ、渋峠なのです。私は、心細さのあまり、思わず、小島さんの目をじっと見つめてしまいました。渋峠までの道は険しかった。苦しかった。今はいい思い出である。しかし、登っている途中でいろいろなことがあ

りましたヨ。まず先輩方々のたくましさ。後の方で、元気にも叫んでおりました。あれは誰の事だったのでしょう。それから高橋さんがたくましかったワ。アウターで必死に登っていったのです。お尻をふりふり。高橋さんてたくましいなあと思っていたら、ちょっと先で休んでおりました。さらに高橋さんについで、誰かが私をぬいていきました。一瞬、私は「なぜ、ドラエモンが自転車に乗っているのだろうか。」と思ったら名取さんでした。(名取さんゴメンナサイ。)だってお腹のあたりを見たらそう思えたのですもの。さらに、車に乗っているおじ様達が私をしきりにひやかすのでした。「お前がびりだぞ〜!」とか「頑張んべ〜」とか「スポンが破けてるぞ!」とかいって。そのたびに私は顔をあからめて下を向いてしまいました。突然ここから私は男に戻ります。あと、もう少しで終わりだと思っていたら、コェアレディーズに乗ったお姉チャンが「ボク、頑張って〜。」とニッコリと笑ってオレを応援してくれた。オレはその時、突然、力がわいてきて、そのコェアレディーをシャカリキになって追いかけてしまった。なんどと以上のできごとがあったのです。そして山頂についたのです。皆が、私をあたかくむかえてくれました。(そのように感じたのは私だけだったのだろうか?)しかし苦しい山頂であった。皆、そう思いませんでした。

「次は、下りであった。しかし、その途中、私は、チェーンをはずしてしまった。その時、古木のオジサムがやさしく修理してくださいました。私、オジサマが好きになってしまいそう。そういえば、前日にチェーンをはずした時も、志村さんが修理してくれたっけ。話を元に戻しまして、下りは最高だった。すばらしかった。あまりのすごさのあまりに、石田が転倒したっけ。それを私は村瀬は何気なく通過してしまって非難されたっけ。しかし、下りは、すばらしかったという実感が残っているだけでさほど記憶には残っていないのです。

フー疲れた。ここで一休み。(何をするかというとエロ本を取り出して、マスを書かせていただきます。もし、これから先、液体状のものがついていたら、それは私のヨダレかあるいは、O-メニです。あしからず。)

さっぱりしたところで再び書きます。その日の夕飯はマカじゃなかったカマ飯とトン汁でございました。そして、それの分配について私は非難されてしまいました。つまり、分配が均等でなかったと。世間知らずの私は、皆様がそれほど飢えているとは知らなかったのです。恥ずかしいことですね。さて、第3日目について書きたいのですが、何も記憶に残っていないのです。そこでワープしていっきに、急行「妙行」が

「上野に着いたところまでとびたいと思います。そこでミキは降りそこねて、ドラをしめられてしまったのです。その為、彼は非常コックを使いでてきたそうです。（ミジメヤー）

以上で私の文を終わりにしたいと思います。なお、文中失礼なことを書いたことをおわびします。さらに、文章がオカマチックになっておりますが、私は男に興味をございません。ゆえに、そのライプの種じゃなかった趣味のあることは御意慮ください。サイクルサッカーをやっていても、私は、ホモではございません。

予備合宿（霧と運動靴の頃）

1年　栗山　宏幸

7月13日、金曜日、朝から電車にゆられ、昼前に中軽井沢という駅に着いた。すぐ近くに浅間山が見える。思えば、浅間山を見たのは、中一の時移動教室というもので小諸に来た時以来だ。あのときも、朝方、霧の中でラジオ体操をした覚えがある。六年後の今日を暗示するように。

（その日の朝、愛用の黒の運動靴をはいてきた。）

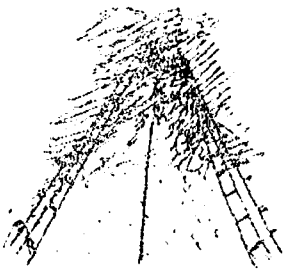
その日の午後の走りで、はやくもバテがきていた。明日の二十メートルを超えるトライはとても無理なような気がした。そして、夜、雨が降り出した。このとき、幸運なことに、テントの真人中で寝させてもらい、あまり雨に濡れなかった。隣に寝た志賀二人は、上からたれてきて、濡れてしまった。（二日目バンガローで寝たとき、濡れたシュラフでは駄目だから、わざわざ金を払ってフトンを借りてきたほど。）しかし、運動靴はビショ濡れになった。

明朝、小雨の中、走りが開始された。まずは線路のあるところまで行こうということだった。そして、ある無人駅に着いた。そのとき、心は線路の続く方にと人でいっていった。しかし、予想に反して？天気は回復し、再び走り始めた。そして、昼、草津に着いた。そのときは、もうその日の全精力をつぎこんだ

ような気がした。そして、その日はもうそのまま温泉につかって疲れをいやしたかった。しかし、これからが本番なのである。パンとキャラメルを買いこみ、アタックが始まった。

（その頃、運動部は「そんな暑の海やたい敷はサイクリングにあかんでぇー」と言われ、いじけていた。）

三浦さんと先輩の許に、長い長い坂道をのぼっていた。途中から深い深い霧がかかってきた。前も上も下もろくに見えない状態。乗のヘッドライトで、これからどのくらいの坂道かを知り、失望していたものだ。そして、ゆっくりと進んでいった。

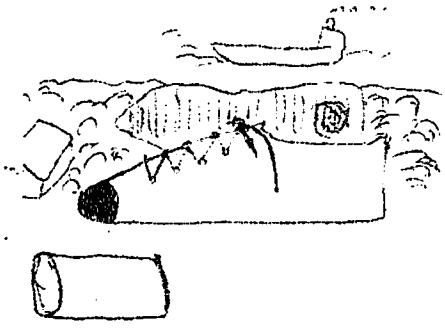


1700米という標識があった。まだ400米もある。ただ進む、そして何度となく休憩のあと、いきなり2000米という標識が目についた。うれしかった。生きる希望がわいてきた。しかし、その頃はもう、50米進んでダウンという状態で、やっとのことで休憩所にころがりこんだ。

頂上までもう少しあったが、ついに峠という標識を目のあたりに見ることができた。頂上は霧で何も見えなかったが、よかった、よかったという感じであった。そして、そう快な下り。下の方に来れば、太陽がさんさんと輝き、運動部も濡れた体をあたためることができた。その日はよくねむれた。

三日目、長野まで走り　善光寺も見学した。（善光寺は自分達が東京に帰ったあと、火事になった。うちらのようなものが行ったからかな？）そのとき、いろいろなものを見聞して、楽しかったが、山はもうこりごりという気分だった。

運動靴は死んだ。雨と霧の中での酷使に耐えられなかったのだろうか。1年ちょっとの短い生涯を終えた。今頃は東京湾の波に洗われて、汚濁の霧を恨みながら　静かに横たわっているかもしれない。



夏合宿 ゴキブリキスカ班　　1年 吉田松夫

◎7月25日 いわて3号

我々は上野23:32発いわて3号に乗り盛岡へ向かった。車内は国鉄が省エネにさからって一晩中冷房を続けていたので、非常に寒かった。また同じ車両に騒々しい乗客がいたりしたので、あまりよく眠れなかった。

◎7月26日 初日　　盛岡→柳沢キャンプ場

初日にして早くもじゃり道に遭遇したが、まあ平穏無事だった。柳沢キャンプ場はトイレのないのがガンだった。

◎7月27日 かびりの八幡平　　柳沢→大沼キャンプ場

朝から八幡平方面はおかしな空模様だった。我々は柳沢から282号線に出て、まずは買い出し地の大更に向かった。途中、先頭を走っていた山口さんが大型トラックの幅寄せにあい、ころびそうになったが、うまく歩道に逃げて事故を免れた。

前評判では八幡平は楽勝ということだったが、それは大うそだった。大更からずっとだらだら上り、そしていきなり10%以上は確実にありそうな坂で、とてもきつかった。特にアスピーテラインのゲートから先では霧ムシを食べずに上ったせいか力切れになり、また雨も降ってきて散々だった。三井は完全におっこちてしまった。その一方で永見さんはチャーであったに

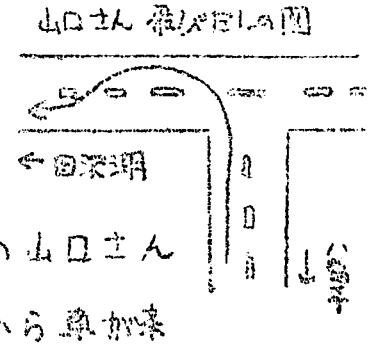
MEMO：　柳沢　一夫 ¥200　大沼　一人 ¥100

もかかわらずトップだった。八幡平見物は雨がひどかったのでやめになった。それから酒田では東大のサイクリング部と一緒になったが、我々はなぜか必死で身分を隠し通した。

雨の八幡平から大沼まで下ってみるとうそのような晴天だった。ということでテントになった。しかしその夜から次の朝にかけてどしゃ雨が降り、ものの見事に浸水 ―― 教訓：海は必ず選ろう ――　それからこの日はV.S.O.Pを打破するために我々はピーマンの肉詰めに挑戦したが、でき上がったのはピーマンの肉盛りと膨大な量の挽いた肉だった。（肉の量に対してピーマンが少なかったのが最大の敗因だった。）

◎7月28日　恐怖のショートカット　　大沼→松葉（コース）

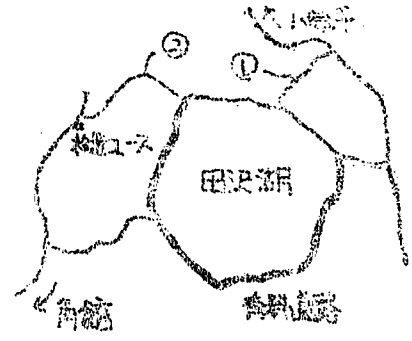
朝になってもかなりの雨だったので、しばらくはテント内でうじっていたが、結局11時頃に出発。アスピーテラインから341号線に出る十字路でブレーキ不調の山口さんが大きく飛びだし、うまいこと(?)向こうから車が来ていたら完璧に死んでいた。341号線は、はじめのうちは上りで結構きつかったが、そのうち川沿いの下りになった。川は前日からの雨のため激流になっていた。あそこに落ちたら命はない



MEMO: ②の道は領収書がついている。

な、と思うとなんとなく吸い込まれそうな気がしておそろしかった。

田沢湖に入る二本の道のうち、我々は北側の道(①)を選んだ。この道はエアリアマップでは、一般新道府県道の色がついていたがその実体は1/50地形図で------の道だった。路面は、雨水の通り道となっているせいかじゃり道を経過して河原の領域に入っていて、さらにその時は雨のあとだったので川になっていた。クツはすぐにずぶたしになってしまった。僕は2、3回こけて荷物を水没させそうになった。この第1のショートカットを抜けて田沢湖に入るころには空は青空となっていた。



田沢湖畔でしばらく休んだのち、我々は松倉コースへ向かう道(②)に入った。この道もまた同様だった、道が平坦なうちは普通のじゃり道だったが上りになるとすぐじゃり川になった。その上この道はひんぱんに車が通っていたので、車を気にしながら走らなければならなかった。その上道が下りになってしばらく行ったところで賀知音嬢さんの片方のサイドバッグがキャリア枠ごとぶっ飛んでしまった。今合宿初の大トラブルだった。

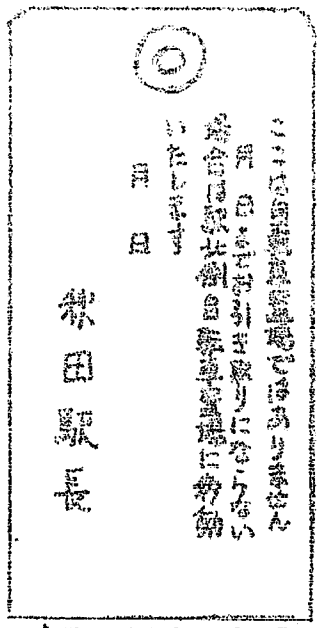
MEMO：羽後牛島は羽越本線で秋田の次の駅

どうしようもないのでバッグをキャリアにくくりつけて走った。

◎7月29日　　松島→秋田

途中、山口さんの前輪がスローパンクしていることがわかったが、修理はせずにそのまま走った。秋田まではアップダウンは少しあったが、それほど苦しくはなかった。昼食は羽後境というところでとった。この時食べたみそラーメンは汁が黒々としていてとてもしょっぱかった。

秋田に着くころには雨がぽつぽつと降ってきた。我々はまず羽後牛島という駅へ行って駅に泊めてくれるよう頼んだ。駅側は渋っていたが結局山口さんの学生証を預けることで泊まれることになった。その後秋田駅前に食事と朝メシの買い出しに行った。この時自転車5台を駅前に鍵でつないで置いていたら、1台おきにこのような札をつけられてしまった。



実物はお文字　縮尺3/4

また、ここでランドナーとBMX4車の2人組と会い、この2人も羽後牛島に泊まることになった。

この晩は早く寝るわけにはいかなかったので、紙マージャン

MEMO：　会津（このうら）

をやった。途中変なオジサンが寄ってきて斉藤さんにうそを教えていた。駅の中は蚊が沢山いてうるさかったが暑いのでシュラフにもぐり込むわけにもいかず、非常に困った。斉藤さんはものうち駅舎の外へ直接して行った、三杯は根性でシュラフにもぐり込んで寝ていたが、朝起きると蚊が食っていたところは汗でぐちゃぐちゃになっていた。

⑩7月30日　　秋田→会津

海岸沿いをひたすら南下、アップダウンナ強い向かい風で大いにばてしまった。はじめは永見さんがトップを引いていたがどんどん人と力が分くなり、中学生くらいのガキの自転車にも負けるスピードになってしまった。そのあとしばらくは僕がトップを走ったが僕もまた、力みすぎてバテてしまった。なおこの日は斉藤さんがチャー。斉藤さんはチャーのため、注文したカリ丼を半分くらいしか食べられなかった。この日も宿泊場所はきっちりしていなかったが結局象潟の少し手前の金浜というところに水道完備の砂浜を見つけ、そこにダマで泊ることになった。風が強かったのでテントはりには少し手間どった。特にフライ用のプラペグはすぐ風に負けて抜けてしまい、使いものにならなかった。

MEMO 鉾立山荘　一泊 600円

◎7月31日　風に負けた鳥海　　金浦→鳥海(鉾立山荘)

象潟で思い出しをして昼メシを食ってから鳥海へ向かった。鳥海はとてもつらかった。ブルーラインに入る前の上りもなかなかのものだったし、ブルーラインに入ってからは10%の標識の連発。それも「10%　この先800m」というようなのもあって大いにかげってしまった。その上風が強くカーブを曲るたびに壁になったり全然進めなくなったりで全然ペースがつかめなかった。僕はちっとも力がでず、後半は他の4人に見全にシキはなされてしまった。やっと上にたどりついたら4人の他に山形ごもり班もいて、何となくぼつが悪かった。

昼メシはメシをガス金でたいたので、初めてまともなメシを食うことができた。

◎8月1日　うどり　　鉾立山荘

鳥海登山の予定だったが天候が悪いので断念となった。山形ごもり班を見送ってからはゲームセンターで遊んだり，ごろごろしていたりしていた。

◎8月2日

また天気が悪かったのでついに登山をあきらめ下山することになった。雨のため視界は5メートル程度だった。当然下りも

湯ノ浜（正しくは湯野浜）　¥0

スピードをおさえて走らなければならなかった。あーつまらない。けれど後半はガスが晴れたのでかなりスピードを出すことができた。吹浦まで下りたところで、海水浴にするか、それともある程度走るかということになったが、そこで海水浴となると31日から3日間で30km程度しか走らないことになり、それではあまりにも軟弱なので走ることになった。この日は結局湯ノ浜という熱海のふんいきが漂うところまで走り、そこの砂浜（駐車場兼キャンプ場）でテンぱることになった。

タメシのしたくをしている時に寒冷前線の通過に伴うものすごい雨が海のほうから砂といっしょに吹きつけていた。その音は大型トレーラーがテントのほうへつっこんでくるようなすごい音だった。少々浸水があったが、ゴザシの下のかわいた砂をこすりつけたらすぐにかわいた。自転車のほうは、この雨のために山口さんの自転車のフリーが空転しなくなってしまった。しかしこれは水洗いによってもとどおりになった。しかしこの時は本当にラッキーだった。テンぱる場所がちょっとちがっていたら完全にOUTだった。

豪雨のあとの図 ⟶

◎8月3日　海水浴　　湯ノ浜

波が少々高かったので泳ぎにくかった。またところどころに水が異様に冷たいところがあった。一日中遊んでいたらかなり疲れた。また日やけで背中がひりひりした。

夜は山口さん，永見さん，僕の3人は外で寝てみることにした。しかし僕は寒さに負けて夜中にテントへ撤退してしまった。

◎8月4日　　湯ノ浜→月山荘

まずは湯ノ浜から鶴岡まで走った。そこで月山のキャンプ場に確認電話を入れたところ，キャンプ場は団体の予約があるのでダメということになってしまった。そこで我々は月山は新道で楽をして会った力で泊まれそうなところまで下りていくことにして出発した。新道はずっとゆるい上りで楽勝の感じだった。しかし世の中はうまくいかないもので，なんと新道は未完成。結局は旧道まで上っていかねばならなかった。どっと疲れた。旧道とは湯殿山有料道路のところで合流。そこからもしばらくは上りだった。予定外の上りだったので苦しかった。このころからぽつぽつと雨が降ってきた。旧道を上りきって下りに入ったところで僕と三井が衝突してしまった。原因は先頭を走っていた僕が後ろの方からの声を聞いて後方を確認せずに急停止し

MEMO: 根子（ねこ） 左沢（あてらさわ）

たため。三年は負傷，全く悪いことをしてしまった。僕たちが遅れたこともあり，その日のうちに山形のほうまで下るのはやめになり，泊まりは国民宿舎の月山荘となった。

（なお，月山の新道は本当は自転車通行禁止だった。）

◎6月5日 悪夢の地蔵峠　　月山→左沢（旅館）

前日，あのまま下ってればここを通ることはなかったかも知れない。この日，いざ出発という時になって国民宿舎のおねえさんに国道が不通だと知らされ，我々は大きくまわり道をしなければならなくなってしまった。そのまわり道の途中にあったのが地蔵峠だ。地図で見る限り，途中には何もないようだったので，我々は非常食（ビスケット程度）を買ってから地蔵峠に向かった。道は途中の根子というところまでは舗装だったが，そのあと上りになるとすぐにじゃり道にかわった。じゃり道の峠，さらに雨と条件は最悪だったが，それでも1時すぎまでには峠を越えて舗装路に抜けられる筈だった。しかし悪いことは重なるもので，途中で斉藤さんの後輪がパーストし，雨の中での修理となった。この時永見さんはずっと先に行ってしまっていたが，そのうち戻ってもどってきて修理に加わった。

一時間弱かかって修理は一応終わったが，このあとは斉藤さ

んは大幅をとって押しになったのでかなりペースはおそくなった。下りに入ってからもまた大変だった。ものすごく急な下りだったため後ブレーキしか使えない斉藤さんとブレーキ不調の山口さんはフットブレーキを併用したり，降りて下ったりしなければならなかった。また山口さんのサイドバッグの革ベルトが切れてバッグが落っこちたりした。そしてついには前々からぐらついていた山口さんのキャリア枠がふっとび斉藤さんと同じく片輪になってしまった。ずっと下っていくと道を横切って川が流れているところがあった。そこで我々は斉藤さんのタイヤを人里までもたせるべく，最後の大修理を行った。この間多くの車がこの道を通っていったが，川が横ぎっているのを見ずに突っこんでいく車もあり，手前で一度止まってその深さを確認してからおそるおそる通っていく車もありで，見ていてなかなかおもしろかった。

そのあとは斉藤さんが先頭を，タイヤにショックを与えないように気をつけながら走った。このあたりはかなり長い距離を走りつづけることができた。最後までは走り切れなかったがすぐにタイヤも手に入れることができたし，なんとか左沢という駅にたどり着くことができた。　やっと悪夢の日は終わった。

MEMO: 坊平　一人 ¥150

◎8月6日　3人おっこちの蔵王　　左沢→坊平キャンプ場

まずは山形まで走った。山形で買い出しをして蔵王へ。我々は蔵王温泉のほうへは行かないで、上山のほうから上った。この日は初めて炎天下での上りを経験することになった。僕は完全に暑さにがびってしまった。その上坂も急で僕は全く戦意喪失。斉藤さんも僕と同様かったるそうだった。山口さんも体調が悪そうだった。一方永見さんと三井はすこぶる元気で2人はどんどん上っていってしまった。僕は2人についていくのはかったるかった(不可能だった)ので山口さん、斉藤さんと休み休み、水及び清涼飲料水をがぶ飲みしながら、ちんたらと上っていった。エコーラインの手前の分岐点で2人は待っていてくれたが、走りだすとまた同様に2対3に分かれてしまった。

坊平キャンプ場は国設だけあってゴミの始末その他がとてもきびしかった。最悪だったのはチェリーナ麺が使用禁止でクレンザーを使わなければならなかったことだった。クレンザーの容器には「豊かな泡だち」と書いてあったが使ってみると大うそで、かぶづけがちっともはかどらなかった。一チェリーナは偉大だ。それからこの日も夕方から雨に降られたが、幕もしっかり張ってあったので被害はほとんどなかった。

◎8月7日　きょうも雨　　坊平→遠刈田

またも、永見さんと三井は強く、3人は大きく引き離されてちんたらと走っていた。すると後ろから広島工大の連中が続々とやってきて約5人に追い抜かれてしまった。これではいかんと言うことになりその後は少し力を出して走り、結局2人だけ抜きかえすことができた。この日は久々にいい感じで上ることができた。頂上付近は雨のためかなり寒かった。またハイラインは長くはなかったが少々疲れた。そして苦労して上っていったのにお釜は全然見えなかった。非常に残念だった。これで今合宿は山の上は全てくもりか雨。全くひどいもんだ。結局頂上付近を少し歩きまわっただけで下山となった。下りはじめはガスっていて寒かったがすぐにガスはなくなり晴れとなった。そこで一度休んで記念写真をとり、さらに下った。蔵王の下りはカーブあり、ジャンプ台ありでとても楽しかった。宿泊は遠刈田のキャンプ場の予定だったが行ってみると団体さんが使っていて、仕方がないので橋の下の河原にダマでテンぱった。広島工大の連中もあとから来て我々の横でテンぱっていた。夕方、川の向こう岸から子供づれのオッサンがこっちの方へ向けて口ケット花火を打ち上げてきた。そこで我々も永見さんの買って

MEMO：中国製花火といえば魔術弾

また中国製のロケット花火で応戦しようとしたがさすが中国製だけあって、射程距離も短く、また中には飛ばないうちに爆発するのもあって全然だめであった。

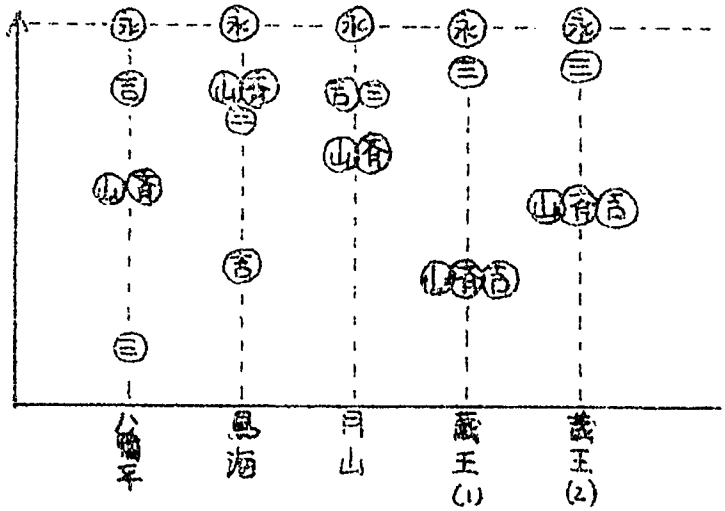
◎8月8日　最終日　　遠刈田→仙台

我々の朝メシが食パンと紅茶なのに対して広島工大はメシとみそ汁だった。しみじみと差を感じてしまった。我々が前の晩の食器を川で洗っている間に彼らは出発していった。我々は仙台まではそう遠くないということでゆっくりと出発した。遠刈田から2kmほど行ったところで我々は川崎町のほうへ抜ける道に入った。その道は思っていたよりもかなりきつかった。かなりの上りで、その上途中からはじゃり道でかなり走りづらかった。川崎町に出てからは286号線でひたすら仙台に向かい、2時ごろには仙台に到着した。昼メシは駅の地下のラーメン屋で食った。この時、店の人が僕と有隣さんの分の伝票を置いていかなかったので、2人分の代金で4人が食えることとなった。非常にラッキーだった。しかし、このあとはなんとなくそのラーメン屋の前は歩きづらかった。そのあとはセタ見物をしたり、大負民をしたりして過ごし、夜は仙台駅の3階で眠った。仙台駅3階は駅寝には最高の環境だった。

考察・感想編

1　力について

各上りにおける各人の速さをグラフにするとだいたい下のようになります（永見さん基準）



＜論評＞

永見さん：　バカ力の持ち主、上りでは常にトップ。八幡平ではキャーだったがそれでも後はついて行けなかった。後半は疲れのためか三井に肉迫された。

山口さん
斉藤さん：　この2人は力があるのかどうかはっきりしない。いつも2人でマイペースという感じだった。タバコを吸うとこのような走り方になるのだろうか。

三井　　：　八幡平では押しに徹したがその後はひたすら

のぼり調子。蔵王ではバカカマンに変身してしまった。三井は常人と違って走れば走るほど力が出るようだ。全くおそろしいやつである。

2　キャンプについて

(1)テント

○5人が寝るには少々せまかった。

○プラペグが力なしだということがわかった。

○やはりマットはテントの必需品であるようだ。

――三井はかなり苦労していたようだ。

(2)めし

○小さな町には新鮮な野菜がなくて困った。

○結局，V.S.O.Pから脱出できなかったのが残念だった。

○いつまでたってもメシたきに食糧がなかったのが残念だった（いつも水が少なくて途中で足していた）

○できればビーフエを2つもっていきたい。（カス式のやつは力が足りない）

○使った食器・すべはその日のうちに洗ったほうがいい。（一晩おくとこびりついたものはとれにくくなるし，残飯は気色悪くなるし，全くいいことはない）」

○朝食をもっとリッチにしたい

(3)その他

○後半は毎晩毎晩大雨だったのでさすがに疲れてしまった。

3　自転車のトラブルについて

(1)パースト対策

○やはりタイヤは一年ごとに変えたほうがいいようだ。

○広島工大の連中はスペアタイヤをくくりつけて走っていた。

(2)キャリア

○思うに、あれだけの重みのかかるサイド枠を、4本のボルトだけで固定するのには無理があるのではないだろうか。（本格的なキャンピング車では大ていサイド枠はシートステーにとめられている。）

4　他の大学と比較して

○東大も広島工大も出発前にはしっかり体操をしたり円陣を組んだりしていた。

○東大も広島工大も、うちよりもまともなものを食っていた。

5　反省点

○前半は地図を見ないでただ先輩たくっついて走っていた。

○月山で三井にけがをさせてしまった。　　（おわり）

夏合宿 『東横組』

… 東横組といいながら、東横線を使用している のは、この私だけ、という事実。

7月26日（木） 上野駅

三浦コック長、名取企画部長、菜山書記長、石田会計係の4人が、「組長はどうした。」「組長はこないのでは…」と少し不安になって来た8時すぎ、Ocean-boyになりきった西口組長が登場した。西口組長はこの合宿で行く先々、皮をはぎとってちらかすことになる。

（常時登場する人物の紹介 オワリ）

同月同日 12時すぎ、車中にて、（厳密には27日）

まわりが眠ろうとしている中で、この5人組は「大食民」をワイワイ・ガヤガヤとやっていた。おかげでボートの女性が逃いこんで来て三浦コック長のとなりに坐った。そのせいではないだろうが、三浦コック長は一人で敗け続けた。なお、このトランプを持って来た西口組長は、このことで一端、組員の尊敬を受けた。なかには、耳の功、という声も聞かれたが。

7月28日（土）　入道崎へ.

午前中、雨のためテントの中でウジウジしていたのがウソみたいな快晴になった。入道崎までの有料道路はすばらしく、まっすぐのびた道路の先には真っ青な海だけが見えるゆるやかな下り坂があり、すぐ後ろに名取企画部長の気配を感じながら、絶対に後ろは見ないでぶっとばした。　ウッ、海につっこむ～

同月同日　at 男鹿半島・入道崎

「オイ、あの子がカワイイと思わないか。あの胸がいいっぱなしだよ、あの胸が。」　（西口組長）

ちょうどこの入道崎が非常に気に入り、オッサン班に追いつかれるのではないかという心配を振り払ってテントをはることにした。近くのテントにはカラオケ大会でワイワイ騒ぐオジン・オバン集団がいたり、組長お気に入りの女の子がいたりして。我々ちょうどは静かに、今合宿最初で最後の流れ星観測をした。

7月29日（日）　能代駅前・飲み屋にて

「ホテル宿泊にかんぱイ!!」

生ビールがうまかった。

7月30日（月）　荒瀬　　9才

「ウ〜ン、寒そうな駅だなぁ。ヨシ！ここで駅寝。」

But，日が暮れる前に廃校を見つけたため移動する。なんと、その校庭には農村付土俵があった。

「ウ〜ン、かっぱり荒瀬 !?」

ち人は土俵の上で食べられないほどのシチューを作った。

「廃校内でキモダメシをしましょうヨ。」

ビールを飲みながら西口組長の怪談を聞いたあと、提案の石田会計係が言った。

三浦コック長…一番最初にいびる。

柴山書記長…割と乗り気、しかし無言。

多数企画部長…「そんなの、いいよ」と言葉少なげ。

西口組長…笑って無視。

7月31日（火）　田浦湖　　9才

「ボクとしては、外食キャンプにしたいです。」

どうみてもただの民家、という感じの家の前でナンダカレダとやっているうちに、いつものパターンでまた雨が…

やむなく外食キャンプ。

「カツ丼というのは、ごはんの上にカツがのっかっていて、カツだけじゃないですよ。」…5人が丼のとごはんを注文したのに対して食堂のおやじさん。

「タツコの像にカンパイ!!」…タツコの銅像の美しさにまいっている西口組長

8月1日(木)　大沼YH　夜

「カレーライスを2回もおかわりした人には前に出て歌ってもらおう。」というわけで我々4人は前に出て耳をかいた。中でも石田会計係は再度前に出て、またしても歌出した。この時、葉山書記長はベッドの上でスヤスヤとねていた。そういえば葉山は先頭を切って2回目のおかわりをしていたような…

☆ここで読み返してみて気がついた。なんで夜の話ばっかりなんだ。少しは昼間のことも書け!というわけで

8月2日(木)大沼YH→後生掛温泉→八幡平→大沼YH

at 後生掛温泉　10時頃

「アレ〜、オイ、こないゾ。」…アレ〜、の言い方に特徴のある名取企画部長

「マッタク、葉山はどうしたんだ。」…三浦コック長

「アレ、雨が降ってきた。」…石田会計係

――約5分後――

「チョット見てくる。」…力のある三浦コック長

「雨やどりしてる。」…あとの2人

――約1時間後――

「背中がイタイヨ～」…石取企画部長

「ナンダ、この雨は。」…三浦コック長

（ブツブツ…なんでこんな雨の中、走らにゃならんのだ…）…少々いじけ気味の石田会計係

at 八幡平バスターミナル内

「イヤー、ワルイ、ワルイ。（後生料によるなんて）全然知らなかったよ。」…笑って答えた西口組長

「……」…葉山書記長

――約1時間後――

「オイ、オイ、あそこのん、いいと思わない？」

その日、我々5人はバスターミナル内でトランプを楽しみ、（西口組長、お気に入りの女性をチラチラと見ながら）時間つぶし。バスで再び大沼YHへ…

8月3日（金）　晴れ

「君達、これからすぐ、どこかへ行くんだろ。」

我々が駅寝をしようと駅前に自転車をとめて、ひと息ついていると、駅の警備員らしき人が近みよってきてするどいけん制球を投げた。タッチ・アウト!!

仕方なく、我々はベンチに引き下がり、岩手公園内で堂々とテントピッタ。

夕食はあのワンコソバ。一口で食べれるような少量のソバを口に入れた瞬間、あのソバ投げオバサンがするどい手さばきで、ソバをオワンの中に投げ込む。ソバ投げオバサンの目の前に坐っていた名取企画部長は非常に苦しそうだった。我々が、何分の1秒というすきをぬってオワンにふたをしてリタイヤするに従って名取企画部長の苦しさは倍増していった。そして、遂に名取企画部長は無事リタイヤできるか、という頃になると、他のテーブルの人も身を乗り出してこちらを注目していた。

それから約2時間後、我々5人はビル屋上のビアガーデンで生ビールを腹に流し込んでいた。

8月4日（土）　早坂峠

さまよえる小羊のように、さまよい走った我々はやっとこさっとこ早坂峠につきテンぱりと成った。（なんせ、その日はキャンプ場が見つからなかった。）さあ、メシだ、ビールだ、ジンギスカンだ、と思ったら、「今夜も早坂峠は雨だった。」という訳で、テント内でジンギスカン大会が行なわれた。この試合、最初はコック長がレフェリーをつとめて平和に行なわれていたのだが、ジャッジへの反発・抗議が続出し、ついに三浦氏もレフェリー放棄、乱闘へと転向した。この乱闘で石田会計係はするどい手さばきで連続連勝!!組長などから抗議が続出したが、食べ終えた頃にはみんな満腹、大満足。5人とも天下取った気分になっていた。

8月5日（日）　竜泉洞

「今夜も竜泉洞は雨だった。」

「アレ〜」

夕食後、雨の中を誰がビールを買いに行くかでジャンケンをし、「ここで、という時に敗ける」某氏が敗けた。

8月7日（火）　宮古

「ロン！」「石田はよくふりこむなア～」

その日の民宿で1年のホープ、葉山書記長がはなやかなデビューをかざった。

8月8日（水）　宮古・浮立ヶ浜→中ノ浜キャンプ場

「アレ、オイ、船が行ってしまったゾ。」

我々5人がアゼンとする中で、乗るはずであった船は出港してしまった。会社側に手ぬちがあるのにまったくあやまろうとしなかったあのアホ社員には非常に頭にきた。まだアゼンとしている我々を尻目に、そのアホンダラ社員はスタコラスタコラと歩き去り、ますます頭にきた。

いじけにいじけきった我々5人は仕方なく宮古市内へ買い出しに出かけ　7500円近くもつぎこんで近くの中ノ浜キャンプ場へ向かった。いじけて走っている時にはいじけた道に出会うもので、途中で住宅地に迷いこみ、あげくのはてには目の前から道が消えうせた。がけくずれで道がなくなった岸壁沿いに、自転車と荷物とを別々にして、どうにかこうにかかついでキャンプ場についた。

我々が、こうしていじけていると天気もいじけるようで、キャンプ場につくと、また雨が降り出した。天がいじけると地もいじけるようで、1人200円もとるキャンプ場にしては地面が悪すぎ、石ころだらけで場所選びに苦労した。この調子だと食事でもいじけるわけだが、我が「東横組」に限ってそのようなことはない。三浦コック長のおかげで食事はrichそのもの。ちなみにその日のメニューは、

- 焼き肉 …上質のブタ肉にタレもたっぷり。これが本当に食べきれないほどあった。(玉ねぎ付)
- ごはん …1人、優に2はいは食べれる。
- サラダ …レタス、トマトand マヨネーズ
- デザート …バナナ

それにゆえてたしか、即席ミソ汁もあったし、なによりビールが4ℓもあった。昼間のことはすっかり忘れて、

「無事に合宿が終わってヨカッタ。ヨカッタ。」

(ちなみに、その日の買い出しは、翌日の朝食分も含めて7500円近く使った。)…なぜか2度目でした…7500円を強調したいールに…

次の日は見事に晴れてしまい、なんともしまらない解散日となった。「海水浴したい!!」あとはためいきだけ…

書き出すと止らない石田会計係もここに至ってストップ。残り半ページぐらいはまじめに書こうということで、「東横組」の"走り"（天候・気分も含めて）のベスト5，ワースト5を独断と偏見でもって発表したい。

ベスト5
1位…男鹿半島入道崎までの有料道路。
2位…安家洞から太平洋（下安家）へ抜けるダート。
（もうすぐ太平洋というところがなんともよかった。）
3位…早坂峠の下り。（木漏れ日をあびてすっとばす。）
4位…石峠（竜泉洞～安家洞）シブイ！
5位…男鹿半島南側の海岸沿道路。（しいてあげると）

ワースト5
1位…2日目の八幡平の登り。（なんだあの雨は！）
2位…津軽街道（→盛岡）（トラックが多くて…）
3位…寒風山（ただのぼっただけ、なにも見えず）
4位…カツギがでた岸壁の海岸道みたいな道。
5位…オシガで田沢湖へ抜ける峠越えダート。

最後に一言。

「天気がよければな～」

9063
石田 あつむ

おっさん班大純情夏合宿

作　今泉浩幸

序章

最初に出会った雨は、荻窪駅に向かう途中であった。かわいたアスファルトの上にできた黒い斑点はみるみる広がり、砂塵のにおいが妙に気になる。濡れたフレームを拭きつつ鞄行嚢にすべてを収めると、さっそくの雨に暗示される前途多難な行軍を前にもうほっとしている自分に気づき口許がゆるむ。

2:20発だというのに上野駅に着いたのは6時前。まもなく宇佐見が現われる。14番線ホームはカラフルな身仕度の若い男女にあふれ、はやめに来た自分たちの洞察力に勝利感が込み上げる。先輩たちはまだまだ現われる様子がない。

弁当を買った。上野駅ではどこか自分の文化圏とは異質な文化圏がはじまる。長く博多で暮らしていたために感じるのかも知れない。なにしろ日塩より北へ行くのは今日がはじめてなのだから……。せっかくのセンチメンタリズムをぶち破って畑井さんが現われてしまう。

ホームの中央に陣取り、トランプをはじめると、いまいま新歓コンパ以来一方ならぬお世話をほしいままにしている志波さんが登場、やや空白があって最後に金井さんが

元気よく現われて、まずは 5人とも無事に集合となる。

9時を過ぎるまでに14番線からは約2本の列車が出発していた。先程の若い男女は皆これらの青森行に乗ってしまい、我らが「おが3号」が入線するころにはホームはすでに閑散としていた。自分の資が東京で身ぐるみはがされやっと汽車賃だけをひねり出し愛する妻子の待つみちのくへいま帰らんとする世間知らずの出かせぎ人と二重写しになり、勝利感は敗北感へとひしひしと様相を変え、3時間の努力も価値の薄らいだものと化していた。

車両は1人で4座席を独占できる程にすいている。まわりを見回しても子供づれの労働者風のおっさんの顔しか見えない。まあゆっくり寝られるであろうということで――寝るしかないというビジョンが大勢をしめおやすみなさい、ということにあいなる。

と、まあNHK大河ドラマもまっ青、国大協も来年の現国はこれしかないといわんばかりの80年代最初のベストセラーにふさわしい導入部となったが、傾向と対策「部誌」をひもとき、みなさんシリツボさという伝統的黄金の因襲を踏襲し、この辺で、製本代も嵩むでしょうから、おっこちして後は思いつくままオムニバスでいきますぜ。

本章

締切近しということで このあたりからは 下書きなしのぶっつけ本番、思い出し順の支離滅裂、乱筆乱文お許しください。「おいしさは省略なしね」という金言もあることですし。

『うつくしきもの』

これは何と言っても八幡平の下り、栗の切れ間からさし込む太陽の光のすじと深い緑の山はだ、岩手山と北上盆地の眺望、実に素晴らしかったですよ志波さん。(注 このとき志波さんは隧中花輪でおってち、またとない八幡平の晴れ間を見逃したのでした。) それから、おだやかな日本海の眠り鯖ブルー、意外で開いた季節はずれの津軽海峡冬景色、などなど 今となっては あらゆるものが美しいのです。時は美しいものをより美しく、平凡なものをも美しく、みにくいものまでも美しく変えてしまうのでしょう。だから かつ丼を注文したのに なすの煮物まで出してくれた十二湖のドライブインおさごのおねえさんや 志波さんを触りし後に大正安全蚊取器の他に石膏まで買わさせてしまった能代の薬局の女店員さんまでも美しきものとして私の脳裏に刻まれている。(ところで、この石膏ですが、酸湯の浴場で志波さんは若き女性に見とれ、忘れてきてしまったんですよ……ほんとになんという人でしょう。)

『むくつけきもの』

まず、ぬれたパンツのビニールパック、そして宇佐見君のジュースの飲みっぷり、日に5.6本はかたかったでせう。

『とらぶる・あんど・あくしでんと』

第二日　宇佐見のチェーン割れる。あたりかきわすいつ当りする。今泉君のめがねのフレームぶち折れる。以後たびたび後は百円ライターとはんだによる特殊技術を披露し、注目と喝采と驚みを浴びる。(現在も愛用中　55.1.26.)

第三日　金井さん国民宿舎を出て数分後、景気のよい音と共にパンク、酒井さんはぶっちぎったまま帰らぬ人となりそうになる。つづいて八森あたりの海岸で金属砂にはまり、金井さんのつりーは坂も下れぬ重傷に陥る。そこで本日の宿泊地十二湖駅でオーバーホール。僕と酒井さんもつきあいでグリスアップなぞやってしまう。しかし金井さんは立ち直れず、以後人一倍苦難の道を歩むことになる。

第五日　金井さん今度はバースト。タクシーで数キロ五所川原まで戻る。待ってる間に僕らはタクシーを呼んでもらった雑貨屋ですいかの接待をありがたくうける。

第六日　金井さんつづいてスローパンク発覚。言葉なし。

第七日　蟹田にてリミット3分の高速輪行。ウルトラマン

もカラータイマーが点滅しはじめてからが長いのと同様に、僕たちの場合はディーゼルカーがちゃんとまっていてくれました。

第八日　八甲田に向けて青森を出発後まもなく5人ともどろどろのアスファルトの海へ突入　こともあろうに海井さんはここで転倒、体中コールタールで黒く染まり、ガンに対する免疫を作れたかどうか。とにかくコッドガードもフレームもべとべと、ダムやの溝も溶けてなくなる大惨事でした。

第九日　金井さん　ふうじゃに祀され、雨も降っていたということ、仙台に早く着き過ぎるということで一日休養。

番外『寝物語』

一番気に入ったのは十二湖の無人駅、鉄筋コンクリート、トイレ付、夜間照明施設有、駅から0分、知恵の編見傳、木製ベッド3人分、ただし僕は2回程ころげ落ちました。

次は、五所川原市役所前、消防署のおじさんありがとう。がきはうるさく、人目にもついたが、なかなかよかった。僕としては、人に恥をさらすのも趣味のひとつですから。（がきはあとで再び夜間出張の予定です。）

最悪は初日の男鹿のテント村、暴走族と爆竹と子供と中年のおばさんとうるさいこのとっつあんのラジオ体操はたまりませんぜっと。

『精選合宿語録』

酒井さんはいつも「……というビジョン」,「あたくーしゅうしゅうかつかねぇーや」の一点張り、ワンパターンでうんざりという声がしきりというビジョンも…。　そして、そして、八甲田のロープウェイの山頂公園駅近くで誕生したのが東工大サイクリングクラブ史に残る名言「右見るやや、45°で胸に出し、顎をすり下げ、腿に手をあて、できれば親指を胸に、下くちびるを上くちびるに軽く乗せ、鼻から息を抜きつつ、のどひこを震わせ一気に んーー。」　これが正調、元祖、宮村さんの「んー」ですが、現在では、その後の観察により「手の甲の方を体側につける」ことが重要なポイントとなっていることが判明いたしました。なお工大祭でのだぼだぼの背広を着た小川さんの軽快な足どりもレパートリーに加わりましたので。

『拾遺談』

最後に、残った話を拾い集めました。

津軽半島の中央部 R339 に今泉という部落があります。そこの食堂で4人は唐揚勇んで大きな用をたしたのですが、私はささやかなプラムドでそれだけはできませんでした。なお、ここで酒井さんの7日遠征の記録は収束しました。

五所川原市役所前広場では 大いに五所川原人とコミュニケーションを交しました。その じゃり どもの話す言語は まるで異国のものであり、彼らは僕らの会話に対して「女みたいだべ」という印象を強く抱いたようでした。そして私は カイコツと、宇佐見は ヂブダキ という称号をさずけられましたが、口さけ男の称号がでなかったところを見ると 口さけ女も番森までは進出できなかったことを思わせます。ついに 彼らは我れに対し、拳銃を開始しました。「男しも落ちついて食えんやないけー」高知風 水をなまりの博多弁でまくしたてても対抗できませんでしたが、QBBチーズ はずして 彼らは撤退しました。

十和田湖は 元来の姿の前でのできごとです。おいどんは なにゆえか 我を忘れ、いつの間にか 水にまじのぼってしまっていたのです。あれれ ばかりの観光客の嘲笑の眼は いっせいに おいどんに注がれ、おいどんは『この夏一番に ヤンゼオンは。毛利さんは うつむきかげんに 他人の振りを…。しかし、彼の顔もまっ赤に染まっていました。おいどんは立場をなくし、ただすら うろたえた という 始末です。

盛岡から仙台に着いたのは もう夜中でした。七夕も残骸しかなく アナウンスはろうろうさく 寝るところもありません。朝方「わいは仙台駅の主じゃ」と自称する一見おっとろしい あん

ちゃんに話かけられました。ここでも尾井さんは知ってか知らずか他人の振りです。後の自慢は 斉藤とも子とリリーズを仙台駅で見かけたことがあるということと、近々TBC夏まつりとかいうのがあって仙台に榊原郁恵や桑江知子がやって来るという2つのことに集約されます。僕らんは こみあげる笑いを抑えきった甲斐あって ショバ代をとられることもなく、うちわまでいただいて激動されてしまいました。

終章

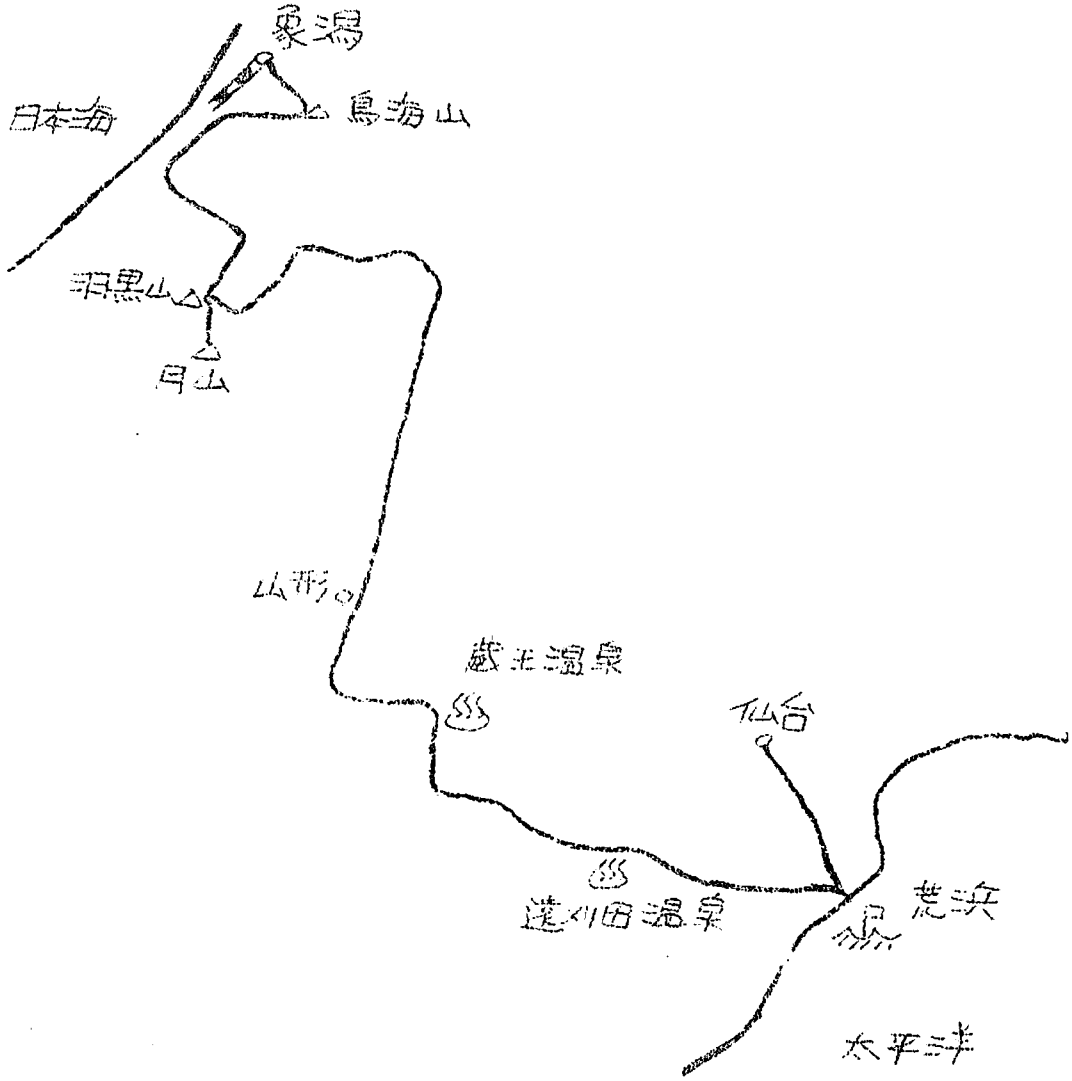
序章では『田辺靖雄』をアイドルに、本章では『はみだし』をアイドルと想い方式曲ひに楽作に励みましたが、いずれも4枚目の白で国士無双をよってしまいました。 終章だけはたんやおとできればドラ1ぐらいであがりたいと思います。でも自分だけは考えながら十分爆笑しましたから満足です。

とにかく、酒も煙草もやりません。水見さんのように女の子だってひっかけません。ただれたすら走りました。いやいやなんと美しい夏合宿でありましたか。 最後に尾井さん、どうもありがとうございました。そして出演者の皆さんプライバシーの優暴をお許し下さい。僕は お礼とお詫びだけは忘れないよい子です。だって、新歌コンパの翌日だってちゃんと ごあいさつをしましたからね。 (おわり)

夏合宿　－山形ごもり班－

3年　鈴木真人

我班のコースは次のようであった



同行者は　4回生の古木登さん，1年生の嶋信夫，同，村瀬健　である。日程は，7月29日～8月9日である。それでは日程にそって話をすすめることしよう。

7月29日（日）

東京 ▬▬▬

いよいよ出発である。上野駅より鳥海山のふもとの象潟に向かう。例のごとく夜行列車だ。ところが列車はぼろいし、村瀬はのんびり来るしもう頭にくるわ！

7月30日（月）

▬▬ 象潟 ―――― 鳥海山5合目

象潟に着いたら、空はどんよりくもり空だし、寝不足で眠いし、とにかく「あ〜〜あ」という感じ。だからPOWERが出るわけがない。鳥海山の上りは風が強く寒くて最低。

とにかく早く上まで行こう

なんとか乗って行こう

風が強くて押して行こう

もう合宿やめて帰ろうかな

という感じの会話であった

（会話についてあえて名前を出さないが、各自推測してほしいものである）

7月31日（火）

鳥海山5合目（に居ただけ）

この日は予定では、鳥海山登山であった。がしかし山はげスだらけ、登山なんかしたら死しかないね。その上 最悪のこと

が起きてしまった。永見たちのグループに追いつかれてしまったのだ。あっけにとられる我班、それを見てニコニコしている永見、山口、斉藤、三井、吉田。けど我班にとってひまがつぶせて良かったと言っておこう。

8月1日（水）

鳥海山5合目――――酒田――――羽黒山（国民休暇村）

結局 ガスったままであったので登山中止。出羽三山へ向かうことにして下山や。それにしてもこの合宿で鳥海山の全容が一度も見れなかった 畜生！ 上ではガスだったのに下では良い天気。暑い暑いとぶつぶつ言い、村瀬はカメセットを背負うがら走るし 俺の足はだるいし、嶋は先に行ってしまうし 古木さんは元気そうでもうこの先が心配であった。とかなんとか、かんとか言いながら羽黒山国民休暇村へ着いた。あ～よかった

8月2日（木）

国民休暇村――― 羽黒山（参拝）――― 国民休暇村

この日も天気があまり良くなく、羽黒山へ参拝に行く。羽黒山の階段は急で、雨で濡れていてすべりそう。そのかいあって五重塔のすばらしかったこと、もう一同感激！

この国民休暇村は居ごこちがよく連泊をまぬこんざしまったもちろんテントですよ。さて 鳥海山がだめだったので月山に登ることになりました。これも天気しだいですが、この登りオ

についてですが、8合目までは道があってバスも8合目まで行っている　そこで出た意見は

とにかくフリーラン装備で自転車で8合目まで行こう

バスで行きたいな！

と一人だけ軟弱なんだよな、結局、自転車で行くことになった

8月3日（金）

国民休暇村 ――― 月山山頂 ――― 国民休暇村

この日は快晴！さあ出発だ、とにかく8合目まで上りオンリー各自マイペースで行く　と皆の期待を裏切って鈴木くんトップでぶっちぎり、やった～～

月山登山はおもしろかった。山頂まで往復3時間ぐらいでいい運動になったし　けしきがすばらしかった（山頂ではガス）鳥海山は登れなかったが月山に登れて良かった

8月4日（土）

国民休暇村 ――― 尾花沢 ――― 山形

この日はまた天気が悪い、もう信じらんないよ～この日の予定は尾花沢のあたりのキャンプ場であった、しかし尾花沢に着いたのは昼ごろ　そこで山形まで無理して走ることになった走行パターンはトップ鈴木そのあと嶋、村瀬、そして古木さんの順である、この日はもう走った、走った　100kmをこえる走

りに一回あせん！山形で民宿にとまろうと思ったら民宿なんてない。しかたなく素泊まり〇〇〇〇円に泊る　夜はリッチにキャバレーへ行った人はだれもいなかった。天気は雨じゃ

8月5日（日）

山形 ――― 蔵王温泉

朝起きてみると雨であった。とにかく蔵王に行かねば。この日の上りでは一年生コニビに上級生はかるくぶっちぎられてしまった。蔵王温泉はさすがに観光地　人がたくさんいた。そして見渡すと斜面にはリフトがいっぱい　すげえや　温泉というだけあってイオウのにおいがする湯があった。

このころからはたしてお釜が見えるか否か心配になってきた　もし見えんかったらどうしよう。　たら～～っと

8月6日（月）

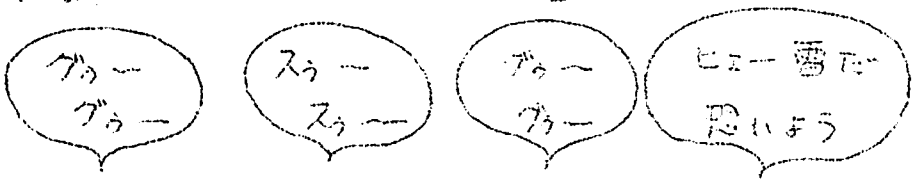
蔵王温泉 ――― お釜 ――― 蓮メリ田温泉

あ、晴れてる　これならお釜が見れそうだ　というわけで蔵王ライン、蔵王エコーラインを走る。ここでも鈴木くん得意のぶっちぎりが出てしまった。すんませんお木さん　お先に

そして運命の一瞬　見えた　お釜が見えたぞ！バンザイ！お釜は全く不思議な色をしていた。永見、山口、斉藤、三井、吉田　今度行ったら見えるといいね！

さて下りた。皆　車もかまわずぶち抜いていく　さすが自転

車というところだ。この日の宿泊地の遠刈田温泉のキャンプ場が○○学園の貸しきりでこっちは河原の工手の上でわびしくテン張る。この日の夜は天気が悪く雷だったらしい



と。ひとりお不さんだけがその恐しさを語ってこいた

8月7日（火）

遠刈田温泉 ―――― 荒浜

今日はいよいよ太平洋が見られるというのにすた雨。もういやだ雨は、雨の千号線を仙台に向けていた走る。仙台の近くの浜ということで荒浜に行くことにする。荒浜に着いてうどっていると晴れてきた。明日も天気は良さそうだ。よし荒浜で運泊だ。明日は海水浴&日光浴や。この夜は華麗なる花火大会であった

8月8日（水）

荒浜 ―――― 仙台市街（夕方：七夕見物）―― 荒浜

この日は朝、日の出から上天気。鈴木くんは日の出とともに起き日光浴。久しぶりに天気が良く暑。上きげん。海水浴場と言いながら実は波が強くて泳いでは行けない所なのでしかたなく水あそびするのみにとどまり、ひたすら日光浴をする。前日までは、松島へ行こうという案もあったがあまりに天気がいい

のでやめ、古木さんはたいへんうれしそうな顔をしていた　この日ばかりは　天気の悪かったことも忘れて楽しい一日を過した。夕方近く　バスで仙台市街へ仙台七夕を見に行くことになった　仙台七夕は、すばらしいという話だったが行ってみてがっかり、つまらないなんてもんじゃない、仙台の人には悪いがたいしたことはなかった　バスにせっかく乗っていったのに！

8月9日（木）

荒浜 ―――― 仙台　（打ち合げ）

今日はいよいよ打ち合げだ、長かった合宿も今日で終わりだ　朝　早くにテニスをしたんで仙台へ荷作りをした、そうしているうちにもう昼近くになった、このころから駅前にTITCCのクラブ員が集まり始めていた、打ち合げの時間になった、しかし、西口、三浦たちの班がまだ来ていない、どんくさいやつらや　夜は旅館の少ないわしたがまんしるから11時すぎまで合宿の話をし、たいへん有意義であった　本当に楽しい打ち合げであった

以上で合宿の話は終るであるが　いろいろと感想を述べてみたいたいと思います。

まず今回の合宿が4人で行なわれて　このことはたいへんよかったと思っている、古木さんもそう言っていた、4人という

人数は　テント1つですむし、走る時も4人だと楽●●だし相談するにも適当な人数であると思う。

次に天気についてであるが今回の夏合宿は低気圧が東北地方にとどまっていたために雨の連続さがっかりさせられたこともあったが、それなりに楽しいこともなかったとは言えないだろう。それだけに農家での1日はたいへん楽しいものであった

くだらない話だけど　古木さんと青者がすけべな話を楽しそうにしていると一年生コンビはただ聞いているだけで、何も言おうとしない。質問しともわからないような顔をしているだけで　わかっているのかどうかもわからない。上級生として一言言わせてもらうと　もっと一年生でもどんどん会話に参加してほしいと思う。それに古木さんは青者のことを、なにかあるにつけて「バカ　スズキ」と言っていた。これはあんまりである　これでは青者がまるで本当にバカのようであって　一年生まで青者のことをバカだと思ってしまうではないか。これは人権無視であると思う　どう思いますか皆様は？

そう言えば古木さん、国民休暇村の女子トイレで落とした3,000円入りのサイフはどうしたんでしょうね。

とにかく楽しい合宿でありましたことを報告いたしました。

たいむとらいあル

1年3組　三井敏一

序章

T.T.それは男たちのドラマであった。これは血と汗と涙にまみれた男たちの記録である。最後は私たちに何をさせようとしているのか。

第一章　出発（たびだち）

出発の時が来た。号砲が鳴った。サイは投げられた。封は切られた。幕は上った。決戦の時が来た。鐘が鳴った。チンペーてしまった。やぶれかぶれ…　もうええんじゃ　早よう出発せえ～　Switch ON　―　ほんとにもうええ。ちょうど私は他の人たちと同じように、こっそりと出発した。その顔は、緊張しているようでもあり、平然を装うことに気を使っていて、また、何とかして思い切ってやろうでもあった。楽い出発するとすぐにカーブにかかってあり、そこを曲がるといくらか気持ち楽になった。そこには快感している雲があった。彼は後に何が起こるかなどとは、○○さんの○○○○ほども考えなかった。彼の目の前に白、まるで国旗を代表するかのように、つまり、白い丸のように富士山がそびえ立っていた。秋も深まりつつある良く晴れた日であった。

第二章　試練

スタートしてから何分経ったのだろうか。意識の中に点滅する影があった。私は手応えがついていない。それは、次々走者である吉田君でした。彼はいつの間にか横を走っていた。だが、私はそんなことには動じなかった。なぜなら前からこう言うということは聞いていたからだ。「勝つのはこっちだ」と思った。しかし、彼の平然の顔を見てなくなった。これは暴挙（暴走の為え）であったと思う暇もなくゴールを切られてしまった。うっすらと涙（なみだ）である。吉田君の姿という間にぼくの見える範囲から消えてしまいました。一瞬（いっしゅん）おかれまして、あとはやっぱりのセーターの端がくれるように、又は、くつ下の穴が広がるように、或いは、夏の入道雲のように、もしくは○○（ぎょうこう）のように――どうでもえ変わい――とにかく感じがわかってもらえればいいわけだが、とにかく、突然とぬかれてしまった。相手を抜くとその顔は実にいい顔をしているものだ。ぼくも昔（むかし）ランで、前半では抜いたりしてみる様、後半は合計すると負、負になってしまう。なさけないなあ。（体育）

第三章　自転車の乗り

まじめな話をしよう。やっぱり、サイクリングも、ある意味では風流なものであると思うのです。時にふと乗っていると、遠かに平地を走っているときは夢のようですし、坂を

下っているときは、鍋底を組んで飛んでいるような感じですが。でも、山重なっていて、鍋から汗が流れ出して目じりをかすめたとき。鼻の先からうしろへと流れていく器官にそのしずくが触れたとき。そして、まわりには草のすじく音と小鳥のさえずりと、それに自分の思う者の他は何もこえないとき、あなたは何を感じますか。すばらしいものを感じませんか。そして、すこに自分の体といっしょに自分の心も軽っていることを、そりと感じます。これは瞑想の中で、自己との戦いにいどんでいるという満足感であると思うのです。そうして、そのような瞑想に私たちは自分が見えてきて、自己を高めることができるのです。

―――― NHK青年の主張コンクール

第四章　出会い

ようやくのことで、仕事をうかがいそうなるんやからいや、と思いつつたまりたまりと走っていた。すると前方に文合目の立札が見えた。次の瞬間ズシン！と衝撃してがくっと立てしまった。しかし、全く痛くもかゆくもなかったいつしかこれがアイルーズであることは他の誰に押しやられていた。単純な事であった。だが、つかれは疲労に実感されてつかれが出てきたの（強調構文でしゃろう）と、すると、前方に斎藤さんの背が見えてきた。今まで何人もの人にぬかれ

みんなあっという間に視界の外へ入ってしまったので、相対速度が負である新幹線さんは、非常に新鮮であった。この相対速度というのは、非常に重要な要素であり、絶対速度などは私にとってどうでも良かった。こうなると、まさに宇宙空間である。よってこれは劇的な出会いであったのである。いつしか絶対速度はゼロとなり、互いにすうることはなかった。その昔は、金魚の糞であった、小判サメであった、モコイ、その極とはであった（もうひとつ表現がパッとしないなあ）。だが、まねもうさに繋ってしまった。エネルギーがのっかっていた。足はつりそうだし、目の前が白黒チカチカになった。こりゃ、もう降りてもいいかな。降りて休むしかない。それに足る理由もあるわ。ゆっくりエネルギーを補給しよう。で、降ります。もうすぐ降ります。よいおりうか。うんおりよ――こっそり降りまーす。果たしてその場に降りた。

第五章　再会

そこで、バンをひとつ食べた。これが、どのくらいのエネルギーになるのかなあと思いながら食べた。そしてそれは起りました。なんと新幹線さんが見れないが、次第にエネルギーがもどってきた。これ、あとに、この日最大（というか、それしかできないから大切にすると最中になってしまう）のイベントというか、非常に書くにはこれをおいては考えられないというか、この心

ういう書くことがないというか、今日の焦点というか、ニュース解説というか、時事放談というか、和…。とにかくものすごい（自然とものすごくなってしまったが）と言えないくらいのできばえだった。何を前方にまたも斎藤さんを登場したのだ。絶対運転者の例に上まらなくてもいいのに上がってしまった。別にそこへ行かなくてもいいのに行ってしまったら、見がつってしまったらしい。私もカッとついたが、今回のような中で、斎藤さんをおいてそこを決定されるべきなのかった。ひとつのことがわかるあかって。（斎藤さんこの物語はドキュメント風フィクションなので、何分にも、半に、呼に、お詫もお願い申し上げます。）

第六章　結局

でも、そこで結局と変ってのは、――クリストくんとのよ目が、ぼくにとって中心であったことは事実であるが、結局というのは、ハッタリのように使うものである。だから結局なのである。見がつってしまって、目前にゴールがあるのから何かが動き始めなかった。結局、見がつるのは、どうも自分に始まったことではなく、つまり悪い結果ばかりが、それにつき合ってるのもないのでどうもいづん。面白がないではないか。

そのうちに、まわりの雰囲気が、自分らしくなってきた。終ったんだと思った。苦しかったことも忘れかけていた。完走しただけだが、ずっとはりめつめてきかった。そして私はゴールした。記録はありがえらいた。長い道のりであった。四時間弱の長いドラマであった。ゴールデン洋画劇場よりも長かった。

第七章　新たなる出発

私は坂を下りはじめた…なんて何もない。立派で何もない。やはり、この丘で何かを得たんだ。第二の人生を下っていくサイクリスト達。彼の新たな出発の前に彼の生涯を私は書き終、彼の物語をとっておきたかった。ていた。

完

注1）このような表現は文法的に正しくないのだろうが、

注2）彼に対する敬意（ないし、愛情）の表現を意図してのことである。

恐怖！富士山T.T

（本社出発点）

2年　斎藤篤志

――プロローグ

夏休みが終ってしまい、残暑が厳しいある昼下り、部員諸氏がうだつの上がらぬ顔を並べている部室での、我々2年生の会話…

三浦「試験が終ったら、何処かへ行こうぜ」

石取「うん、いいね」（いつになく乗り気）

亀山「俺も何処かへ行こうと思っていたんだ、丁度いいや一緒に行こうぜ」（人が変ったみたい）

酒井「……」

私「……」

以上のような会話が展開された後、結局、2年全員で、三国峠、及び草津峠へと赴くことに決定した訳である。

無事に（？）試験も終り、あと半年近くは寝て暮せるという、精神、情緒、共に非常に安定な時期をむかえて、私は不覚にも流行性感冒にかかってしまった。これは、ひとえに連続的に近い徹夜という体力的消耗、及び、久しぶりに頭

酷使したという頭脳的(?)消耗に起因するものと思われ
る。ともかく、こうした事情により、私は、初の2年全員によ
るツーリング参加することを、断念せざるを得なかった。つま
り、オッコチするはめになってしまった訳である。出発当日の
午ごろ、三浦から電話があり、重い頭をかかえて出てみると、
品川駅にいるとのこと、他の3人とおり、全員、体調充分。お
そらく私の様子伺いの電話だったと思われたが、これから来
ないかという冗談(本気だったのかも知れぬ)。行きたいの
はやまやまだけど、体がまうことを聞いてくれない。頑張っ
てこいよ。じゃあ、また。バイバイ」の言葉で受話器を置
いた。漠としたむなしさだけが、何処か残った、…

＊ 上記の文章中に、漢字の間違いがあります。一体、何個、
或いは、何個所あるでしょう。ただし、たとえ正解であっ
ても賞品等は一切出ませんので御承認下さい
(3点)

いよいよ、当日がやって来た。10月半ばだというのに、朝
冷え込みがやけに激しかったのを不思議と覚えている。風邪
はだいたい治っていたので、体調も決して悪いとは言えなかっ
た。ただ、夏合宿以来1度も愛車に手を触れず、整備不良によ
る事故の懸念と、慢性運動不足(同じく夏合宿以来、運動

らしい運動は何もやっていない）による体力的不安は、どうしてもぬぐいさることはできなかったが…

出走順位など覚えている訳はないが、確か私の前は三浦で、後が村瀬（違うかも知れん）だったと思う。「三浦はどうせスッとばしていくだろうから、もう五合目でしか会えないな」と考えたことは思い出される。しかし、その時に私の後に出走した人達に、五合目以前で会えるとは、全く考えの及ぶ所ではなかった。

出走してすぐに、異様にペダルが重いことに気付いた。これはギヤ比の問題ではなく、足が軽快に動かないというか、とにかく、いつもの調子でないことはわかった。仕方がないので軽いギヤに入れて、何とか急場しのぐことにした。一合目を過ぎた頃から、体にけだるさをおぼえ始めた。（去年は、このあたりから、一定のペースをつかめたのに）足は一層重くなり、自分のものとも思えないくらい動きがとれない。そのくせ、体に蓄積してゆく疲労からくる筋痛は、容赦なしに私の神経を刺激する。この間、何人もが私の背後から軽快な回転音をたて、まるで罪人を見るような冷酷なまなざしで（しかし、決して口元には微笑みを忘れずに）《そうですよね、吉本さん》と言い去ってゆくのを、まるで傍観者の如く、私は見ていたのだと、今振り返ってみて、思う。二合目を過ぎたあたり

からだろうか、ふと、不気味な考えが私の脳裏をかすめた。体力的限界を体で感じたからだろうか、急激な体力の消耗による精神錯乱か。『棄権』の2文字が私のパープッ頭の中に現われ、徐々にその域を広めてゆくのがわかった。その時、丁度、小島さんのセレステが私の横に来た。助手席から上原さんが何言か言っているようだったが、私はまるで無声映画を見ているような錯覚で、その光景を眺めていた。その時である、衝動的に、或いは、本能の赴くままに、私の口をついてある言葉が出ていった。

「棄権するかも知れませんから、その時はよろしく」

休憩室

＊相当パープッていたので

『き、きき、けん…するか、もしかも、しれ、ま、せん

から、あ、あ…ハア、ハア…そ、そのとき、は、ア、ア

よ、ろ、し、く、ウウ…』

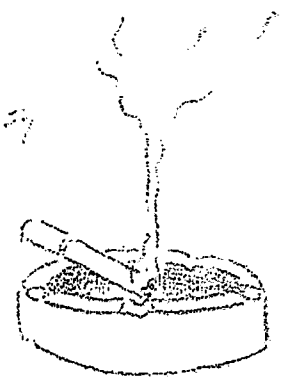
＊ラリッテいる場合

『リ、レンルル、ルル…ラモレリラ

レンララ、ララララ…、ロロ…

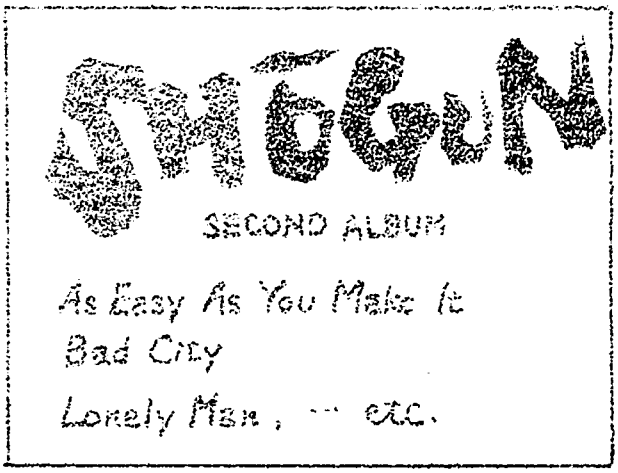
リラ、ロロ…リ、ル…』

〈角井康隆調〉



その後、私の心中に、ただならぬ葛藤が現われたことは、賢明な読者諸君（except M.M）にとっては、想像に難くないだろう。ここから、私は精神的及び肉体的という二重の苦しみを背負いながら、ひたすら（hulu しかたなしに）ペダルをふんでいた。そして、つついに、私が非常に恐れていたことが現実化してしまったのである。即ち、足、それも、大腿部の背後が吊ってしまったのだ！今までに、足が吊った経験は勿論あるが、それらは、足の裏とか、ふくらはぎとか、主に足の下部で、その治し方も心得ているので、安心して（変な言い方だけど）吊ることができる。ところが、今回は、不運にも未経験の場所が吊ってしまったので、どうしたらいいか、わからなかった。《一般に、未経験というのは、最初、何をすればいいのか、わからないものである。そうでしょう、鈴木直さん》

想像してくれたまえ、チャリンコに乗っていて、しかも常にペダルをふんでいなければならない状態（坂なので、こがない



と止ってしまう。したがって、ころんでしまう）で、大腿部に突然、激痛が走った。確か左足の方だったと思うが、御存知の通り、普通停止する時は左足から着地する（例にもれず私も）ので、このまま左足で着地すると、ころんでドブにはまってしまうのではないかという懸念と、右足で着地すると、もしや車が来て足をひかれてしまうのではないか、そして、…という恐怖が私を襲い、一瞬にして私は判断を下し、見事ころばずに停止できたのである。（結局、どちらの足で着地したのか定かでない）しかし、ここで決して安心できず、その後、チャリンコを路肩に放り出し、ころがるようにして、もんとそ必死で横たわった。吊った足をどうしたらいいものか、わからなかったので、夢中で脛部をマッサージした。それからどのくらい時間が経過したのだろうか、あの不快な足のつっぱった感覚と激痛は失せたが、鈍痛は依然残った。そろそろ出発しようかなと思い、立ちあがろうとして足をのばした時「ピーッ」（必ずしもこの擬態語は適切ではないが）という感じで再び激痛が大腿部に走った。そこで先と同様な処置を仕方なくやった。この間、車やオートバイが頻繁に通過したと思われるが、全く冷酷にもたった1台さえも止ってくれなかった。私も甘ったれてそれを望んでいる訳ではないが、せめて1台ぐらい止って、様子でもみてくれればいいのに。そうすりゃ、少

しは元気も出るってもんだぜ。それくらいしてくれても**ええやないけ！**（浦島さんのように）まあそれはともかく、こうなってしまっては、もはやチャリンコにも乗れず、まさか夏合宿の時の三井じゃあるまいし、チャリンコと一緒に歩いて帰るわけにもいかないので、

もう、どうでもいい、とうでもいい、やめやめ。

（顔の前あたりに右手を出して、指を少々曲げぎみにし、手首だけ左右に曲げて、三浦はよく、この言葉を発する）と完全に**戦意喪失**してしまった。

そこへ例の三井がひょっこり現われた。奴も足が吊ったとかで、私の目の前でおりて、足をマッサージしながら、あのいつもの格好でうしていたが、再び、力尽きたかのごとく出発した。さすが、三井は足の吊り、チャリンコの押し方には慣れているとつまらぬ感心はしたが、私も一緒に行こうなどという気には、浮んで来なかった。

その後、私は寒さと足の痛みに耐えながら、救援が来るのを、それこそ首を長くして待っていたのである。漠としたむなしさと共に…

休憩室 2

ある若い男2人が、いやらしい目つきで、1人の可愛らしい女性を見つめて、ささやいている。

A「きっと彼女は処女じゃないぜ」

B「いや、いや、顔にたあわず、もうすんでいるよ」

A「よし、それじゃ、賭けよう。俺は、"まだ"に一万円！」

B「じゃ、"もう"に一万だ！」

…それから、一週間後、2人は再会した。2人は、互いに一万円札を差し出して、言った。

A「おまえの言う通り、"もう"すんでたよ」

B「いや、"まだ"だったよ」

エピローグ

（阿成の突然、下章は口調になる。意味深長ですね！）

その後、私がどうなったかは、皆さん御存知のことと思いますので、ここでは割愛させていただきます。また、その後数日間の部室における私の乱場という点につきましても割愛させていただきます。（書くと、腹が立って、この原稿をやぶり捨てたい衝動にかられそうだ、ク～）

このT・Tにおいて、私はいろいろなことを悟りました。実にいろ

いろなことを…　ある意味では、よい人生経験であったと言ってもよいでしょう。

来年（というかもう今年だけど）のT.Tには出たいと思います。たぶん出るんじゃないかなあ…出ようと思っているけど……総員やりたいなあ……まあ、ちょっと覚悟はしておこう。とにかく、出場するとなれば、まず第一に風邪をひかないで、少なくとも1週間、いや、1ケ月前くらいから、トレーニングなどやらねばならないでしょうね。余談ですけど、石飯くんと亀山くんは、T.Tの前の日曜日に、奥多摩有料道路へ行ったんですって！一緒じゃなかったっていう話だけど、頑張っているわねえ。本当にすごいわ。他の人達もそうなのかしら？そうしたら、私も○○くんと頑張りたいわ（上原さんの口調でどうぞ）《ただし、私は、ワヨシではなく、ワタクシと読んで下さい》

では、最後に、わざわざむかえに来て下さったセレステの小島さん、下山の際、パルサーに乗せていただいた古木さん、及び、いろいろ御迷惑をかけた部員の皆さんに、紙上ではありますが、感謝の意を表したいと思います。（これは、決して冗談ではありません）

―― モノローグ

庄司薫は、21歳の春、東大教養学部にいたとき、『喪失』という小説を書いた。
そうすぐ、同じ年をむかえる自分は、一体何をすればよいのだろうか。今は、あせりに近い心境だ……

……自己否定衝動の客体化……

ナイトラン（東工大〜東金）

名取誠

11月2日夜、ナイトラン参加メンバーは、部室に集った。各自、食事をすませ、持っていく食料を買ったり、準備を整える。天気はよさそうだし、予想していたより寒くはないし、なかなかいいサイクリングが期待できそうであった。そして部室前で記念写真をとっていよいよ東金めざして出発。自転車がライトをつけて走る列はなかなかみごとである。まず東工大を出て中原街道を都心をめざして進む。このあたりではまだ自動車も多く信号にもひっかかることが多く、自転車の列はとぎれがちになり都心をぬけるまでは道は複雑で、はぐれてしまうことも考えられるのでバラバラになって走ることもできず、なかなか思うようには走れなかった。まだ走り出したばかりであったが、早くも先が心配された。

しかし五反田を過ぎたあたりから自動車は減ってきた。それに信号も適当に無視することもできたので、だんだんとスピードが上ってきた。そして確か麻布あたりだったと思うが、片側三

車線か四車線の道路をスピードを上げて走っていると、一時自動車の姿が見えなくなった。つまり、進行方向へ走る自動車も反対方向へ走る自動車も、はるか遠くに見えるだけなのである。そこで、僕らは道路の端を走る必要はないと思い、道路の真中を走ったり、蛇行運転をした。それはほんの数分間だったと思う。まもなく自動車が来てもとのように走らざるをえなくなった。ところがそれから少し走ったところで交番の警官に呼びとめられてしまった。初めのうちは、なぜ呼びとめられたのかわからなかったが、話を聞いてみると、どうやら僕らが走っているのを、だいぶ前から見ていたらしかった。確かに、振り返って見ると、それは見通しのよい所で、僕らがぶざまな走り方をしていた所までよく見えた。これは、たっぷり説教されるかと思ったが、たいして怒られずに、行先を聞かれるぐらいですみ、すぐに走りだすことができた。そして、東京タワーを横目に見て、やがて国会議事堂の前に出た。ここでも地図を広げて相談していると、警官に声をかけられ、早くどいてほしいと言われ

たので、少し休んですぐに出発した。そして皇居につきあたり、日本橋を至て、なんとか都心をぬけることができた。

都心をぬけてからは、実に快調で、たまに少し休む以外はほとんどノンストップでとばした。なにしろ、前方には自動車、人など障害になるものはほとんどなく、まわりの風景は暗くてほとんどわからないので、前の自転車を見て、ひたすら走るのみである。スピードもかなりでていたと思う。しかし、千葉を過ぎ、東金に近づいたころからさすがに疲れがでてきたのか、眠くなったのか、心もペースが落ちたようであった。そして、東金を過ぎたあたりから周囲がだんだんと明るくなりはじめた。東金を過ぎれば、めざす片貝海岸は、もう目と鼻の先である。必死でペダルをふんで、やっと日の出の少し前に片貝海岸に着いた。残念ながらその日は東の方角には雲がでており、期待していた日の出は見ることができなかったが、全員無事故で走ることができ今回のナイトランの目的はほぼ達成できたと思う。

工大祭に初めて参加する人に一言　No.3 村瀬

工大祭とはいったい何であろうか　どこかのマンモス大学のような八方美人的なものであるおまつりであろうか。もちろんそんなものではない。学生の今後のあり方を探ったり、工大らしく研究室を大々的に公開したりするようなものでもない。ではいったいどのようなものであろうか　それは学友会と大学側との争いの場というより「学友会が工大にもあるよ」と宣伝する唯一の場であるというのが正しい。(当局は強いよ)つまるところ一般人が想像するちょっとつまらない大学祭の見本みたいなものが工大祭である。模擬店が少しあり、研究室にはくだらない話があり、例によって無名の歌手がコンサートをするというパターンである。

なぜこんな風になってしまうのか。第工大そのものの人間の数の少ないこと、大学の知名度が非常に低いこと、学生の意識が乏しいことなどが考えられると思うし、それで成り立っているのだろう。

では我々は何をしたらよいのだろうか。もしあなたが工大祭を動かしてみたいなら学友会に入りおもいっきり気を吐いてみるといいと思う。またアカデ

ミッケに追まりたいなら教授の所にでも行くしかない（ウタシャ学問には縁がないからよく知らん）学生なんて嫌いというのなら1人で校にでも会ったりがいいだろう。またしっかり動けようとするなら初めから計画をたてて少人数で模擬店でかせぐ方でもいけない。そして最後に人力駅ぞをしたいなら サイクリング部の模擬店を出し 騒ぎまいのあとにみんなでフィーバーする これしかない！

このように一見つまらない工大祭も多様化する学生の心をとらえたすばらしい大学祭なのである。そして最後に私の結論，すなわち私のいたいことはこのようによい工大祭なのだから『工大祭の期間を延ばしてほしい』ということである。一週間もあれば田舎へ帰ってゆっくり休むことができるのに。

（つけたし）

パンフや映画などのチケットを正規ではない方法で売ったりすると ずいぶんともうかります。

だんご50円　ポップコーン50円　ユビー 50～100円　しるこ100円

利益は 千万ちょっと でした。

Mt. Norikura und Ö.B. Rally

Ö

俺の頭は、そもそも忘れ易くできているので、秋休みの事を年が明けてから書こうとしても事実を正確に書く事は不可能であろう。もし事実に基いて書いていった場合俺の記憶違いによるトラブルは、すべて俺自身が忘れ出である事を証明してくれる。ではどの様に書くか？事実に基かなければ書けない！という風になやしていると、原こうがますます遅れるので本題に入ろう。

フリーランに出て何といっても一番イヤなのが、走り始めて直後の雨だ。輪行ととく前ならそのまま民宿にはいるのだが、組んでしまった以上やっぱり走らないと負けた気がする。でもまあスタートする前からふっている分のならまだいい。雨だと思って走ってしまえばいい。一番くせの悪いのが、20分位走ってぬっと体があったまって来た頃にふりだす雨だ。しかも急にふって来る奴だ。まったく絵に書いた様にイヤな雨が、初日ふったのであった。

フリーランの昼メシはインスタントラーメンである。ゲータレボトルの貴重な水を約半分使って作る。雨の日などは、屋根のあるバス停が、最高の食堂である。ラーメンを作っているとオジイさんが来て、「良くふるなあ！どっから来たの？」決り

もんくである。「東京からです」標準語で答える。「ずっと走って来たんかえ」これも決りもんくである。内心VSOPを感じながら、にこやかに輪行をジイサンに教える。気分の良い時は、前輪のクイックをはずしてみたりして、納得させる。「こんな自転車は高いんじゃろう。いくら位するんです？」これも決りもんくで十万位だと言って少し高めに答える。ジイサンは、ヒマなもんだから、ラーメンを食い終るまで、夏に東北へミニスカートにTシャツで行って死んだ人の事やら　自分が道にまよったが帰って来られた事を話している。俺の口は、ラーメンで精一杯だったけれど、「なるほど」「へー」「そうでしょうね」と適当な間かくで合づちをうつ。ジイサンは雨の中スタートするまでしゃべりまくったが　俺はほとんどおぼえていない。

車で登る人がいる。バスで行く人がいる。さすがに歩いて行く人は見当らなかった。歩いて行くには、この宿は遠過ぎるんだろうなあ。YHの人はなんと国立大だったやっぱり秋休みは国立大の特権だろう。一人だけ入らい美人が居たので、ラッキーと思ったが、天気の方は一向に良くならず、二日目は、少雨の中登った。エライキツかった

何故かは知らんが、一緒に登っている奴がいる。本来エライ目きのある奴らしいんだが、俺とチンタッテいた。そいつは、馬みたいなサイクリストで、いや決して部員の約一名に似ているのではない、とにかく走る事（地図上で移動する事と言う方が当っているだろう）だけが生きがいの様な奴であった。先日奴が京都から（京大生）東京へ来て色々話していたら、下関から岡山まで、一発で走ったという。最初の私たちは、1時間5分で走ったとか、俺には、顔の前に人参をつけても、ずがついていてもこんなには走れんと思う。いや絶対走れん!!

とにかく俺とチンタッテ、途中で、紅茶、ラーメンした。えらく俺の走り方が気に入った様で、また来年に登ろうというが、俺の方では至って自信がない。

寒鍋山の頂上は、全くキって凍結していた。おまけに、台風の様な風がふいている。もし俺が、3.2kgからのながめだけをたのしみに登っていたとすれば、大学入試で一番にスベった時位のショックは消えうせていただろう。とにかく何か満足感があった。しかし、言葉にならないので書かないが、クラブの多くの部員には、何も書かなくてもわかってくれると思う。

大阪角相行

ジャイアント・ババ→太いクリ，ボボ・ブラジル→おめコブラジル

旅先で、土佐弁が耳に入って来た。民宿でメシと食っていると。むかしブスだったと思われる二人のオバサンが、(注:ブスというのは30才前で、顔と心の総合標値で偏差値40以下を俺はブスと解している。30すぎれば、皆にオバサンでよろしい。中にはきれいな人もいるけれど)何やらなつかしげな音を出している。よーく聞いておると、やっぱり高知の人みたいだったので、標準語で、俺が出身を聞くと、

「KOUchi desu」

まさに土佐なまりの標準語であった。以後俺は、土佐弁で対戦した。石川県のオバサンが、話しに加わって、何だかんだ言っているうちに、石川県が、

「熱海地方へも旅行したいが、地震が恐いのでイヤだ」

と言った。

「そんなもんは、もうしかたがない。あっさりあきらめるしかないでしょ!」

と俺、

高知のオバサンニコニコして、

「高知の人は、あきらめがええきれえ!」

今年の T. T. の成績の悪かった理由がわかった。

とにかく、三日目は、40才以上の女に大モテだった。

O.B.ラリーを書かなきゃならん。しかしあれは、どういいき目で見ても、O.B.会ではなかろうか？　とにかくO.B.の人数などは、長津田からの帰りの様なカッコうで、清里に集われたし、車で来る人がやたらメッタラ多かった。バイオレット、パルサーセリカ、ローレル等、とにかく、自転車の数よりも、車の数の方が多かったのであった!?

とにかく雨だった。ムーーーワーと風がふき、ズドザドドーーと雨がふっていた。乗鞍帰りの俺の心のどこかで、あした雨だなーあれと言うものもあったが、そこは、OBの前

「明日晴れるといいですね！」（ナハハ！）

結局その夜は、O.Bとなかよく、トランプ遊び。

一夜明けてみると、あいかわらず、外はズドザドドのムワワワーー

「これじゃ自転車はムリだ！」

全く疑う余地もなかった。

「じゃあ、今日走る予定のコースを、車で行ってみますか」

一致した意見であった。実にラリーであった。

もともとTETCCは車好きのクラブである。ここ数年カーグラとか、カートップ等という雑誌はなりをひそめているが、2年位前は、部室の机の上には、幕ヒ置いてあった。年を追っ

て免許人口は増加の傾向にあるが、今のクラブには、以前ほど車の話題はのぼらない。「カーオブザTITCC」などという名詞も近年忘れられている。……本題にもどろう。

なんとか車に乗りこみ、いざ出発、1時間も走らないうちに蚊ヤシの声がかかり、ウロウロ、4台があっちへ行ったりこっちへ来たり。ふと、バイオレットの方を見ると、O.B.の人が、ズドザドの雨の中窓を半分位あけて、二人も首を出している。それはあたかも、亀が、コウラの中から、ふいに顔を出しているかの様であった。そしてその顔は、実に東工大サイクリング部であった。来見の顔も、三浦さの顔も小島さんの顔も、そこにはめこんで迷い様であった。

とにかく何にもせずに、というほどでもないが、…OBラリーは、終ってしまった。何にしても今年は、かたき打ちにあのユースでOB、ラリるしかないんじゃないでしょうか？…

おわり

意味不明の文章で申しわけない、苦情の一切は、日誌にどうぞ、

フリーランは、'80 2月号 サイスポ(参)のとと

サイクリング部をふり返って

鈴木道夫(4年)

この4年間を振り返ってみると随分色々な事があった。特に2年の時は、夏合宿をすっぽかして一人で長期に渡り走ってきた。今思うと非常に悪い事をしたと思っているのだが、そんなこと言うのは少々しゃくにさわるのでやめておこう。

しかし、あの時は、どうしても一人で走りたかったし、意義深いものであった。実は、あのツーリングに出発する頃、中学校の時の後輩の女の子が、統一協会の7日間の研修会に出たときであり、ぼくがしそんなこと何も知らなかったから)、見送りに来てもらおうと思って葉書を出したら、7days w.s に行ってると思うんで会えませんが、旅の無事を祈るなんていう返事が来た。決局、吉田に、重い荷物を持ってもらい上野駅で見送ってもらった。(ありがとう)あの頃が人生のかかし目だったとは……

しかし、たまに一人で走るし、みんなと一緒に走る、というよりは、自転車を放り出してブラブラしたり、キャンプなんてしたくなるものだ。そしてまた少々いやになって一人で走るのもまたいいもんだ。また、二人で走るのもいい。吉水には悪いが、ぼくは、よく菅我部と一緒に走った。彼とはとても気が合いほんとうによく走ったもんだ。あの頃は、やたらと距離を伸ばし、それもやたらとミミズのぬたくったようによく走ったものだ。」

「もう、何だかたくさん走らないと損、名所、旧跡はもちろん、名の無い気に入った所と、隅から隅まで走らないと気が済まなかった。人が通らない道(?)はもちろん、人が通ったところまで走らないと気が済まなかった。よく走ったものである。

しかし、あまり同じ人間とばかり一緒に走っていると、だんだんと嫌気がさしてくるものである。部内とも、お互い表に出しはしなかったがそんな時期があったが、またしばらくたてばもとの仲になる。実際人間はパー壁な人っていうのは少ないから、いろいろとゴタゴタがあるものである。しかし、しばらくたてば元に戻る。だからいつまでも友達でいたいものだ。

しかし、最近というより3年になった頃から、あまり(以前のように)サイクリングに行かなくなった。ある人は、あんなに長々とサイクリングしたのでいやになったのかと言ったが、実際そういうわけではない。二年の時、あんな調子で、その上学期中もサポーターージしてたから、前期は原子物理、後期は電磁気学とたて続けに専門の、それも必須科目を落としてしまっていた。これでもぼくは留年だけはしたくないと、二人と見て思っていたから(これはうそ)、三年の時は、少々がんばった。しかしあの頃から少々力がなくなってきたので部内には馬鹿にされてばかりいる。しかし、また力を取り戻すつもりでいるし、一生は長いものだと思っている。」

また、統一協会（原理運動）とつきあってから、少々これではいかんと思うようになっていた。結局彼らとは、そいた社会性（というより私の知性が拒否した）のため分かれたが、最初の頃は何も知らず結構仲良く笑って話をしていた。しかし、サイクリング部の人間と、原理の人間と同時につきあっていると、非常におもしろい。人間て面白いなあと思う。一方は酒、たばこ、麻雀、女（こればかりは空想？）の話しが主、一方はそんなものとは全く関係なく「天の愛するおとおさまアーメン」とくるから、全く対照的というしかない。結局色々あって彼らと別れてからもこれではいけんと思っていたところに、金谷さんに現問研に誘われたのが、サイクリング部から縁遠くなったはじまりである。あれから色々と公害を中心にいろんなこと勉強したけど、やっぱりああいう真面目な話もしないといけないと思うね。でもやっぱりサイクリング部の仲間というのも安心してとこもいい。だから、今の大学生全般的にもっと色々と社会情勢のことなんかもテレずに話すようにすればいいと思う。サイクリングもただレジャーとしてだけというより、もっとせっかく自然の中を旅して来るんだから、身の回りの自然にも興味を持ち、いい環境を残していこうっていうこと位考えていけたらいいと思う。実際みんなそう思っていると思いますが。

しかし、2年のときの長期（40日）サイクリングで感じたこと

だけど、やっぱり身の回りの、ごく身近な自然がいいですね。どんなに小さなものであっても一。ぼくもよく小さな自然が破壊されても大きな自然を残しておけばいいなんて思っていたけど、全然ダメな考え方ですね。だからぼくも将来どの地域に住むようになるか確定はしてないけど、出来るだけ郷里に帰って地域に根をはった生活をしたいと思っている。

こんなわけで、長々ともう一年教職をとるために留年することにしました。3年の頃は留年しないようにと頑張ったのに、ちょっとこういう経験はじめてなんで古木や海島を見習ってがんばろうと思っています。来年教育採用試験受けて、受かったら先生になるつもりでいるけど、ちょっと寂しくなってしまったね。最初そう決めた頃は全然そんなこと感じなかったけど、研究から、大学から離れてしまうのはちょっと寂しいですね。結局大学4年間は大して勉強(専門の)しなかったけど、学問に対する愛着、ていうのがやはり残るみたいでね。まあ、土井のようにパープリン(現時点)でも、いつかまた学問の道に目ざめて、30年後には理論物理の大家になっているかもしれないし、ぼくだって、地球電磁気の何とかにならないとは断定できない。(ただし、何どもつまづくだろうけど)。こんなわけですから来年度もまたよろしく。人生は長いから子供が成人したらまた大学院に入るかもしれないけど、今年は一応追いコンされます。The end

最狂雑記帳

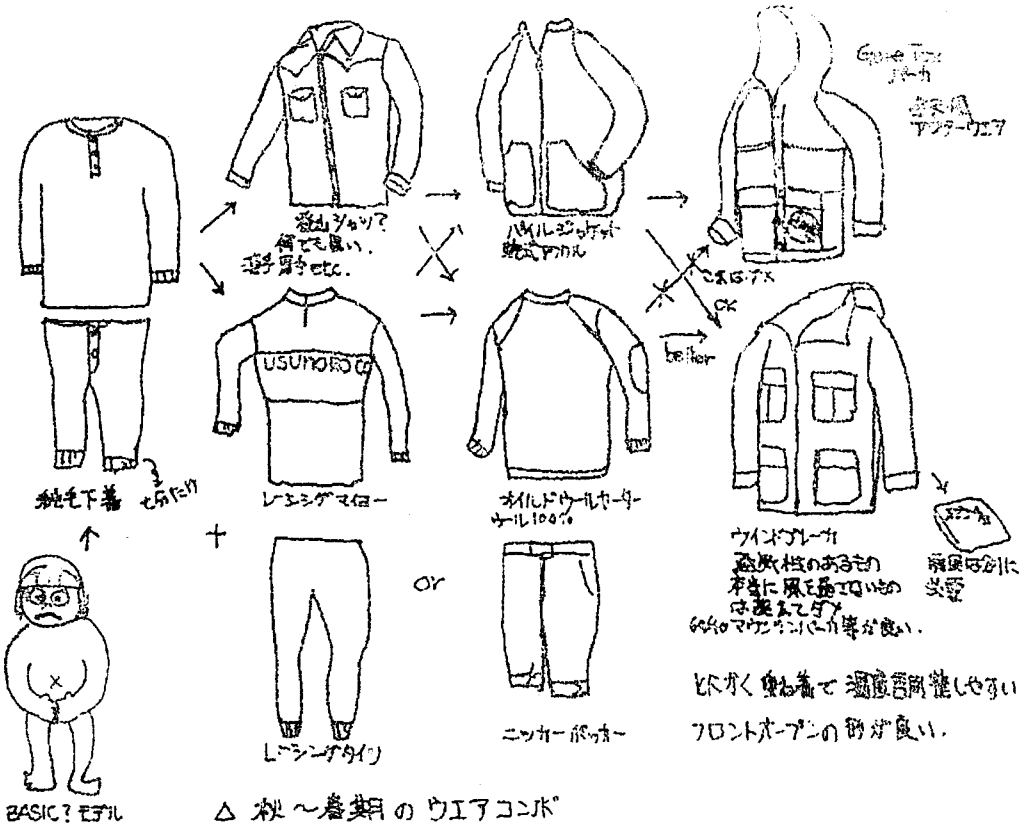
4年　小島 正也

少年はもがき続けた。少年の頭の中には前を行く自転車に追いつく事しかなかった。少年の自転車は、つけたばかりの「ドロハン」が真新しい他は、333と刻印された前変速機もふくめ、ストックのJr.スポーツであった。少年は脚の回転を上げようとした。しかし、ペダルから足が外れそうになるばかりで、前の自転車はみるみる少さくなっていった。「は、あ、ど、だ、ぜ、。」と少年は捨てるように言った。少年の車輪は鉄だったのである。

I.「はーど」の話

僕がサイクリングを始めた頃に比べると、ずい分と便利になったものだと思う。「ニューサイ」の厚さも倍程に見えるし、だいたい、自転車自身マスプロ車がたいへん良くなった。部品も充実してきた（改良の余地はまだまだあるが）。しかし、一方では、用品といい、その他組織、施設などまだまだ進歩したと言えないものが多い。

特にサイクリング用のウエアというのは決定的なものに欠けているように思える。例えばズボンであるが、夏はショーツを使うので、（というか、他に何かあるかといえば、ないのでしかたがないが）まあ問題はない。そういえば、ずい分昔のニューサイに、男子のなには空冷式だからなるべく風通しの良



△ 秋～春期のウエアコンポ

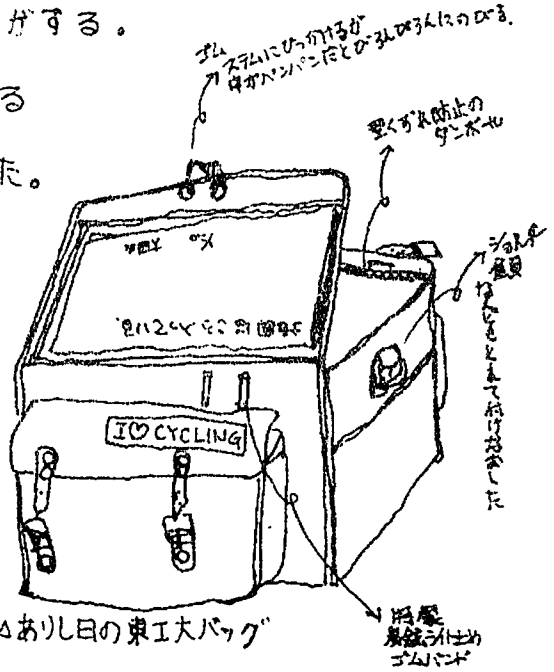
いものを選ぶようになどという話があった。ジーンズはその点では人類の敵だそうで、愛用者はチャックを開けて走るのが良い(?)そうですよ!。合宿ではNと一緒にされるのがいやでニッカー(ウィスキーに非ず)を使わないが、Yのようなレーシングタイツはシルエットがきらいで、やはりニッカーが良いように思う。特に寒い時は、膝の保温と運動しやすさという点で、膝に余裕のある事はたいへんにありがたい。しかし登山用のはポケットの位置とか、膝の余裕という点でうめが足りない。専用のものを誰か作ってくれないかなあ... というところでしょうか。

雨具はポンチョが私のお勧め品で、薄手のものなら非常にコンパクトにたためて良いし、いざという時にはセパレート型の

雨具よりも蒸れが少なくて良い。最近注目されているゴアテックスは、確かに雨具としては良いものであるが、ヒルクライム時などの発汗量の多い時（そしてスピードののろい時）には、やはり蒸れを感じる。特に発汗量の増加時には、他の素材のものと同じであるが、定常になると、割合快適である。ゴアの利点は、ウィンドブレーカーと兼用で装備を軽くできる事などであるが、自転車につきものの油に弱い（通気性がなくなる）、オイルドセーターが使えない、感触がほんとうにゴアゴアしている（ゴアってカサバル！）、などの欠点がある。また価格が高い（フッ素系の材料である為）のも痛い。

フロントバックも最近は良いものが多い。が、使いなれた後開き式のもの（いわゆる東工大バッグ）が消えたのがさみしいしだいである。走りながらパンを出して、むしゃむしゃと食べる事がずい分多かったような気がする。

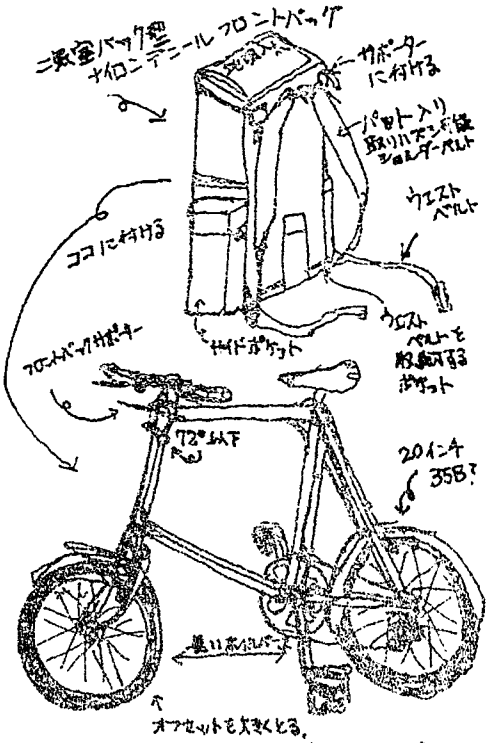
最近は、デイパックに使われているデニールナイロンのバックが出てきた。T社のものは、バック自身に腰がなく、後ポケットがマジックテープなので耐久性という点で少々気にいらない。BSのFB12というのが東工大バック式で中仕切まで付いているのだが何と6500円もするので、中型バックとして欲しいのだが手を出



Aありし日の東工大バッグ

しかねている。サイドバッグもこの手のアメリカ式のものの登場が望まれる。

輪行というのは、昭和初めの競技者が使っていた言葉で、競技場まで乗って行く意味だったらしい。ところが輪行が輪(ワッパ)で行くことでなく、輪(ワッパ)を持って行く意味になったのは輪行袋のせいらしい。輪行に代る意味で名ずけられたその袋は、本来の意味での輪行をしている時には無用の長物である。がといって、あのワープ行法(?)の魅力は一度味わうと忘れがたいもので、野崎さんが使っていたポケットヤッケ大にたためるものはうらやましい限りだったが、財力の点で特注で作らせる事も出来なかった。しかし最近Hサイクルから似たものが出されたので、近いうちに使ってみようと思っている。



△バスハンディング　ミニ(作りたいなー)

サイクリングというのは、わり合簡単に出来るものである。が、より快適に、より限界にとなると、ハードウエアも決しておろそかには出来ないと思う。より自然に近い場所へ、より遠くへ、より高い峠へ、より楽に、より余裕を持ってサイクリング出来る為に、参考になれば「幸い」であると思いつつ、この項を終ります。(誰かガッタ屋に親しい人がおったら宜く(ヤキムパタガ)でバック紹介してくれ――!)

Ⅱ 「ソフト」編 —— 旅と自転車と人生 ——

自転車で旅をするという事は、旅をただ単に移動としてとらえるのなら、これ程効率の悪い手段はないであろう。しかし、旅の心、旅の本質をとらえるという点で、自転車の旅は他の手段に比べて優れていると言える。

旅とは何か、という問題に対して形而上的解析をしている中で三木 清の「人生論ノート」の中の「旅について」は明解である。確かに旅の感情を抱く事は如何なる旅でも可能であろう。しかし、旅を過程としてとらえる（三木 清の言葉を借りるなら、『旅の真の面白さ』を知る）という事では、磨耗さのない遠さを連続して しかも自力で体験することの出来る自転車は、旅を学ぶ道具として優れていると思われる。

旅と人生が根本的な問題で一致している点は、「旅について」で書かれているとうりである。即ち『何処から何処へ、という事は、人生の根本的な問題である。』『人生は未知のものへの漂泊である。』などのように、旅は人生に似ている。

「人生は浪漫だ。」という言葉がある。「浪漫」とは、単に夢想的、感傷的なという事ではなく、「浪漫主義的な」の浪漫ととらえなくてはならない。浪漫主義を説明する最もポピュラーな例は、メーテルリンクの戯曲「青い鳥」であろう。最終章でチルチル（ライターに非ず）が「なんだ、これが僕たちがさんざん探し回っていた青い鳥なんだ。僕たち随分遠くまで行った

けど、青い鳥ここにいたんだなあ。」と言う事によって、我々は自分の現状での不満、不快→放浪→再帰による発見、不満の解消というプロセスが浪漫主義である事に気付く。

我々は「人生」という旅において「何処から何処へ」行くのであろう。それは誰も具体的に説明しえない未知から未知である。旅の形が様々であるように、人生も人それぞれの形がある。しかし、旅の本質が変らないように、人生の本質も変らないのではないだろうか。

現代人は内向化しつつある、という話がある。それは巨大化する社会の中で、我々が旅に出る事を忘れてしまった為ではないか。人々は不快、不満に対する処理法を失ない、無力感にひたり、無感動になり、不快、不満に対して鈍化する。浪漫の出発点すら失ない過去を止めた現代人の行先は何処なのだろう。善意を持った個人が、一度集まると偏善や不善をなすような矛盾した現代日本社会で、この蓄積された不快のエネルギーが、誤まった方向へ吹き出されなければ良いのだが。

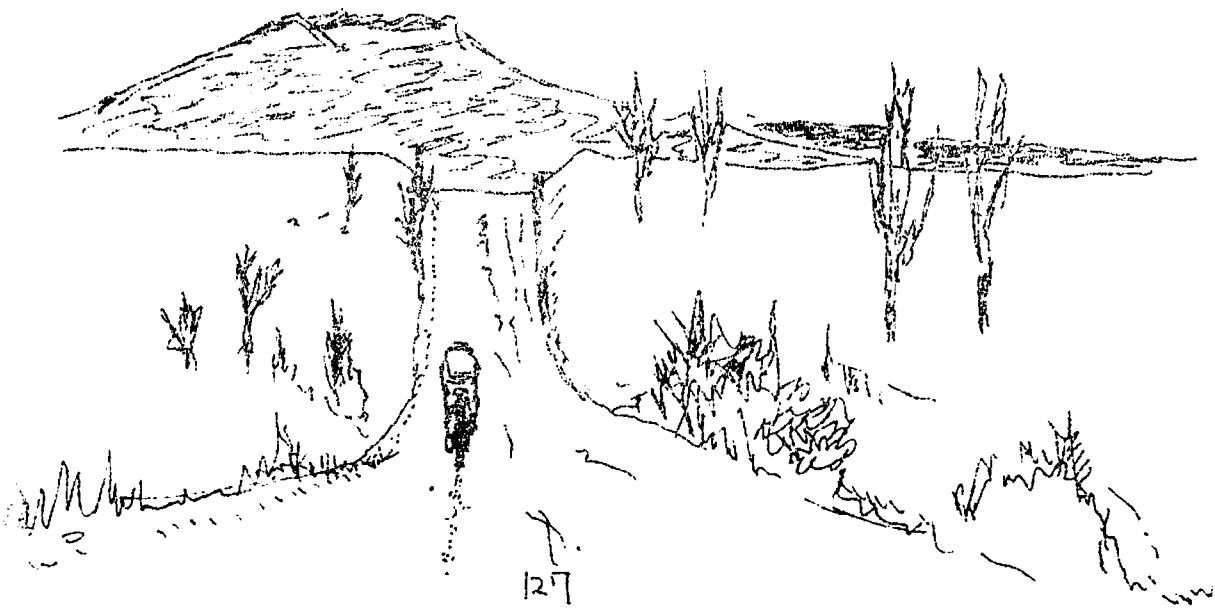
『旅において出合うのは、つねに自分自身である。』と三木清が言うように、旅に出ず、内向し、「しらけ」る人は、自己と出合うチャンスを失なう。こういう人は、利己的ではあっても決して夏目漱石の言う「自分本位の立場」には達しえない。漱石の「則天去私」とは決して自己を抑圧抹消する事ではなく、「個人主義」を確立した後の浪漫主義的解消による自然の境地

に達する事を示すのである。

三木　清は、「旅について」の結びで言う。『真に旅を味い得る人は真に自由な人である。旅することによって、賢い者はますます賢くなり、愚かな者はますます愚かになる。日常交際している者が如何なる人間であるかは、一緒に旅してみるとよく分るものである。人はその人それぞれの旅をする。旅において真に自由な人は人生において真に自由な人である。人生そのものが実に旅なのである。』

私が、この4年間に経験した旅の中で、「真に自由」な心でいられたろうか。まだまだ「動きながら止まり、止まりながら動く」事を学ぶ前に旅に出なくてはいけないようだ。

「かわいいコには旅をさせろ。」という言葉があるが、私はみんなが自己を確立し、真に旅を味い得る人間になる事を、自転車を通じて実現する事を心から望む。（この項終り）



Ⅲ．理屈ぬきの話

「旅」を抜いても、自転車っていいよ。何故乗るかって？そりゃ、もちろん好きだから乗るのさ。

自動車だって好さ。でも自転車はもっと好だよ。

確かにつらい時もあるよ。もう投げ出して、やめちまいたくなる時だってあるよ。

でも、結局、好きなんだよ。

お金もかかるよ。手間もかかる。それでもホコリまみれで放っておくのは、可愛そうだよ。フレームのキズがサビ色になっているのは、可愛そうだよ。

そんな時は、きれいにみがいて、プラカラーで化粧してやるのさ。

走る意味を考える事は大切だよ。でもね、走るのに必要なのは理屈じゃなく、たった一つ、「好き」って事さ。

年寄ぶって、もうだめだなんて、走れないなんて、そんなのはごまかしだよね。暑いから走れないとか、寒いから、冬だから走れないなんて、そんなのは嘘だよ。

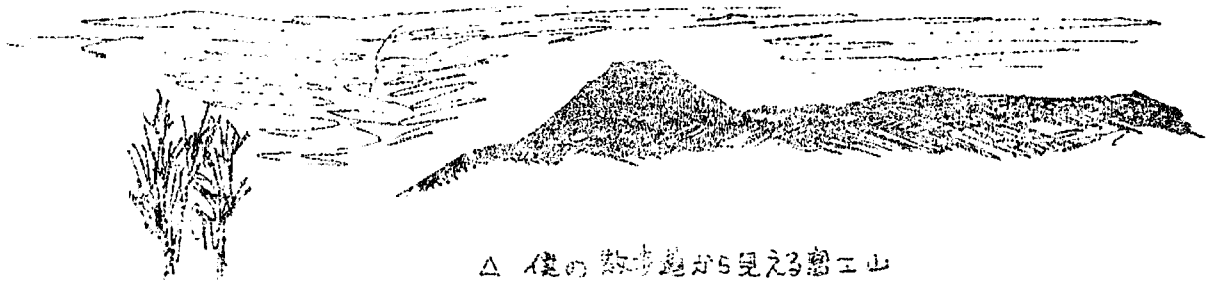
何にも照れることはないんだよ。

そう、みんな自転車が好きなんだ。

例えころぼうと、パンクしようと。

好きだから、自転車に乗っているんだよ。

（今日の歌詞　ぼうぼう焼くのは　ばかったれ　三木のり平）



△ 僕の散歩道から見える富士山
この美しい色をお見せ出来ないのが
ほんとうに残念です Hi.

五 散歩の話

僕は冬の夕暮れが好きだ。落葉樹のシルエットの銅版画のような繊細さが好きだ。日が沒してしまった後の、オレンジ色のバックに浮び上った山の端と、深い空の色が好きだ。だから、このところ正月をよいことに、毎日のように近所に散歩に出かけている。

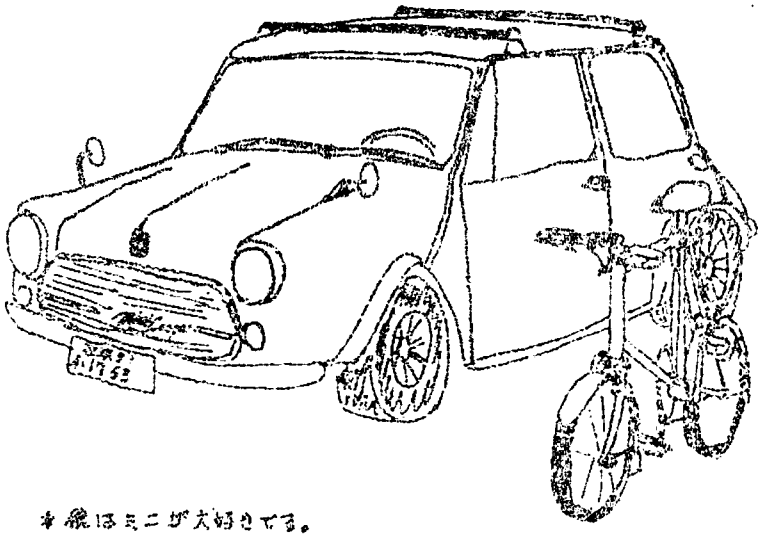
実は、最近オールランダーを付けたので、とにかく使いたいというのが本音といわれても否定しがたいというところである。

僕の住んでいる所は、多摩丘陵が海にぶつかる所だから起伏といったらかなりのもので、崖のある岡の上によじのぼる事を考えると、坂をくるスピードもためらいがちになる。とにかく尾根へ出ぬ事には景色がよくないので、散歩となると尾根歩きが主になってしまう。尾根道といっても住宅地だから、風景を見ながら走れる場所は限られているけど、ある所にはちゃんとあるし、意外と公園が多いなどという発見もある。

子供のころは、かなり広域に渡って遊び歩いていたつも

りだけど、やはり一寸走ると知らない道もけっこうあるので、おきまりのコースに少し冒険を盛り込んでみたりする。これがけっこう面白く、突然に「あれ、こんな所に出るハズじゃなかった」と知った場所に出ることもあれば、袋小路に迷い込んで、「しまった、しまった。」と頭をかいてUターンなどという事もある。

小径をのんびり走るのも、また国道をガンガン飛ばすのと異なった良さがある。富士山のシルエットが空と同じ色になる前に、もう少し眺めていたいと思う心を抑えて、帰る事にしよう。明日も晴れれば良いなあ、などと思いながら。



＊僕はミニが大好きです。
車も自転車も どっちも今はもってないけれど・・・・ でもどこかにボンマイが付いていそうなミニが欲しいなあ。絶対自動車みたいだといわれても、とにかくミニが好き！
（モチロン スカートも！？）

V. 出だしでつまづくはなし

↑ほんとうはここでやめて読まれるような事を書きたいんだけど・・・・

イテッ

i)峠のボトル

再び上りが急になって、苦しく目ってきたので、視線が下を向き始めた。ギアを落そうと下を見ると、ダウンチューブが全部見える。あれ、ボトルがないぞ。弓池のロッジに置いてきちゃったよ。自慢の保温ボトル。山田峠から弓池はかなり下っていたので、僕は完全にあきらめてしまった。だからして淡峠では何故(トウゼン)ボトルがなかったのである。

ii)駅

上野駅で偶然一緒になった亜尾が降りてしまった特急の車窓をながめながらも、天気のことが心配だった。小出の駅で降りると、プラウスで「東工大の小島様、伝言が御座居ます。」とのこと。はて？なんじゃろほい。と少々いやな予感がしたが、改札へ行くと、駅員が「郵便局から電話がありました。すぐに家へ電話するようにとのことです。」(ガビーン！)心配していた雨は降り出すし。しばし呆然としていた。かくして、只見の郵便局には、是が非でも行かねばならなくなった。雨の中電報為替をたよりにして。

iii)棟句

僕のタイヤはごく普通のものだし、ペダルだって名はユニークだけどオーソドックスなクイル型だ。ところがこれらを一瞬のうちに麻痺させる言葉がある。僕が、たった一言いうだ

けで良い。「さあ、行こうぜっ!」 かくしてチューブ内の空気は根室や本宮川湯などの大気に噴出し、ペダルは沼田の駅前で地べたにひれ伏すのであった。 XO〜!

iv) 脱線

富士山T.T.に出る前に少し走ろうと思い、早朝新宿駅へ行くと、脱線で甲府折り返しだという。急行に乗れないので急行料金をもうけたとばかりに、各停によっこら乗り込んだ。発車まぎわに乗って来たよっぱらい氏が、ロングシートの俺の前に座った。彼は輪行袋を見て、「おい、なんだそりゃ」「ちょっとこっちへ座れ」小生やむなく相手をする。「だいたいあんたら冒険家は〜」富士山に登るといったら何か感違いをしたらしい。適当にあしらっていると、一見アル中の、目つきの少々おかしな彼は他のボックスシートへいって何やらからんではもどって来る。やむなく話に乗せて引き止めるが、立川までが長く長く感じた一日でした。

v) 再びボトルの登場

ぬらしたボトルカバーがなかなか乾かないので、不思議に思ってボトルをしらべると、アルミの底 ポタポタと中味が出て来ている。中味をすてて、空にすかして見ると、みごとに小穴があいている。セロテープをやむなくはっておくことにしたが、さて買ってから半年もたっていないのに、コニロに乗せられないアルミボトル、いったいどうしてくれる!。

(完)

『本州縦断の記』

曽我部成一

「もう4年も経ってしまったか……」研究室の窓の外を眺めながら感慨に浸る。長い様で短かった大学生活、色々あったが俺の大学生活はやはりサイクリング抜きでは考えられない。新歓ラン4回，春合宿2回，夏合宿3回，その他フリーラン数知れずといった具合。それぞれに忘れ得ぬ思い出はあるが、今回は研究室の夏休みを利用して走った青森―下関1700Kmの事を書こうと思う。

まず、何故にこのランを行なったかについて。合宿その他のランは確かに楽しかった。クラブの連中と2〜3週間、生活の全てを共にできた事は貴重な体験であった。しかしいつも思う事、それは「走り足りない」の一語であった。4年になる前の春休みは、工場見学などの関係で合宿にも出ず、自転車にも乗らず、何となくウジウジと過ごしてしまった。4年になってもイラ立ちは募るばかり。今年中に何かやらねば悔いを残して卒業という事になってしまう。そこで考えついたのがこの青森―下関ランであった。

7〜10日間で1700Kmを走るという事で1日の目標は200Km。今までに走った1日の最高距離は140Km程度なので全く未知の距離である。そこで、5月からはほとんど毎日、体育館横の上

レセンに通った。悪友土井と共に三浦半島一周ツリーラン、河口湖までの往復ランなどもやった。そして8月2日夜、急行八甲田に乗り込んだのである。

☆8月3日(金)

6時過ぎ青森駅着。偶然にも志波・金井・酒井等と会う。一緒に記念撮影をし8:30青森駅をスタート。いよいよ始まった。何やらエラク興奮気味、「先は長い」と自分に言い聞かせる。10:30弘前駅着。駅前にたむろしている北大ccの中に高校の同級生で体操部の仲間でもあったマコトに出会う。全く偶然と言い難しい。別れた後で写真を撮らなかった事を悔やむ。13:00能代駅着。本日はココを寝ぐらとする事に決めた。年に1度の花火大会とかで、俺もビールを飲みながらニコニコと観賞。本日の走行距離144km。

☆8月4日(土)

5:20能代駅発。気温20℃、少し寒い位だ。8:30秋田駅着。ステーションビルでMorning Set プラス Salad の朝食。しかし予想外の体調の悪さにパンが食べられなかった。13:30金浦駅着。ビールを飲んで昼寝。有耶無耶の関何辺で雨が本降りと成ってしまい、吹浦まで4km位の地点でバス停に駆け込む。ラジオの天気予報では「大雨洪水警報」と言っている。結局このバス停に寝る事になった。国道沿いの為車の往来

かもの凄い。夜中には雨が吹き込んできたのでベンチの上に避難。おかげで寝返りをうった途端落下。本日の走行距離145Km。

☆8月5日（日）

朝、人の声で目覚めた。バス停は働きに出る人達の集合場所らしい。少し話をしたが東北弁はまるで外国語、良く聞きとれなかった。相変らず天気は最悪状態。向い風、どしゃ降りの中を酒田へ向けひたすらペダルをこぐ。時速は10Km程度。酒田を経て鶴岡へ。全身ズブ濡れなので大事を取って民宿に泊まる事にした。しかし、適当に荒れた日本海は見応え十分であった。本日の走行距離92Km。

☆8月6日（月）

いよ一新潟県に突入。村上一新発田を経て13:45新潟駅着。さすがにデカイ街だ。新潟大で休憩し再び走り始める。夕方になると調子が出る。柏崎まで走る事にした。ナイトラン覚悟であったのに粟生津駅付近で又々雨。しばらく雨宿りしたが止みそうもないので我慢しきれず走り始める。が、降り方はひどくなる一方。20:00頃出雲崎駅で宿泊を頼んだところ、「隣の無人駅へ行け」と追い出される。血も涙も無い駅員に当たったのが運のつきか。本日の走行距離120Km。

☆8月7日（火）

「昨夜泊まった小木文条駅で知り合ったおじさんに写真を撮

ってもらう。昨晩ロクに食べていないと言うと「若くて食べ盛りのモンがえんか事じゃイカン！」と戒められてしまう。柏崎までは又雨。俺は雨男なのか？　半ばヤケクソであった。糸魚川では話のわかる巡査に会えた。ここに泊まりたかったが今までの遅れを取り戻す為、先を急ぐ。親知不駅で埼玉県のサイクリスト2人に出会い越中宮崎まで一緒に走る。結局、黒部川近くのバス停で寝た。　本日の走行距離 150Km。

☆8月8日（水）

4時起床。24時間自動販売機コーナーで恐ろしい有方題付きのタンブの運ちゃんと話をする。「俺達にとって、オマエら、の様な自転車が一番コワイ」とか。お互い様だ。富山一高岡と過ぎ金沢着11:40。兼六園は入場料100円。時間と金の節約の為パス。福井駅を18:00頃通過し19:00過ぎ鯖江に着く。駅員恐怖症に陥っていた為、荷物の積み込み口でこっそりと寝袋にくるまったのだが……　本日の走行距離207Km。

☆8月9日（木）

3:15頃、「列車に荷物を積み込むから」と叩き起こされた。仕方ないのでごそ〜起き出しそのまま出発。7:00には敦賀に着いてしまった。福井一京都の県境でサイクリストに会う。会社をやめ放浪の旅に出ているそうだ。再会を約束して別れる。天の橋立は大した所ではない。20:15 久美浜駅着。頂度

犬りとぶつかり深夜まで眠れず。本日の走行距離 212km。

☆8月10日（金）

寝不足の体にムチ打って走る。11:00浜坂駅着。歩道橋下で1時間程昼寝。それにしても素晴しい海だ。特に"海金剛"付近は最高だ。アップダウンの道はいただけないが……鳥取砂丘は日本とは思えない光景であった。八橋駅に泊まる事にした。駅前の喫茶店のマスターがコーヒーをおごってくれたのには感激！　本日の走行距離 162km。

☆8月11日（土）

4:30出発。鳥取の道はほとんど平坦。米子一松江と通過し出雲大社着10:50。大社駅は古風で立派なものだった。しかし島根の道はひどい。大田一江津の40kmは平坦皆無のアップダウン。江津に着いたのは19:00過ぎ。しかし明日は10日目。先を急ぐ。西浜田駅で追い出されたのは20:00過ぎ。足はとっくに限界に達している。仕方なしに、材木工場のガレージに忍び込み、トラックの荷台で寝た。本日の走行距離 218km。

☆8月12日（日）

3:00起床。ひたすら下関を目指す。山口もアップダウンは相当なもの、しかし下関の事を思うと頑張らざるを得ない。萩一長門と順調に通過。特牛付近で関西大学のサイクリストに会う。日本縦断28日目とか。今日は友人の親戚の家に泊ま

るという。さすがに大阪人はせこい。彼とは梅が峠で別れた。そして……遂に来ました下関16:45着。あーしんどかった。でも無事故で良かった。あとは旅館の風呂に入り、うまい物食ってノンビリするだけだ。　本日の走行距離 212km

という訳でこの話はオシマイ。実際はもっと色々な体験をしたが紙面の都合上カットしたので悪しからず。

さて最後に後輩諸君に一言。人それぞれ、自分に合った走り方があるので一概には言えないが、長距離ソロラン一度はやってみて欲しい。合宿などでは、どうしても身内で固まってしまう傾向があり色々な人と話ができないからだ。又、何事も自分で判断せねばならない厳しさはあるが、それだけに自由であり楽しみもある。シュラフのみ持って、どこにでも寝てやる式の旅もオモシロイと思う。暗くなってから駅を追い出され寝床を求めてさまよう様な経験、中々できないと思う。まあとにかく、自分のやりたい事はどんへやって悔いの無い大学生活を送ってもらいたいと思う。

びよんど でぃすくりぷしょん

うーん リキンだわりには ショボかったりして。

Mr. Dakyo → 6631 古木 登

「あ、古木さん、灰皿取ってよ。サンキュー」

「あ、弁当買いに行くの？ ついでにジョア買ってきて。」

「古木さん、何やってるの？ それじゃないでしょうが。今のはパッソー切るのが正解じゃんか。まったく何考えてるんだろうね。」

「あれ、古木さん、また午後空いてるの？ え？ まったくヒマなんだねえ 留年したいねえぼくも。」

「ねえねえ古木さん、4年生の追いコンなんだけどさ、古木さん出ます？ なに？ 追い出す方だよもちろん。あ、そうか、えへへ、そうか。山口と同じなんだな結局」

「そんな事 古木さんにとっては 無理・無駄・無意味の3原則じゃん」

「ローン！ リャンワン！ 古木なら出すだろうと思ったよ。」

「またいじけてる。ったく すぐイジケるんだから、年寄りは」

「何だよ遅いなあ早く読んでよ。次ぼくがリーチしてるんだから。そうそう『釣りキチ三平』なんて読んでないで、早く早く。」

よせばいいのに毎日部室へ行くと、元部長のOだとか前部長のS、あるいはムーミン山口などが、ぼくの事をバカにするのだ。就職の決ったMなどは、研究室に往友が居ないというだけの理由で、わざわざ混一色をやりに部室に来る。あげくのはてに御識人であるぼくを酷しいれるワナ（ドヒッカケのカンリャンワン）を用意しているのだ。Oに至っては、ぼくのセンチメンタリスティック・ストイシズムを全く理解しようとせず、（この点は表面的には小島の独壇場であるわけだが）何かにつけてムリ・ムダ・ムイミを持ちだすんだからいやになっちゃうよ。どうしてこげなクラブに入部したとかなあ、ああ、うう、ぼくの心は千々に乱れるのであります。思えば良かった、1年の夏合宿。

1. 昭和51年度　夏合宿　中東班（チョントン）

北海道の東方見聞録、ここ花咲の小学校校庭では、期せずしてクロもり組とハイテン組に分裂してしまったのだった。ジンギスカンなべを囲んで　なごやかに夕食…　などと思ったのも機浜の山の手の出身のぼくとしては無理からぬところ、その眼前に繰り広げられたる血で血を洗う壮絶な斗い、それが他でもないわれらがハイテン組なのであった。人間、義理だけはしたくないもの、いかに高貴な育ちのぼくにしても、鈴木氏のフォークの魔術の前には、必殺、チョップスティック・インターセプトの技の応酬を禁じ得なかった。　これがそもそもの食い意地

の張りはじめ。そもそもサイクリング部の伝統とか言って、合宿のメシ時に限ってやたら腹の中に有機物をつめこむやつがいる。52年度の春合宿の時には6人で2キロの米をたいらげて、まだ腹がへったという雰囲気をあたりにまき散らしていた。たとえそのメンツが、沢木氏、永見、鈴木4、小島、小野、ぼくという欲求不満型大食い人間が揃っていたとしても、許される筈がない。王さんがホームランを打てるのは、もりもり食べるからであって、ガツガツ食べるからではないのである。だいたい、メシばかり食いすぎると、クソが黄土色になり、異臭を発するようになる。これではとても、便所に財布を落したとしても拾う気になれん。よくこんなクソ袋を、われらの自転車は乗せてくれたものである。もっとも、ぼくの自転車はメタ茶色ではあるが。

2. 昭和52年度　夏合宿　東女(トンジョ)班

これはまったく言うことないよ。行く直前までああだこうだ言いやがって、宝谷さんが雑事すべて解決してくれたから、ぼくがどうのこうの言うのもおかしいけれど。途中で東女とお別れして宝谷氏と走ったときの爽快さと言ったら…ま、それだけでも行った価値もあるか。だいたい、女の子と合宿行くっちゅーのはどういうもんでしょうかねえ。彼女らにしてみれば、もちろん言い分はあるでしょうよ。「体力」とひとくちで言って

しまえばそれっきりなんだけど、女の子っていうのは、男の子とは全然ちがうのよ。とってもリリックなんだから、自転車なんて、普段乗る分にはゼーンゼンどってことないけど、1日中乗ってて、何十キロも走るとなると、女の子にとっては拷問なのよ。私なんて、何度イッちゃったかわかりゃしないもの。砂利道なんて、スゴイのよ。ああ、もうやめられないわ。上原君なんて、泣いてすがるんだから。あのひと、ヒゲヅラさげて卒研やってるけど、本当はとってもカワイイの。小島君とはエライちがいよ。そう言えばね、涌島君も曽我部君も土井君も「まだ」なんですって。いやあね。あのトシでまだなんてね。カビがはえちゃってんじゃないの？そういえばね、三浦君はね、こないだ、ホテ……　**おっと**　ここらで正気に戻りたい。戻りたいのはヤマヤマだが、ここでハッキリさせておきたいことがある。それは、ぼくと東女との間には、何もないということだ。「なあ〜んだ」そう思うだろう小川君。君は当然だと思っているだろう。スズキ君、きみもだ。　だが、ヤッチマオウと思ったらできるんだよ。ほんとだよ。だけどちっちゃいから自分のことヤッチャンって呼ぶんだよ。おかしいね、ヤッチャン。だってさあ、あのムーミン山口がさあ、別府で…　うぷぷ
エスカラリーの時には、ぼくはK女史を旧式チェリーに乗せて軽井沢まで行ったんだもんね。ランラランララン、ウォップ。

3. 昭和53年度　夏合宿.　南北班（CSERSC）

うーん、これが問題なんだよなあ。ぼくとしては、ちっともおもしろくなかった。そりゃね、マスカキ班よりゃずっと上品だったし、リッチだった。だけどちっちゃいから自分のことヤッチャンて呼ぶんだよ……（デュワ～～～ ⇐ 小島いわく）

追記「ちっともおもしろくなかった」と言うのは言いすぎだと今では思える。実際、「ちっともおもしろくなかった」と思ったのは打ち上げの時だけだったと思われる。今では、「ちょっとしかおもしろくなかった」と言い換えるのが適当であろう。何しろ、かの有名なマスカキ班に圧倒されてしまった。後になって斉藤が、「シモの話が出なきゃおもろくないよ～」と蚊の鳴くような声で語ったのもそれを証明している？　今では、この夏合宿はぼくにとってかなり多くの教訓を提供してくれたものとして価値があるのである。この時は、瀬辺君がぼくの気持を察してくれていたのがとてもうれしかった。

4. 昭和54年度　夏合宿　出羽の海部屋.（出羽ごもり班）.

こりゃまた何といおうかメチャメチャハッチャキ　カラオケ付きのハッピーオメデタ夏合宿だった。ぼくの気持ちとしては酸いも甘いもかみわけた年代になって4回目の夏合宿というわけで過大な期待もせず、むしろ「どうなるんかな～」という絶望に近い気持でスタートしたのが幸いしたのかも知れない。それにしても

バカスズキの個性、アホ村瀬のカセット走行、ボンボン嶋ののんびりペース、そしてスーパースターの古木君の四身一体とも言うべき抜群のチームワークは、ムーミン山口のひきいるゴキブリキスカ班を圧倒して余りあるものだったと本人は思っております。ハイ。それにしても心細かったのは高海山の山小屋でムーミン山口、ゴキブリ永見、キスカ斉藤が実に軽々とスカイラインを上って来た時のことでした。しかし次の瞬間、ぼくは勝ったと思ったね。それは1年生のチャリンコイジクリ吉田君と何も形容詞のうかばない三井君が黙々と先輩の言いなりになってたのを見た時だった。こっちゃ何しろアホ村瀬が「こんな肉なんか食えるか」と言いながら ヒトの分まで肉を食って知らん顔をしてるくらいだからね。さらにダメ押しは斉藤の、「シモの話がでないよ〜〜」「マスなんか カケナイヨー」だもんね。かわいそうに彼等は豪雨の犠牲となり、山形のぬかるみの中へどっぷりとのめりこんで行くのだった。それにしても小川なんぞ土浦のIBM相手に奮戦ヨーデルスだったとは。

（註 IBM = Ibaraki Busu Musume）

それでは次に春合宿の話をしよう。ナニ？聞きたくない？別にかまわんゼッ。長老の話をないがしろにする奴は、今にセルゲイに食われて死んでしまうゼッ。西尾、聞いてるか？最近全然会わんなあ。腹が出すぎて会えなくなったんかなあ。

5　昭和51年度　春合宿　山ごもり到王.

大杉谷へは1度は行ってみるべきだ。ここは自転車は不要だから宮川村に自転車は置いて、晴れた日をねらって、2〜3日かけて絶対行くべきだ。（ただし現在つり橋が落ちて行けないかもしれない。このあいだ観光客がつり橋を落としたらしい）そうは言っても行ってみるべきだ。行く価値はある。行け。行ったら桃の木小屋のおばあちゃんによろしく。この合宿は抜群だった。

6　昭和52年度　春合宿　山ごもり到王.

この合宿も良かった。石鎚山はあくまで雪をたたえて我々を寄せつけなかった。石鎚スカイラインから眺めた石鎚山は、鬼気せまるものがあった。（だいたいこの合宿なんだよなー　クツが黄土色になったのは。　そんでもってさー　永見が沢木氏のメシの食い方を見習いやがって　セコイというよりもスゴイの一語につきるよ）

(CM) エライ！永見！　リコイ！永見 (CM)

永見と言えば　ピークワン
　　ピークワンと言えば　永見

フレー！　フレー！ナ・ガ・ミ

ソレッ　フレーフレー　ナガミ
　　フレーフレー　ナガミ

『ロ――ン！』リーチ一発ドラ6！

7 昭和53年度 春合宿 山ごもり班?

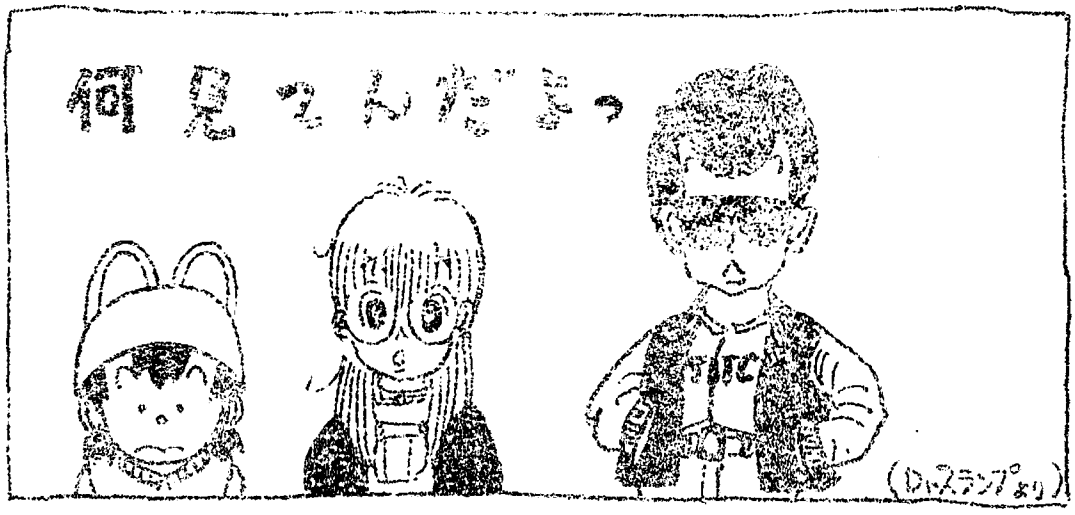
だいたいさー せっかくブルートレインに乗れたのにねー

(註。これは打上げ後の帰宅の話である。この春合宿では山口君が別府で、高橋君が山陰で、それぞれしていた) 春合宿での楽しいが色っぽくない思い出を胸に、三浦君と吉木君は特急みずほで博多をあとにしたのだった。B寝台は3人がけの6人ボックスだった。ぼくらの隣りにはうら若き女子大生が、これからはじまるであろう都会の生活への期待と不安を胸に、サガンの小説など読みたるもいと哀かし。ぼくはおとなだちにほりたかった。三浦君と話をしながらも、ぼくの心は「オイ三浦、気を効かせんかい」と心にもないことを思っちゃったりなんかして。三浦が下関でマンガを買いに行った時、イケナイ イケナイと思いながらも「寝り遅れろ」と念じているぼくって、悪いヤツ。でも女の子って寝台車で、どんな格好して寝るんだろうか。ぼくはそんな純真な疑問をもちながら、何度もカーテンをつまんで覗こうとするぼくの手を制止しながら、夜も眠れぬ問絶逆さクラゲを演じているのでした。パジャマかな? ネグリジェかな? 翌朝、ぼくの目覚めを襲ったのは巨大なテント、いや富士の嶺でした。

結局何にもできないで横浜に降り立ったぼくの背後で、小川のあざ笑う姿が星一徹となってのしかかってくるのでした。でも本当はその子ブスだったんよ。よかった。

最後のあがき　ボクの反省しょん

正直言って、今1980年1月17日です。本当は80年のO.L.の事書いちゃいけないんだけれど、正直言って優勝できてうれしかった！　と　この事だけ言うために　項を設けたわけなのですが、正直言って曽我部が居たら負けていたであろうと思われます。それほどボクにとって（あるいは我々の代を輝ける6000数台にとって）曽我部のリキというのは驚異だったのです。その　われらがヒーロー曽我部君が、T.T.で永見氏に負けた時、我々の時代が終ったと思ったのはボクだけでしょうか。



それとともに　我々の時代っていうのは、我々みんなで　つくってきたものだという　ほんの1グラムの心意気が　ヤッパシあるんじゃないだろうかという思いを胸に、そして　何とも言いあらわすことのできない　なつかしさが　今現在ボクを包んでいるという事実を胸に、本文を終了することにいたす。

ゴメンナサイ、サイゴノホウスペースがナクナッタ！

Wow! Good [illegible]

[Yes, a girl [illegible] of [illegible]

[illegible]

★6097 上原孝秋(出)[illegible](得)[illegible]

得意技＝「ゴメンネ」とあやまりながら口ンチョ　必殺技＝[illegible]

胃腸が悪く勝負の途中で顔面蒼白になり[illegible]

なる★6128 小野賢治(出)アイラン(得)[illegible](出)[illegible]の女子高生

の人気の的　いわく「マジメでかわいい」　必殺技＝ゴムカミング[illegible]

★6149 木塚隆夫(出)江ノ島(得)江之島(得)江之島　BWH　江ノ島

(趣)プロレス　愛読書＝ゴング　(得)アリジゴク　必殺技＝チリーで[illegible]

★6282 小島正也(出)[illegible]　どっかで聞いたことあるような……

(元)サイクリング部員　(現)サイクリング部宣委員　(夢)(何に関しても)[illegible]

(得)フェイント　必殺技＝就職する就職する →事故→ すいせん入院

★6350 佐藤恭輔(出)郡上八幡(得)大貧民でありながら[illegible]

に大富豪に恐威を与える(必)とくいの大貧民ストレートカード5枚以上[illegible]

★6414 鈴木直夫(出)浜松南(得)ヨガ(必)断食(世)「ネエネエネエ[illegible]

★6424 曽我部成一(出)ウラワ(得)キン肉[illegible](元)ヒーロー(現)[illegible]

それでも走った　青森一下関　ブルチギリ　向い風と戦う男の姿がそこに

あった…★6548 西尾毅(出)略(得)略(必)略　西尾に負けたら恥[illegible]

★三浦洋嗣 6672(出)ムサシ(得)七対ドラドラ(必)カンリャンワン待ち、リー[illegible]。

★6763 吉田弘行(得)青森ねぶた　★6777 浦島恭司(得)クェー(必)[illegible]

The Theory of Characterization of Cyclingclubtic Person.

BY. T.OHTSUKA

<Introduction>

4年生になって論文などをムリヤリ読まされているためクラブを脱退するにあたり. TITCCについて. ムリヤリに理論をうちたててみよう。

<Calculation of Potential>

1. サイクリングポテンシャル

このポテンシャルは. 最も重要なものであり. 慎重に決めるべきである。その結果 下の関数を用いる

$$\mu_1 = -\frac{1}{4}t(t-4) \qquad \text{----(1)}$$

t: クラブ在席年数 (ただし $0<t<4$)

2. 活動度ポテンシャル

サイクリングポテンシャルがサイクリングのテクニックであるのに対して. これはクラブへの貢献度というべきか. 活動度ポテンシャルは年がたつにつれ減少するとみられる.

$$\mu_2 = \underset{\text{マイナスがつく}}{-}(t^2-16)\cdot\frac{1}{16} \qquad \text{---(2)}$$

3. 酒ポテンシャル μ_3
4. タバコポテンシャル μ_4
5 女ポテンシャル μ_5

この3つについてはかなり安定性があるためパーソナルパラメーターのみを用いる。

(注) Personal Parameter : α

これはクラブ員のうち最も優れているものに対し $\alpha=1$ 劣っているものに $\alpha=0$ を適用する。よって平均値は $\alpha=0.5$ である。

6. ギャンブルポテンシャル

このポテンシャルは、ほぼ $t=2$ で定常となる

よって　$0<t<2$ のとき

$$\mu_6 = \frac{1}{2}t \quad \text{----(3)}$$

$2 \leq t < 4$ のとき

$$\mu_6 = 1 \quad \text{----(4)}$$

7. Car Potential

なぜか英語で書いてしまったこのポテンシャルは、やはり年がたつにつれ運転がうまくなるということで下記のようになる。

$$\mu_7 = \frac{e^t - 1}{e^4 - 1} \quad \text{----(5)}$$

<Total Potential>

$\mu_1 \sim \mu_7$ までに先に述べた personal parameter α をかけると、トータルポテンシャルとなる。

よって、

$$\mu_{total} = \sum_{i=1}^{7} \alpha_i \mu_i \qquad \text{----} (6)$$

となる。μ_{total} の最大値は、α をすべて1にとり在庫年数をあてはめて計算すればよい。

<例> 平均的クラブ員 ($\alpha = 0.5$　$t = 2$)

$\mu_1 = 0.5 \times 1 = 0.5$

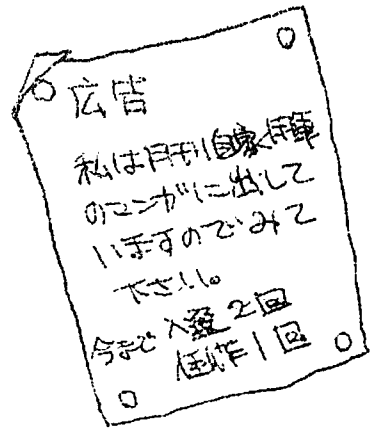
$\mu_2 = 0.5 \times 0.75 = 0.375$

$\mu_3 + \mu_4 + \mu_5 = 1.5$

$\mu_6 = 1 \times 0.5 = 0.5$

$\mu_7 = 0.5 \times 0.119 \fallingdotseq 0.06$

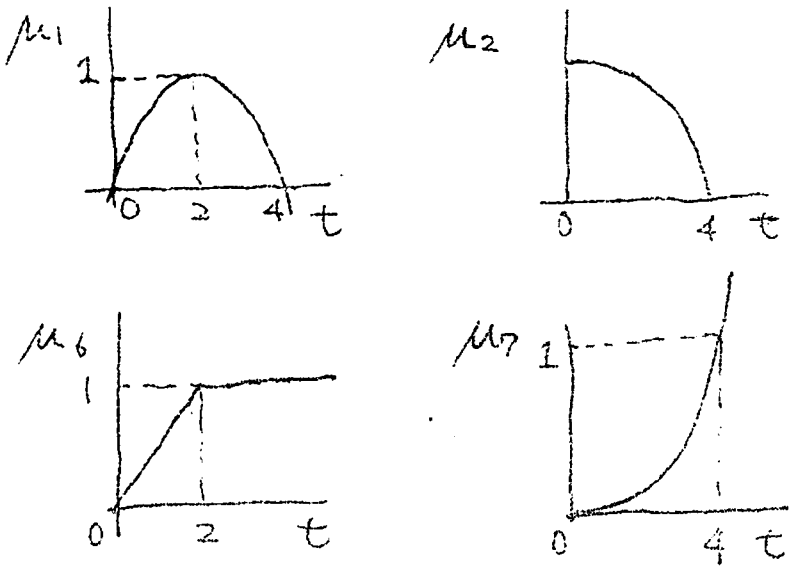
$\therefore \mu_{total} = 2.935$



ということになり、かなり信頼性があるかどうかは、疑わしさよりも、ばかばかしさが先にたつ気もするとは隠らないと思う。

<Discussion>

さて おのおのの ポテンシャルは以下のごとくである.

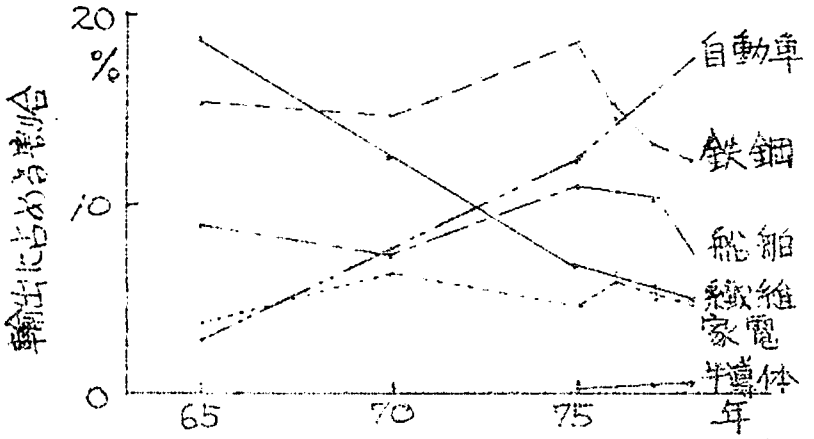


このように TITCCについて 東工大的な考察を加えたものがなかっただけに この論文は非常に有効かつ評価されるべきものである。とかなんとかいいつつも 私自体 もう学生生活とお別れするのは さびしいが いたしかたなるまい。物置に眠っている愛チャリを想うと数々の場面が鮮かに再現されるが 何事も前向きに あまりノスタルジックな気持ちはどうかしらネ....

疲れました. 完

日本経済の高度化　　志賀邦男（すずき野産業大学教授）

1. 輸出構造の変化



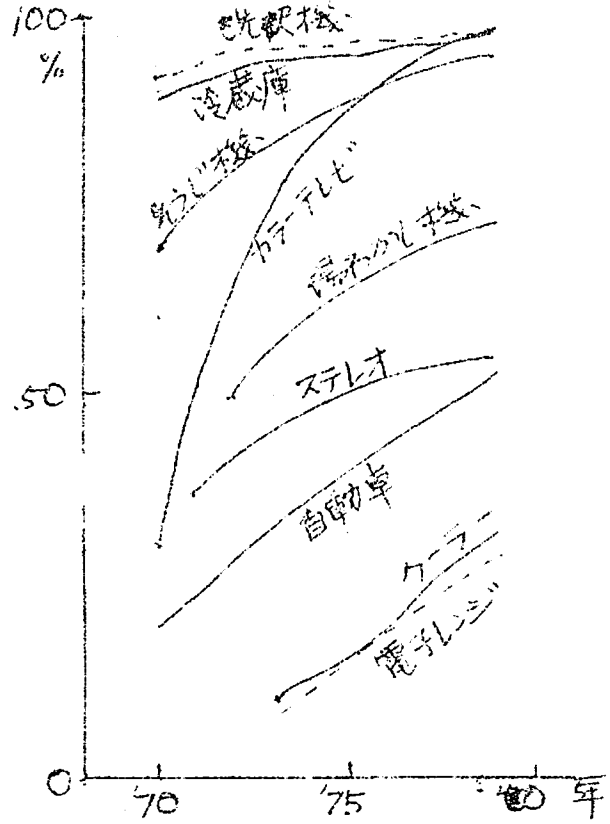
（資料：エコノミスト 1月29日号のデータより著者が作成）

'65年の輸出品の主力は繊維であったが、日米間に繊維紛争が起こり、その後発展途上国の追い上げもあって輸出に占める割合はどんどん低下し、'78年には5%程度にまで下がっている。鉄鋼・船舶・家電などは'70～'75年に増加してきたが、最近では繊維と同様に米国と紛争があり、輸出における割合は徐々に低下してきている。これらに代わって輸出の主力になってきたのは自動車である。'65年にはわずか3.1%だったのが'78年には17.6%にまで増加している。燃費の良い日本の小型車は世界で売れゆきが良いが、輸入国との摩擦も問題になり始めている。

将来日本の輸出の主力になると思われるのは半導体・コンピュータなどのエレクトロニクス製品で、半導体はまだ輸出額の割合が小さいが既に世界のシェアでは米国50%に対し日本は30%を占めている。半導体における日本の技術

は米国と並んでおり、労働力の質の差を考えると日米逆転は必至であり、もう日米半導体戦争は始まっている。

2. 家電製品の普及率



（資料：経済白書 昭和54年版）

洗濯機、冷蔵庫、カラーテレビ、そうじ機などはほぼ100%近くなり、完全普及したと言える。湯わかし機もいずれ完全普及するだろう。ステレオは生活必需品ではないので100%近く普及することはまずあり得ず、最終的に60～70%程度に留まるだろう。自動車も住宅事情や交通混雑などからそれほど普及せず、70%前後となろう。クーラーや電子レンジについてはまだ予想し難い。（了）

理想的帰キョウのしかた

○○武史

☆はじめに、

題目に関係の無い事であるが、今年は部誌が配ばられるのが恐ろしい。毎年へ部誌の中でみい難そとして、夏合宿があるからである。こうして原こうを書きつつも、夏合宿をチョンボした自分に対する、嫌悪感がわく。にもかかわらず、また春合宿もチョンボしそうな自分に対して限り無い落ちこみ。なにはともあれ、今まで何度も東京↔高知の間を行きしているので、色々と思いつくまま書いてみる。

☆理想的帰郷のしかた。

今まで、何回東京→高知をたどったのだろう。高校2年以後で数えてみたい。高校2年(一)入試のごたごた(下)大学(正下)合計12回であった。バラエティーとしては、飛行機(高分)(大阪経由)国鉄(新幹線+土讃線)(大垣行き+大阪まで普通+船)(新幹線+船+バス)、自転車+車+船+国鉄等である。もちろんこの中で最もラクチンなのが、飛行機である。朝に東京を出れば、昼食は、自宅である。またその時間は、東工大→青梅と同じ時間なのである。しかしながらこれは、あまりにあっけない。かといって、自転車で5日もかけて、帰った時は、死ぬほどしんどかった。私のベストチョイスとし

ては、やはり、新幹線＋中央線＋船＋土讃線のオーソドックスなルートである。

さて、上に示した理想的ルートに従って思いを発展させてみよう。

出発するのは、午前6:30である。なぜなら、東京駅で自由席に座るべく、ならぶためである。天気は、小雨が適当である。理由は、帰京が雨になると、客がその度ごとに増えるからである。

AM9:00よりすこし前位の新幹線「ひかり」に乗り込む客は1度全部座がうまる位がよい。もちろん使は下席にすわる。下席は、進行方向に向って右側の窓ぎわである。「ひかり」は、音も無くすべり出す。そして有らく町あたりまで、やや力だめしもて、あとは大崎まで、ミドリ電車や、青電車や、ツートン電車や、赤電車にその勇ましい姿を見せびらかす。ほど無く多摩川をわたり、中原街道をいにすると、にわかに全力で走り出し、特有のムーガタン！ムーガタン！ギーガタン！という音を出しながら逃走する。

新横浜の駅を過ると、以前の下宿にいっこす時、トラックでドライブし、KFCが駅前の所で何度もエンストし

た事を思い出し、ニコリとする。

となりに座るのは、必ず男である。まだ30才以上のジェントルマンはいいが、時にはヤクザのオジさんや、バカ大学生が座る。ジェントルマンの読み物は、週間現代等で、以外は、エロトピアを代表とする悦マンガである。やはり、ジェントルまんの方がよい。俺は、富士市のあたりまで東京で買ったサンデーを読んでいる。そして富士山がうしろへまわると、ウトウトしている。フッと気がつくと、浜名湖である。このあたりを磯か厳木の家に昔しあったカローラで、案内してもらったなと、毎度の事の様に思い出す。

関ケ原で雪がふっているとおもしろい。特に2時間10分遅れとなると、大阪から岡山の間で新幹線が、満身の力を出して走り岡山までに遅れを1時間50分にしてしまうからである。しかしながら、定刻に遅れる事は正に致命的な不理があるので、理想とは言えない。従って、停車駅ごとにバカずらして待っている人の顔でもながめつつムーンガタン！ムーンガタン！と岡山に着く方がよい。

中野線はいつも長分が悪いのであまり書きたくない。ので書かない。

中野からは待望の船である、これには阿波丸とか色々ある

が俺が乗るのはもちろん「土佐丸」である。船に乗ると、まっすぐに、うどんの売店に行く。出航するとすぐにうどんが売り切れてしまうからである。最初かけうどん、続けざまに、月見うどんを食う。食い終ってフッと目を上げると、もう徳島が見えるのである。やおらキャビンに入り見のむく時はビール等をのむ。もうそこらへんに土佐弁が聞こえる。

「まだ高松に着かんかえ？」

子供の頃にばあさんが、

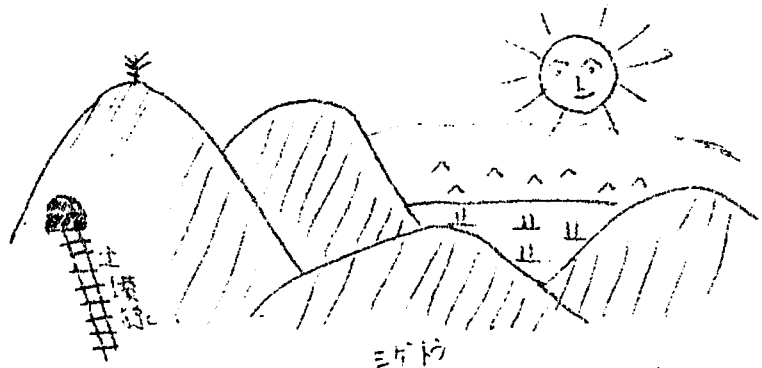
「ああ、と待ちよりなさい。もうすぐと着くきん。」

なつかしいまんだなあ、四十年ぶりに土佐弁でえいらにしゃべれる。げにまっことうれしいぜよ！

高松に着くとまず、席を確保する、そして、マガジンを買って読んでいるうちに発車である。対面はOL～30才位の女の人、となりはばあさん、ばあさんの対面はエロトピアを代表とするマンガを読む人が理想である。眠るのうちに阿波池田。

阿波池田では、そばを食う事に決っている。ふしぎな様にも思うが、高松ではうどんしか売ってないが、池田はそばしか売っていない。そばをすすっているうちに、

となりのバアさんと話し始める。もちろん標準語である。バアさんは、必死に土佐弁をかくしながら話すが、無だである。これを見ととげると、こちらも土佐弁にスイッチを入れかえる。話しているうちに、対面のネエさんも話しに加はる。三人の話しはつきないが、エロトピアは、ただ一人だまって、三人の話を聞いている林であり聞いてないようでもある。



話し込んでいるうちに列車は、[illegible]を過ぎる。そしてフッと目を窓の外にむけると、山あいから見える青い海に大きな太陽が沈もうとしている。東京の雨はうそのみたい天気である。列車は山を下り、ほどなく後免(ゴメン)に着き、長かった回廊も終る。そして、そこにはオヤジが居る。愛車ユロナにポンピングしながら、自作満々家まで着く。時は PM 9:00 である。

待っているのは、酒と魚と母である。

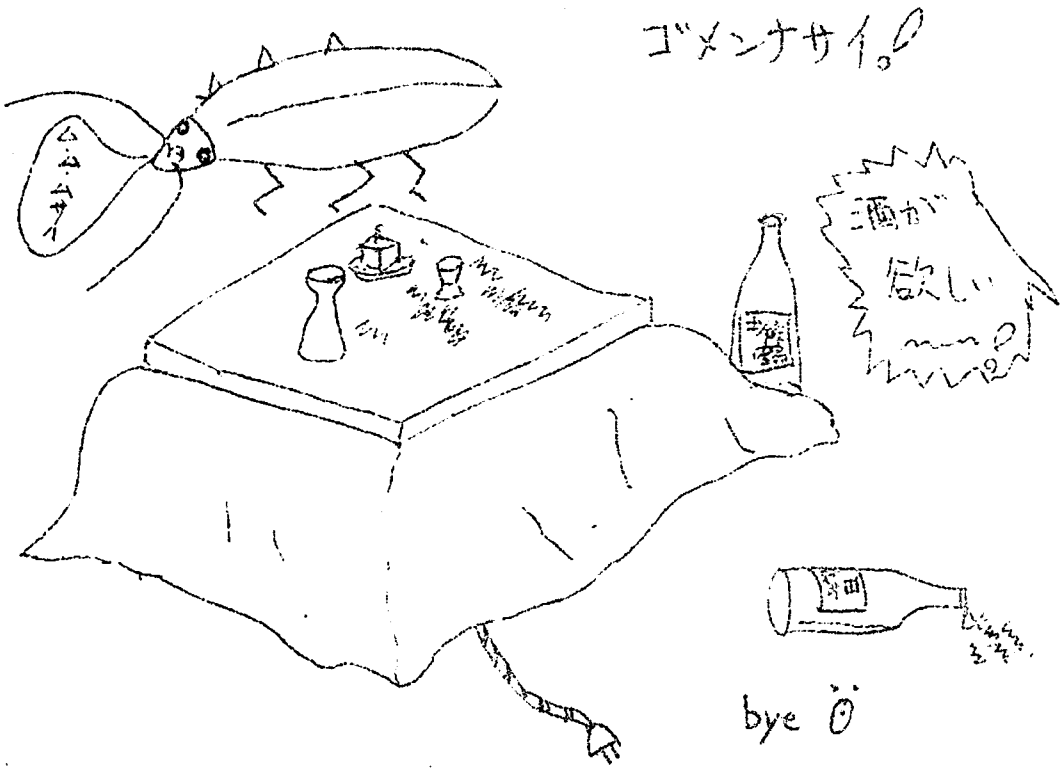
やっと帰り着いた。こう思いつつ酒に手をやるのが理想である。

余談

今年の部誌は、二ページ単位なので余ってしまった。実は本当は、「理想的帰宅のしかた」が書きたかったが、書けない。ウジウジしながらもヤンピを決定、果して、昨年の部誌に目を移す。

既に付いた者ず一つ目、三浦さんは、今年も2部を書くのでしょうか？また本さんの最後には「つづく」となってありますが？私はこれは絶対の禁句にちがいない事は百もしょう知ですが、そこを見のがせず、またふせる事を知らず、大っぱらに言ってしまうのが私の悪いくせです。

ゴメンナサイ。



フォッサマグナは日本の割れ目

永見 哲

話も前に……これは私が今年の試験休みに行った校内一分析一地質一青鞜株フリーランの話です念の為。

時は四月始めの平日の午十時ごろ、所は新宿駅アルプスの広場、山屋さんたちが列車を待っている所に似た様な事をしているがわけのわからないズタ袋を持った男が一人まぎれこんでいる。

サイクリストはこれにたえなくてはいけない。つまりこの非常はキタナクかつ大きな鞄行袋と紐きまズタ袋を持って周囲の注目をあびる事に。

もし近くに好奇心のおう盛なかキでもいようもんなら……

かキ(横に聞く)「あの袋なーに?」

親「エーなんだろ。」

かキ「聞いてくる。」(こちらにオズオズと近づいてくる。)(サイクリスト無視)

かキ「ソノーこれ何が入ってるんですか?」

サイクリスト「これ? 自転車だよ」(もいいっぱいやさしく)

かキ(親に報告に行く)「自転車だってー。」

かキ(しばらく親と話した後戻ってきて)「この四角いの何ですか」
注.フロントバッグのこと

サイクリスト「自転車につけるバックだよ。」

「かキ「へーどこにつけるの?」(だんだんおもしろくなる)」

「サイクリストハンドルのとこだよ」(この頃国国の人の注目)

「上にのっけんの?」

以下際限が無いので略するが結局ハンドルを引きずり出すはめになることはうけあう。

となるはずだったが今回はちがった。山屋の女の子がふしぎそうな顔をして「これ何ですか」と来たのである。

当然返事からしてちがう。「ッこれはですねー自転車をがうして中に入れてあるんですよ------」以下をかれをしないこと、までしゃべる。ヨハハハ

そして翌朝6:00ごろちの駅前(ちの=茅野,念のため)

輪行していると、当然ヒマなタクシーの運ちゃんが寄って来る。以下V.S.O.P的問答

運ちゃん「おー自転車かー、重いだろ」 サ(持ってみー)

サイクリスト「えー まー」(サイクリストは手を休めずに返事する)

運「何キロぐらいある?」(ムなもしろか)

サ「えー13キロぐらいですかねー」サ(どうせいくらか聞くんだろ えーとブーレンネ)

運「えーと、それいくらぐらいするん?」サ(かれたがい)

サ「えーと、12~3万ぐらいですねー」サ(今日はどこまで行くか聞くんだろ えーとペダル、ペダル)

運「で、今日はどこまで行くん?」サ(どこでもええやろ)

サ「大河原まで行こうかなー」サ(えーとおくびょーすぎて)

運「何時間ぐらいで走るん?」サ(疾走したろか)

サ「さー，日がくれるまでにゃうくでしょーね」

運「ふーん」サ（何か文句あるんかい？）

運ちゃんはたいていここらで話題がなくなって立ち去るかなって見ている。

ところが相手がサイクリストとなるとなかなかではすまない。

まずふつうのあいさつから会話は始まる。

「今日はどこまで行かれるんですか？」

「えー秋葉と分校にえて天河原ぐらいまで。オタクは？」

「同様銀行にと思ってますねん」（物好きなやっちゃ）

などと月並みな天気の話をしている間に相手の自転車を鋭い目つきでバシッバシッと観察する。

「はー しゅ、ですか自慢の方ですねー」（勉強やがったな）

「えー おとしぐらいに買ったんですけど今はないですかて」

「はー オタクはカンペですねー」（この成金め）「ギャバシティ（ビーじゃ）乗りますか？」

「えー なんとか，二九も良りんですがやっぱり鉄レコが最高ですな」（どこがえーんじゃまんなコットー品。）注．鉄レコとは鉄制カンパレコードのことです。

以下際限が無い故に略すが、さりげない言葉の中に毒のある会話がアア発止とつづく。

時一なんのかんので走り出したのが8:00ごろ。なんで2時間もうじゃうじゃとかもうと今一つ天気がえなかったのと寝のり一件をしていたのと気のサイクリストのせいである。

ビューンと枝突峠をかけ上るとスピードも出てきて眼下に茅野の街や田園風景がダイナミックに広がる。

と，ここまでは良かったのだが，峠でくつろいでいるとバスがドドッと来て中からガキどもがドドッと降りて来たかと思うなり ワヤワヤカヤカヤワイワイガヤガヤドタバタ，早々に退散になる

あたたかな日ざしの中を快調に下れる。夏しきも割と良くついつい眠くなってしまう夜行明け。

長い下りにあきたころ高速に着く。絵葉書のハガキのある寺があるが見てもおもしろくも面白くもない。注絵葉書を知らない人は勝手に調べてください。

高速で食料をしこたま仕入れて分杭峠に向う。

*紅葉の道を通るがこれもおもしろくも面白くもない 南アルプスー林道への分岐点ではトラックはビンビン通るしダラダラのぼるし個人的に眠いしたるいしどーも調子が良くない。

市ノ瀬を過ぎたあたりから地道になる。パワーに物を言わせて登るがついにタカトミッてしまう。40×24では歯がたたないのでしばらくふてくされた後，低速の軍力30×24にぶち込んでガラガラ回して登る。注タカトミを知らない人は本人に聞いてください。スポーツ用語でかなと思います。

どーもさっきから上の方で人の声がすると思ったらトラックが脱輪してエンコしてた。オキノドク。

ヘアピンをクリアすると木々の間から峠と分杭で登って来た道が見える。(オレはあんな所にいたのか，アーアあそこまで行くのか)

峠に着く，ちょうど正午，したたま買って来たのをしたたま食べて写真をとって，当然の帰結でネムクなる。

自でしばやあらかくちょう石も転んでザックを濡つつうはオヒルネタイム……，……．

ハナの頭をはかがハイ回って目かもめた．日がサげって来た，明はて明，南風，雑霊，山に笠，ヒヤハイ。注おの前兆である。

下るッ下る，どんどん下る，ゲートが恐くて峠に行けるか！ちょっとテーパをすべらせてカーブをクリアして次のカーブへのルートを見定めて，ホをけちらして下る。

で，下ってると，ウォップ，大型トラックが道幅一杯に寝って来おった。しかも蛇腹を組んで。ワシはどこを走ればいいんじゃ，左は落ちるしキモイので山側によってせいぜい身を細めて通ろうとすると前は大石，ウォップウォップ右はトラック左はカベ前は大石カベにしばって。（教訓プレーヤは早めに）

結局砂ボコりが通りすぎた後，手の平をすりむいていた。まあ命があっただけでもめっけもん。手にほーたりをぐるぐるまきにして急もどりながしで下る。

鹿塩川にそって下ると鹿塩温泉がつく，谷のウラに塩見岳に連なる山々が望める。

遠方の分岐を左にとると少しで大河原に着く，今夜の宿は赤鹿館，小渋橋の近くにある。

宿に入ってくつろいでテレビなどを見ていると雨が降り出した。山はかすにかくれてしまった。

食事は、なかなか自分っ方とまえる。ところで個人的意見であるが、どーもYHというのは民宿等に比べて相対的に高い様な気がするのですがどんなもんでしょ。

天気予報を見る。ムッ明日は晴じゃダメ、今の内にふってしまえと思いつつ大部屋を一人で占領している。……

朝、どーんと雨音が聞える。絶好の日和である。

ゆっくりアップをおねて走り出す。日はまだ低く、山は長い影を落としている。

さすがに朝早いせいか車は全く来ない。やがて地蔵とりつけがふき出すこの正面に地蔵峠が望める。地蔵峠に下る沢をわたって尾根にとりついて登り始める。林道は工事中となっていて通行止であるがかまわず通ってもよいし迂回してもよいし尾根にとりついても良い。工事現場にぶつかるかぶるとこから下れて旧道に入る。トラバースを注意して割とはっきりした山道を何回か曲がるとささやぶの中の峠に出る。

峠には、その名の通り、地蔵がまつられている。展望は全く無いが、その佇まいは心を和ませるだろう。

ここで煙草でもすえれば絵になる奴どと考えても始まらないのでそろそろ下り始める。

少し下ると川沿に合流する。右に川を見ながら、夢のほそ道と言うべき道を下る。時々沢で道はとぎれるがルートはすぐ見つかるだろう。自分でルートを探しながらの下りは未知への期待とスリルに富んで仲々楽しい。パスハンのダイゴ味である。

道がなくなったら河原だろうとやぶだろうとしにかく水の流れる方へ下れば良いと言う気楽さ~~[illegible]~~でどんどんする。

ガマガエルをふまえたり様に注意して沢をトラバースして行くと河原に出るはるか下に登山道が見える。

ふと上を見ると大きいっぱいかかえたケーブルが通って行く。あれが夢の二条ロープウェイか。

登山者が多い所迄でもと上村にまで下れる。(とはいえこの時ってら長い)

で、和田の分岐点に来たのが二年少し前、これがきモイ。

最初の計画では、ここに来るのに長すぎる様なら青崩峠はカットのつもりだったが、行ったれ、行ったれと言うことでGO!

少し登った所でお弁当(特製大型おにぎり)をHiCアップル500cc とともに食べる。

再び登り始めてすぐガードとなり、水をまきながらぐいぐい登る。

旧鉱業街道の名残りの石垣が目につくころにはもはや頂とすぐ近く日頃の鍛りはどこへやら目はすかり前に雄大な青崩が見えているのだが次はあの日影で休むのだと言う決心ばかり。

服装も楽にはれかえた。毎度の事ながらこうまう事の水はうまい。

ここより先は山道でいかがしの子供が案内してくれるとうう。思った以上に大きな書籍が目の前に見える。(書籍とは大きなかがしのこと)峠には建てした道標と地蔵が二体ある。風景は雄大でいかにも大断層チックな直線的な谷が南北に連なる。

ここから先は遠江の国である。数度かうおまったフッシュマグナの旅もここで終りである。なぜか一人で感かいにふけったりするが是った者にとってはとっても良い気持ちなんでありました。

ながしかし静岡県はこうかは鉱物の生きかた計画はおくれてがッかまっていた。

峠でしばし休憩した後下り始めたのだが、ちょっと下っても自転車に乗せてくれないのである。なかなかしつこいこの道は遠切れるわ、えらい目にあってもうた。

しばらくトコと足神社がある。何かしらんが出はまくそうでリキ無しと悩んでる人は一度行ってはどうでしょうか。

しかし林道に出た時は自転車はこうして使うものだと再確認をしたんだけである。

水窪への道を下っていると、前を走る車の中からふかき様が笑いながら手を降っている。こちらとしても気げんが良かったんので手をふったりして、結局、芸を見せてやる事はしてあげのと

コーキをやってみたらとてもよろこんでいた。

ビコーキを知らない人は、玄木さんか山口か安井に聞くとおしえてくれます。

浜松まで来ると見る話も聞いた事はあったが男はだまって秘密で輸行した。(男がつかれていたというのは単なるうわさにすぎない。)

※解説、

ヌンヤマグナは中央構造線とも言われ、南アルプスでは、茅野から秋宮峠を経て高遠に至りさらに分杭峠から大河原を通って青木川、地蔵峠、遠山谷とぬけて、青崩峠から水窪へ通じている。(ハイハイ物ごさしたりで地図を見る!)

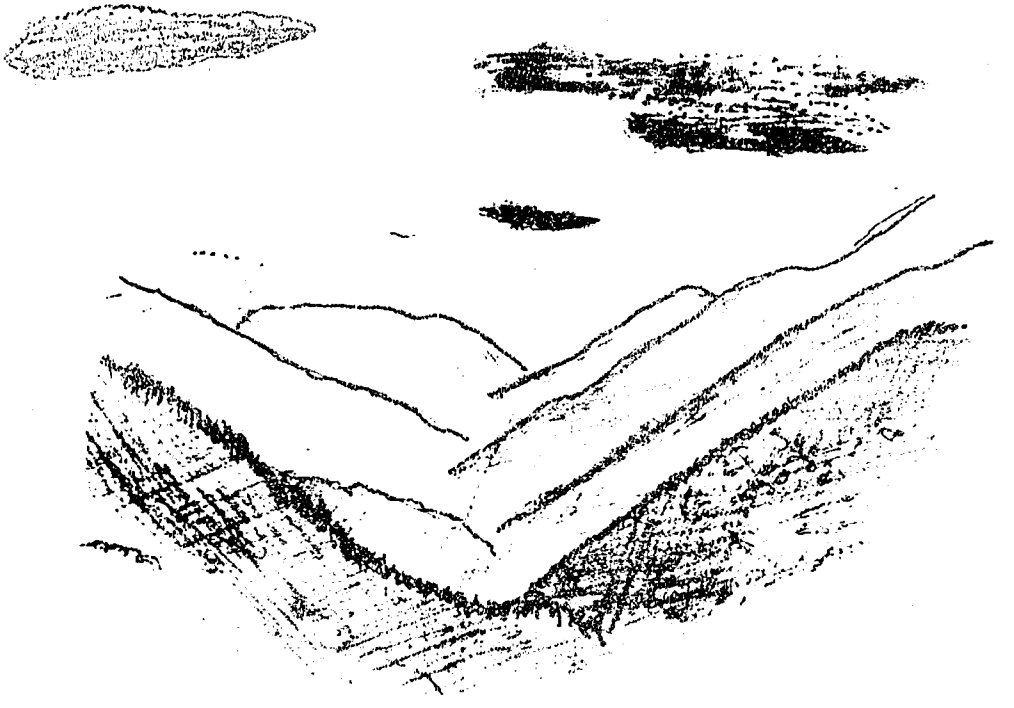
この赤石山脈と伊那山脈とはさまれた谷間の四つの峠をこえて遠江から信州への道は古へより信州から他国への最短経路として利用された。

それ故現在でも地蔵峠では林道工事が進んでいる。もし静かな地蔵峠を味わうのならあと数年の内に行くべきであろう。

また、分杭峠は、割と車の交通量も多いので注意を要する。

コースについては逆コースは何かと無理が多く南下した方が良いと思う。

食料は買える時にしこたま買っておく事、(いつまでもあると思う友達と金と店)



高崎にて

S.N.

Random writing

わくしま　やすし

自分の好きな、かっこいい詩がある。歌を込めて　とても聞けない。こんな詩二度と聞いてやるか！と思う。立ち直ると　つい針を落としてしまい、やはりいい詩だと思ってしまう。

It makes no difference;
It makes no difference　where I turn.
I can't get over you, and the flame still burns
It makes no difference　night or day.
The shadow never seems to fade away
And the sun don't shine　anymore
And the rains pour down　on my door.
Now there's no love　as true as the love
That dies untold
But the crown that hang so low　before
Without your love I've nothing at all like an empty hall
It's a lonely fall. Since you've gone
It's a losing battle　stampeding cattle
They rattle the walls,
And the sun don't shine　any more

And the rains pour down on my door.

Lick Davis "Anthology Pt.1"

この詩が冷めた気持を盛りたてるかと思うが、
やはり年月が流れたなと思わされる。
この前のサイクルサッカーの試合のとき、平成学院の
山口のシュートを弾いた時、左手のおばさん指が
ひん曲ってしまった。冷たい夜自であったので忍耐なき
ので、ハーフタイムの時は、動くのもしんどかったが後半
になると、まったく感じなかったように思う。あるいは左手
でシュートを受けた覚えがある。それでも、あいかわらず
背中をまるめたままで背筋を伸ばそうとしない。
左手の小指もかつて、バスケットで脱臼をしたので
やはり背中をまるめたまま、ちびさんとあねさん
となって背中をまるめている。このため、ちびさんは、
ギター弦を2弦まとめて押さえることができない。
あねさんもこうなっては、困るので、今日、この頃、
ひつこく、痛いほどもみ続ける毎日である。
足は、ひどく変形している。ラグビーシューズを新しく
買ったがそのシューズがあまり、なじまなかったので3か所
ほど靴擦れをおこしてしまった。コーチは、雨が降ろう
と雪が降ろうと練習をさせる人だったので、靴擦れ、

ぐらいでは、休ませてもらえない。後輩には、ひどい脳震とうを起こして、3日間精神病院に入院してその後2日も経たないのに練習させられた者もあった。そのようなコーチであったから、靱帯など"そんなの理由になるか"である。

今では、足が、悪くなって [illegible] ヶ所に切ろうとしても切れないと思われる程の [illegible] した軟骨がくっついている。

おかげさまで膝の寿命は短くなるし、なによりも、スキーブーツ等、[illegible] ことを要求される靴は、選択に困る。[illegible]

[illegible] 練習中に [illegible] 人 [illegible] やり場のない [illegible] 踊り回り、[illegible] ばかりであった。

それ [illegible] 前への [illegible] は、減衰して、ゼロに収束したであろうが、[illegible] の練習で、[illegible] が、[illegible] して [illegible] ドロップで、収束しようとした傷部に、強烈かつ [illegible] 的な打撃を与えたのだった。

それ以来 [illegible] 打撃により、共振 [illegible] したが [illegible] のである。

今となっては [illegible] 減衰し、ゼロに収束することを [illegible] ばかりである。

いろいろ聞いた所によると（右に座っている人は1人だが）

野望を果さんとする人が、掲げる旗は、八十歩は、右手で

・タカ派は、右手で　ぶつらしい。

ロック聞いても、ロックの詩だAあと思う詩がある。

I shall be released.　　(Song in jail)

They say everything can be replaced.

They say every distance is not near.

So I remember every face of every man

who put me here.

They say every man need protection

They say that every man must fall

But I swear I'm still in my education

Somewhere I've lost track of the time

Now youndder standing there in this lonely crowd

A man who swears he's not to blame

All day long I hear the jingling so loud

Just crying out for that he was framed.

I see my light become shining

From the west unto the east

Any day now, any day now

I shall be released　　etc

富士タイムトライアル

――渡辺氏の場合

渡辺秀樹

〈目的〉 富士スバルラインを，料金所から，五合目まで走る時間を測定し，比較する。サイクリングを楽しむことよりも自分の力（リキ）を証明することを目的とする。

〈装置〉 チャリンコ

ギア，48×32T，15×17×19×21×24T

動力，人力

〈方法〉 とにかく速く走ればよい。

START
|
一合目
|
二合目
|
三合目
|
四合目
|
GOAL（五合目）

〈結果〉

2h17m34s　（10位）

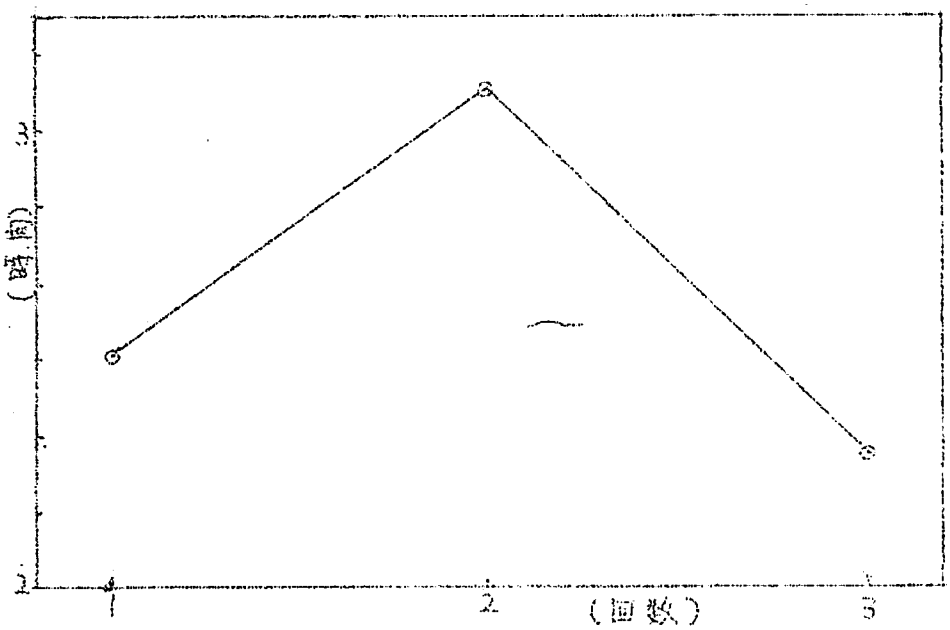
〈考察〉 今回の測定は3回目であるが，参考のため，各回の記録を，記述することにする。

1回目　昭和52年　2h30m32s

2回目　昭和53年　3h05m12s

3回目　昭和54年　2h17m34s

グラフにすると次のようになる。



2回目の記録が異常に悪いが、これは測定ミスなのだろうか？昭和53年は、私にとって実力発揮の年ではないし、原因ははっきりとはわからない。

・腰の出ぐあいと記録について……

昭和53年後期から私の腰はぐんぐん出てきた。当然体重は増加している。かといって、これといったトレーニングはしていないので、馬力は変わっていない。単位重量当りの馬力は落ちているはずである。ところが、昭和53年より、

昭和54年のほうが、記録が向上している。腹のあぐあいと、記録との関係は現在のところ、はっきりした研究はない。今後数年、この分野の研究はさかんになるであろう。

○各人との記録の比較

Y氏	1ʰ	40ᵐ	49ˢ
A氏	1	46	55
M氏	1	59	32
S氏	2	00	28
K氏	2	01	09
I氏	2	01	34
Y氏	2	03	00
H氏	2	07	45
N氏	2	10	43
藤巻氏	2	17	39
I氏	2	17	50
O氏	2	20	00
D氏	2	22	39
N氏	2	36	17
S氏	2	42	06
U氏	2	52	03
S氏	2	56	32

M氏　　3h42m52s

S氏　　リタイア

平均　2h20m00s

標準偏差　29m21s

渡辺氏の偏差値　49.18

※　この場合の偏差値は低いほうが成績がよいことになる。

（例．Y氏（トップ）の偏差値　36.27

M氏（ベテ）の偏差値　79.05

それにしてもM氏は他を百一杯引き離してベテでやった。去年の私の最悪記録（クラブ史上に残ったかに見えた）をもずいぶん引き離してくれた。）

以上から私の力はサイクリング部内ではごく標準とみなすことができる。来年はもっとガンバリたい！

〈所感〉　しかしわずか23Kmのコース，平地だったら1時間弱で走れるだろうに，坂道だとこれだけの差がつく。体力のちょっとした違いが10分程度の記録の差をよぶ。おそろしいですなあ。皆さん日頃からトレーニングでもやったら！えっ，私！　私はシコシコやってます。マスコミ式がトレーニング也。　これはほんの冗談でした……（ドキッ）

四年間を回顧して

小野 賢治

そもそも私がサイクリング部へ入ったのは、兄の影響を受けてのことであった。東工大にサイクリング部なるものがあることは、兄が「サイスポ」に東工大サイクリング部の××という人が載っていたと話していたので判っていた。ここまでの選択はまちがっていなかったと今でも思うが、それから挫折が始まったのであった。

クラブを去る人の話を聞くと、ほとんどの人が「一年の夏合宿が一番印象に残っている」と言うが、私にとって、一年の夏合宿はまさに悪夢であった。このときのつまずきが、その後の活動に良くも悪くも大きく影響したことは間違いない。一年の夏合宿のことはその後つとめて忘れようとしたし、その時走ったコースは二年後の夏合宿でほとんどの部分は再び通ったので一年の夏合宿の印象はほとんど残らなくなってしまった。

その後は、[illegible]したことも[illegible]ったがだいたい順調であった。[illegible]をおかしくして以来、[illegible]自転車で行くことすら控えるようになってしまい、[illegible]サイクリング部を去り、まさに[illegible]。

私は日本の白地図を買ってきて、今までに自転車で走った道を赤鉛筆で書いてみた。なるほどよく走ったな、と思うこともあるし、たったこれだけしか走らなかったのか、と思うこともある。しかしこの地図の中に、電車やバスや自家用車で通った部分を書きこむ気には決してならない。それはだれでも同じだろう。自転車で走ったということは、やはり他の手段には決してかえられない事がある。でも、その地図を見ると、面のうえにもっと赤い線が入っていたらなあ、と思う。

＊今後のクラブに望むこと。

・新入部員に、走り方の基本、コツなどを教えることを徹底させてほしい。

・走りはためることのないように、特にT.T.などの前には充分なトレーニングを行ない、そのトレーニングの方法も研究して改善するようにしてほしい。

（おしまい）

『3. りいRUN』の思い出

2年　亀山 敦

1. 嶺岡林道

○ 嶺岡林道とは、房総半島　安房勝山～鴨川までの全長33k未舗装の静かな林道である。

5月5日　子供の日、私は、約束の時間である、AM7:00に部室到着。天気は、素晴しい快晴で　この日のサイクリングの素晴しさを物語っているかの様でした。しかし、これは、あくまでも様であったのを私は、気付いていなかったのです。相棒の酒井君が30分待っても来ません。そこで親切な私は、彼をむかえに彼の下宿へ……。玄関をあけて、彼の部屋を見るといつもの様に鍵がかけてありません。そっと扉を開けると、私の下宿の冷蔵庫を開けた時の様な、冷気と暗やみが私を襲ってくるではありませんか。そうです、彼は、まだ寝ていたのです。

そこで酒井を起こすと、

酒井：「悪いなあ、俺、今朝4時に寝たんや。」

頭の中で、長部様よりは、なるほどサイクリングの前には、余り寝ないのか　と、私が納得したかどうか定かではないのですが　しばし考えた後、ひとりごと

「行こうか。」

「はーい。」

さて、彼の冷蔵庫から抜け出し　川崎～横浜　フェリーと、国道127号線を走って、1:00に安房勝山到着。

勝山を出発すると、楽な舗装道に出た。勾配もほとんどなく風景も相当よろしい。しかしこの様な幸福感を味わっている時に、何かと、ハプニングを起こしたがる人間がいるらしい。

突然　酒井が「待ってくれ」と言った。こんな楽な道で何やったんだと私が不思議そうに振り返ると、酒井曰く「足くじいた。」　親心でか弱い私は、この時　住友ビルのエレベータで47階から一気に一階まで降りる、スッとする感じを味わったのです。　それで休憩。して、さらに走る。いくら走っても楽なので　だんだん暑い　ことも不思議に思い始めたのですが、まだ暑さの方が疑惑よりまさったせいか　さらに進む　と、南にあるはずの山が北にある。そこで私達は始めて道を間違った事に気付いたのでした。やむえず、少し先にあった分岐路を左にとり北上すると道がどんどん険しくなるではありませんか。はやる心を押さえてどんどん進むとついに、本当に道に出た様です。そして前進すると　なんと下り。がっかり。「また登らねば。」と考えて下ってゆくと、なんと道が二又に分かれている。そこで土地の人に聞いてみたのだがわからない。仕方がないのでやま勘(試験で鍛えた？)で右側の道をとると、峠に出くわしました。

峠で休んでいると、恐ろしい砂利道が山奥へ向かって続いているのです。はて？この道は、何かな と、見ると、何とそれが待望の鎌岡林道でした。この道の恐ろしい砂利の厚さ、そして薄暗く、なにかフランケンシュタインでも出て来そうな雰囲気、やっと親満を自模りあがったとたん四暗刻単騎を振り込んだ様な状況でした。そして、この道の苦しい事は、とても言葉では、言いつくせません。
タイヤが空回り、たまに車が横を通るときは、内心ほっとして足をつき 息を荒げ、汗をダラダラ流し 標高300m前後の林道でも十分な内容の林道でした。
しかし、林道の次ぎ目でまた迷って自衛隊駐屯地に出くわす始末。林道を半分位しか走っていないのに、時刻は、4時位になってしまいました。鎌岡山頂付近では、押しも出ず、はぁ、おてんとう様は、どんどん低くなるやでほんまにまいりましたわ。
やがて下りになりました。
「あ！海が見えまし。」
と誰かが言った。
目に、すでに暮れかかっており、
二人は、その薄暮がかった海へ向って黙々と、ペダルを回すのでした。

尚、1980年に行なわれた オリエンテーリング の 私の成績は、ラス、酒井氏は、ラス前、でした。

この結果を冷静に分析して見れば この 猿岡林道における 二匹の迷い子の子猫ちゃんは、十分に予想出来た事の様です。

私 この次から サイクル ときは、磁石でも もってこうかな。

猿岡林道 地図

太線：本当の道

(参付 細線)：私と酒井が通った道

3年　金井均だぞ

もうメ切のメ切のそしてまたメ切の日（2月24日）に書いている状態なので，思いついたこと，今考えていること何んでも書いてしまいます。

（その1）自転車について

最近，ぜんぜん自転車に乗っていない。オレの自転車は車庫袋にはいったままだ。春合宿には参加しないし，このままではよくない。やっぱり，あの峠からのごう快なダウンヒルをやってみたいな。よし，4年になったら，ゴールデンウィークになったら　日光へでもまたツーリングに行くか。予備合宿も参加しよう。あ～むしょうに自転車に乗りたくなった。

（その2）オリンピックを見て

それにしても日本人は冬のオリンピックに弱い。なんだあの成績は，海和も小児も転倒ばっかりじゃないか。それにひきかえ，あの王者ステンマルクはすごい。2冠王だもんな。それから，あのバケモノハイデン，なんじゃありゃ超人か。いまのところ4冠王だもの　ぜひ5冠王へがんばってほしい。不調の日本人選者の中でも，誰だったけ，名前

は、忘れてしまったけど、男子フィギャースケートで8位をとった人、なんでもカゼをひいていて、39度の熱があったそうな。それでもあれだけの演技ができるなんてりっぱだ。その人、演技を終った後、せいーぱいやったということで、泣いていたもんな。オレ感動しちゃっただ。本当。

（そのう）天文学的相対量子力学について

オレ、前から不思議に思っていたんだが、太陽系で、水金地火木土天冥海と惑星が、ほぼ同一平面内に並んでいるが（ただし冥王星は除く）、その惑星の太陽からの距離が $r_n = a n^2$ という数列で表わされているんだよ。ところが、昔、それで計算するとそれぞれの距離は、水星（$n=1$）金星（$n=2$）…… と対応するが、木星は $n=5$ とはならず $n=6$ となるんだ。おかしいと思うだろう、あとは、土星（$n=7$）…… と対応するのだが、火星と木星の間で不連続となっている。ところが、その間には、あとで小惑星なるものが存在するとわかったんだ。これが小惑星発見のうら話なんだが、それはさておき、各惑星は、以上の結果から n^2 に反比例するエネルギーをもつことになる。これはちょうど、量子力学でいう「エネルギーは、とびとびの値をもつ」に一致し天文学的な惑星のエネルギーに、量子力学のようなものを導入できるのではないだろうか。いやはや、それにしても

不思議な話やなあ。

（その4）TOKIOについて

沢田研二の歌っているあの「TOKIO」とかいう歌はなんだ。歌は、非常に楽しい歌なんだが、問題なのは、そしてオレが言いたいのは、あのパラシュート姿だ。ステージ衣装もあれまでいくとまるでチンドン屋だぜ。ジュリーもアイシャドゥつけたり、ヅャクをはずして酒ビンをはさんだり、また帽子をなげたり、あの辺までは見ていて奇抜だと感じたけど、今度のあのスタイルはちょっとね。あれまでしなくては、歌がヒットしないのかね。そのうち、ブラジャーやパンティつけて歌うようになるかもよ。まったくキチがイざただよ。それを考えると昔のジュリーはよかったぜ。歌はそれほどうまくなかったけど、歌い方がしぶくてよっこうよかった。ファンであったオレとしてはなげかわしいよ。ところで今年のレコード大賞に輝くのは誰だろう。

（その5）モスクワオリンピックボイコットについて

あのアメリカのカーターは、いもか。そもそも政治とスポーツは、まったく別のものなのだ。それをオリンピックボイコットでアメリカ国民をおどらせて、今度の大統領選挙の人気とりなどしやがって、おまけに、他国までおどら

せようとしやがってゆるせない。それにしても、日本の態度も早く決めてほしいぜ

無題

サイクリング部3年
生・機・工学科2年　山口 晋二

始めに・・・

今回部誌の原稿を書くにあたって、何を書こうかといろいろ考えてみたのだが、なかなか良い案が浮かばず、結局、サイクリング及びサイクリング部に全く何の関係もない小説（小説と呼べるかどうかは非常に疑問ではあるが）を書いてみることにした。何と言っても小さい頃から作文の大嫌いだった私が書くのだから、くだらないものになる事は必至であるので、このTOP&LOWを読破しようと息込んでいる人以外には読まないことをお勧めする。

次に・・・

原稿の原稿を書き終えてから題を何にしたらよいかを一生懸命考えたのだけれど良い題がみつからず、結局「無題」とごまかしてしまった。従ってこの題には別に何の意味もないので、念のため・・・

それから・・・

この小説はフィクションであり、登場する人物、学校等はすべて架空のものであり実在しないので、これも念のため・・・

それでは、麦みそラーメンおまちかね。　何のこっちゃ!!

「コウスケー、コウスケッ!! 早く起きなさい。遅れるわよっ!」

10月にしては寒い朝であった。愛知県立岡崎西高校3年8組の田島浩介は、毎朝7時にこうして母の声で目を覚ます。しかし一度起こされたくらいでは起きていかない。とくにこんな寒い朝は1分1秒でも長く布団に入っていたいのが人情である。そうしてしばらく布団の中で丸くなっていると、決まって次に

「コウスケ、コウスケー! コウスケッ!!」

姉が起こしに来る。姉はいつも名前を呼ぶだけである。浩介はこのコウスケコールに再び目を覚ますと、家族中に呼びすてにされる自分がとてもみじめに思えて来た。

やがて彼は決心を固めて布団から飛び起きると、パジャマのまま台所へ行き自分の席に着く。朝食は皆バラバラで、いつも浩介が最後である。父などはもう会社に出かけてしまっていてその辺には居ない。浩介はねぼけたままハシをとり御飯を口の中に押し込むと、それをかみながら味噌汁を口の中に含み胃の中に流し込む。

「コウスケ、お豆さんもあるわよ。」

台所の中をなにやら忙しそうに歩き回りながら母が言った。

「なにが『お豆さん』だ! 自分の息子を呼びすてにしておいて、こんな豆ごときに『さん』をつけ、御丁寧に『お』まで

つけて・・・・・」

浩介はまだ半分ねぼけた顔でそう考え、母にそれを告げると、母はあきれた顔をして、発想がユニークだから小説家にでもなったら、と言った。浩介は、数学や物理の成績はずばぬけて良かったが、国語や社会の成績はずばぬけて悪かった、だから彼は、その母の言葉を皮肉としかとれず、もしそうでなければ、自分の息子の適性というものを全く考えたことのないどうしようもない母親だと思った。

朝食が終わるともうすっかり目が覚めていて、テレビを見ながらのんびりと着替を始める。着替え終わるとゆっくりトイレに入り、それから顔を洗う。浩介が顔を洗い終えると、もう母と姉が出かける時刻である。母と姉は同じ会社に勤めており、毎朝一緒に白いシビックに乗って出勤する。

女供が出かけてしまった後は、家の中は浩介ひとりである。浩介はいわゆるカギッコなのである。帰りは浩介が一番早いので、学校へ行ったふりをしてさぼることも可能であるが、後でばれるとやばいし、別にさぼりたいとも思わないので、毎日まじめに学校に通っている。

浩介は学生服を着て応接間のソファに深く腰をおろし、ノートと教科書が一冊入っているかいないかのペッチャンコのカバンと弁当箱の入った布製の袋を横に置いて、テレビを見る。毎

朝、7時45分から始まる「カリキュラマシーン」を見てから家を出るのである。これは幼児向けの教育番組であるが、非常におもしろく、また、たまに知らない事もでてくるので、浩介は毎朝かかさず見ている。

7時57分、「カリキュラマシーン」が終わると、浩介は、テレビのスイッチを切り、カバンと弁当を持って玄関のカギをしめ、高2のときに買った、ドロップハンドル、10段変速の自転車にそれらをしばり付けて、またがる。その間、約2分30秒。

学校までのおよそ10キロメートルの道のりを、毎朝決まったコースで軽快につっ走る。安城市から岡崎市に入って矢作川を渡ると急に信号が多くなる。とは言っても大きな信号は3つだけで、それらの間にある小さな信号は、波に乗ってしまえばパスできるのであまり苦にはならない。こうして学校の正門を入り、あせって走っている生徒たちをゴボウ抜きして自転車置場へと走る。自転車にまたがってから、自転車置場に到着して自転車から降りるまでの間、29分30秒 $^{+1分}_{-30秒}$。

今日は30分30秒かかったらしく、もうすでに8時半の始業のチャイムが鳴っていた。浩介は急いでカバンと弁当を自転車からとりはずし、教室へとダッシュした。途中、先生を3人程追い抜いて教室に飛び込んだ。

「ふー！　間にあった。」

毎朝こんな調子で浩介は登校する。ところが不思議なことに今だに無遅刻であった。しかもさらに無欠席無欠課であって、2年半の間皆勤である。あと半年これを続ければなんと皆勤賞なのである。浩介はひそかにそれを意識していた。

教室は当然の事ながらまだ騒がしかった。教室の後ろでは、いつものように青田篤たちがふざけあっている。篤は小柄であるが、髪をオールバックにして、かなりつっぱった格好をしている。そして、仲間からはいつも「トク」と呼ばれている。浩介はあまりつっぱっている方ではないが、学校に居る間は彼らと一緒に居る時間が多い。まじめな奴らとまじめな話をしているより、彼らと冗談を言い合っている方が楽しいからである。

浩介が息をきらしながら自分の席に着き、カバンを机の横にたてかけ、教科書やノートのいっぱい入っている机の中に弁当を押し込むと、さっき土間のところで追い抜いた担任の田辺が入って来た。席を離れていた連中がバタバタと自分の席に戻り、あっという間に静かになる。浩介の隣の席の本多文昭もトクの仲間のひとりで、汗をかいて戻って来た。彼は「フミ」と呼ばれていて、浩介とは一番親しかった。

田辺は出席をとり、連絡事項を簡単に伝えると、すぐに出て行った。とたんにまたざわつき始める。

「今日は・・・・月曜日か。」

と浩介はひとり言を言いながら、1時間目の数学の問題集とノートを机の中からひっぱり出して机の上にバサッと置いた。もう受験が近いので授業で問題集をやっているのである。

「きのうさあ、」

フミが浩介に話しかけたとき、数学の教師城井が入って来た。教室に再び静けさが戻る。

浩介の席は廊下よりの一番後ろで、教室中を見渡すことができる。いつ見ても殺風景だなあ、と浩介は思った。1学年9組まであって、6組から9組までは理系であり、女子は少ない。これは当然の事なのであるが、問題は、この少ない女子が6組にかたよっているということである。量的にも質的にも!! 7、8、9組にはそれぞれ8人ずつしか居ないが、6組には14人も居る。しかも、良質のものがその14人の中にほとんど含まれていて、7、8、9組の計24人はカスばっかりなのである。さらに悲しい事に、1組から6組までと7、8、9組とは校舎が別で、めったにお目にすらかかれない。浩介はたまに何か用があって文系の方の校舎に行くと、よその学校にまぎれこんでしまったような気さえして、いたたまれず、用を済ませるとすぐに自分の校舎に帰って来てしまうのである。数は6組の男子達をどれほどねたんだ事か。理系でありながら女子に囲まれて勉強がで

きるなんて！　そして、その憎き6組の担任が、今目の前に居る浅井なのである!!　この事はすべて浅井の陰謀なのではないかと浩介は思った。だから、浩介は浅井の顔を見るたびに腹が立つのであった。

やがて、1時間目の終りを告げるチャイムが鳴り、浅井は去って行った。しかし次は、最も恐怖の授業、沼部のGRAMMARである。沼部はすぐ怒ることで有名で、浩介にも苦い思い出がある。

浩介らが入学して間もない頃の事である。体育の授業に出るために、教室で着替をすませた後、体育館に向かって歩いていた、と、突然、よその組の教室からカバのような顔をしたのが飛び出して来てどなった。

「なんだ、おまえらは!!」

「・・・・あのお、体育の授業で体育館に行くところなんですけど・・・」

ちょっと間をおいて、ひとりが答えた。すると、そのカバは、

「もう授業が始まってるんだぞ。ガヤガヤ、ガヤガヤ廊下を歩くな。体育になんか行かんでいい！　しゃべったった奴は1時間中そこに立っとれ!!」

と、どなりちらした。浩介は幸いひとりで歩いていたので、潔白だと自分に言いきかせて体育に出たが、立たされた連中は、

とうとう本当に1時間中立たされていたのであった。

自分の授業で生徒を立たせるというのはよくある話だが、他の教師の授業の生徒を立たせるというのは聞いたことがなかった。そして、この力バが後で、沼部という英語の教師であることがわかったのである。第一印象が強烈だったためか、浩介は今になってもこの沼部の授業だけは緊張してしまうのであった。

長い長い2時間目が終り、この緊張感から解放されると、浩介はいすに腰かけたまま大きくひとつ背のびをした。

浩介は、2時間目と3時間目の間の10分の休憩時間に弁当を全部食べてしまうのが常であった。いわゆる早弁であり、昼休みにはパンを買って食べるのである。中には授業中に教師の目を盗んで早弁をする奴も居るが、浩介は、ヒヤヒヤしながら食べてもうまくなく、消化にも悪いし、弁当ひとつ食べるのに10分もあれば十分だと考え、いつも休憩時間に食べていた。

彼は、沼部が教室から出て行ったのを確認してから、机の中から弁当と3時間目の世界史の教科書をひっぱり出して、GRAMMARの教科書とノートをしまった。今日は、あの緊張感のせいか、いつもに比べあまり食欲はなかったが、彼にとって早弁はもう完全に日課のひとつなのであった。

浩介が弁当を食べ終わると、間もなくチャイムが鳴って、世界史の教師川島が入って来た。お茶を飲みたい、と思いながら

浩介は教科書を開き、この時間何をしようかと思考をめぐらす。彼は東京興業大学志望で、その受験科目に社会科はなく、だから世界史はどうでもいい授業なのである。無論、東興大志望だから社会科がいらないのではなく、苦手な社会科が受験科目にないから東興大を志望したのではあるが。そして、この世界史の教師川島はその辺の所に理解が深く、授業にさしつかえたり、人に迷惑がかからない限り、寝ていようと何をしていようと、いっこうに何も言わないのである。

浩介はしばらくボケーとして授業を聞いていたが、すぐに退屈でたまらなくなり、机の中から24色入りの色鉛筆を出してそれをひざの上に置きふたを開けた。そして、教科書に載っている白黒の写真を、色を選んではぬり始めた。これは浩介が中学校のときにやはり社会科の時間に自分で発見したもので、教科書などによく載っている白黒の写真を色鉛筆でぬるとカラー写真のようになるのである。小学校のときから社会科が嫌いだった浩介は、社会科の時間にそんな事ばかりして暇をつぶして来たのだ。

3つ程白黒写真をカラーに変えると、浩介はこのぬり絵ならぬぬり写真をやめ、色鉛筆をしまった。あまり長いことやっていると隣のフミにバカにされるのである。

再び暇になった浩介は、両手でほおづえをついて、またボケ

一として授業を聞いた。この授業さえ終わってしまえば、もう昼休みみたいなものだ、早く終わってしまえと浩介は思った。朝、担任の田辺が4時間目の化学は自習だと言っていたのである。

川島は、浩介の知らない人の名前や地名などをところどころにおりこんでしゃべり続けている。昔の人の名前なんか覚えて何の役に立つのだろうと浩介は思った。まだこの学校のかわいい女の子の名前を覚えた方が楽しいし、何かのときに役に立つかも知れない。

それでも3分の2くらいの生徒は、川島の授業を真面目な顔をして聞いている。浩介のななめ前の遠藤は、何やら物理の問題を一生懸命解いているようだ。彼は学年で10本の指に入る優等生で、名古屋大学の医学部を受けるらしい。しかし、浩介は、物理と数学では彼に負けない自信があった。

廊下の窓の外には青空が広がっていた。雲ひとつない見事な秋晴れである。朝は少し冷え込んだが、今はポカポカとして、とても気持ちがいい。

浩介は列車に揺られながら、窓の外の流れ行く景色を眺めていた。

「ここ、よろしいですか。」

女性の声に振り返ると、なんと6組の伊藤美佐子が微笑んで立

っている。浩介は驚いて横に置いていた自分の荷物を足元に降ろすと、彼女は彼の隣にすわった。伊藤美佐子は小柄で、笑うとえくぼができて、浩介の好みのタイプのひとりである。その後、いろいろな会話を交し、楽しい時が流れた。彼女は浩介の部屋のいすに腰かけている。ふと、2人の会話がとぎれた。浩介は小声で彼女の名前を呼び、彼女に歩み寄った。彼女は驚いたような顔をして立ち上がり、浩介が彼女の肩を抱こうとすると、振り向いてかけ出して行ってしまった。浩介は彼女の名前を呼びながら追いかけようとしたが、足が思うように動かない。彼女の後ろ姿がどんどん小さくなっていく。

「終わったぜ。」

突然浩介の頭の上でフミの声がして、それと同時にざわめきが耳に入って来た。浩介が目を開けるともう世界史の授業は終わっていた。変な夢を見たものだと思いながら浩介は、枕にしていてしびれた右腕をさすり、力いっぱいあくびをした。トワたちはもう教室の後ろでふざけあっている。浩介とフミは世界史の教科書を机の上に出しっぱなしにしたまま席を離れ、すぐ後ろの壁にもたれて話し始めた。

4時間目が始まっても教室の中は依然として騒がしかった。半分くらいは机に向かって何やらそれぞれ勉強をしていて、受験が近づいていることを表しているが、他の半分は隣同志で話

をしたり席を離れて遊んだりしている。寝ている者もいる。浩介とフミはやはり後ろの壁にもたれて話をしている。トクたちも後ろで遊んでいる。

と、突然、後ろの扉がガラッと勢いよく開いた。沼部だ!!一瞬のうちに殺気を感じとって、席を離れていた連中がササッと席に戻る。遠く離れていた者は、まるでいすとりゲームのように空いている人の席に着いたり、しゃがんで机や人の影に隠れたりした。しかし、あわれかな、浩介とフミはあまりにも後ろの扉に近いところに居たので、すぐ目の前に自分の席がありながら、蛇ににらまれたカエルの如く身動きひとつとれずに後ろの壁にへばりついたままであった。

「何だ、貴様らは！　自習の時間くらい静かに勉強できんのか!!　受験は近いんだぞ！　席を離れとったやつは廊下に出て立っとれ!!」

そうどなると沼部は出て行った。それに続いて浩介とフミが廊下に出て並んで立っと、後ろで遊んでいたトクたち4人がぞろぞろと出て来た。

隣の9組が沼部の授業だったとは、うかつであった。それにしても、浩介は、席を離れていたのに廊下に出て来ない連中が腹立たしかった。

昼休みは最高に騒がしい。昼食を終えると5時間目が始まる

まで思う存分遊ぶのだ。しかし今日は、トワが9組の教室に遊びに行っているのでいつも程は騒がしくない。浩介は、フミとルウと3人で野球をして遊んだ。野球といっても、教室の中でほうきをバットにして発泡スチロールで作った球を打つのである。ルウというのは足立明のニックネームである。彼は中学のときは相当勉強ができたらしいが、高校に入ってからは墜落の一途をたどった。そんなときに古文の授業で「る」の脱落というのが出てきて、それ以来彼はルウと呼ばれるようになったのであった。

しばらくして、ルウがいいことを思いついたと言って、トワの机を廊下の方へ運び始めた。何をするのか聞くと、

「7組の教室に持っていくんだよ。」

と答えた。

「おもしれえ！」

浩介とフミも手伝って運んだ。

さて、いよいよ5時間目の始まりを告げるチャイムが鳴り、トクが教室に戻って来た。

「ウォ!? ウオオ――!? オレの机が!! オレの机が!!」

トクはそう叫びながらあたりを見回した。

「ああ、おまえの机ならさっき7組の教室で遊んでたぜ。」

ルウが真面目な顔をして言うと、トクはあわてて7組の教室へ

走って行った。7組の教室ではもうすでに現国の授業が始まっていた。女教師の佐々木が教壇の上で何やらしゃべっている。佐々木は25、6才で未婚であり、顔はまずくはないがそれほど美人でもないという程度で、スタイルはまあまあであった。トクは自分の机の位置を確認すると、後ろの扉をそっと開けて、はいつくばってなんとか机のところまでは無事にたどりついた。しかし、しゃがんだままでは重たい机を運んで行くことはできない。トクは佐々木が黒板に向かっている間に立ち上がって運び出そうとしたが、見事失敗に終わった。

「んまあ、青田君！　あなたそんな所で何をしてるの!?」

クラス全員が後ろを向いてトクに視線を集めた。

「あの、ぼくの机がこちらに遊びに来ていたもので…」

爆笑の渦が8組の教室まで聞こえて来た。ルルの3人は笑った。そして、ひどいこと　おわび…

机を運んで帰っ　当然話はまだまだ続くのですが、原稿の〆切に間にあいませんでしたので、いちおうここまでということで、カンニン、カンニン。万一この先が読みたいという方がいましたら筆者まで申し出て下さい。　いやあ――ハハハハハハ、しかし、最後まで読む人はまずいないと思ったのになあ。たいした、たまげた。

□編集後記　　5月.3/7.

やっとのことで、一,二年会員提出してくれた様です。
そもそも提出期限は、12月等という、はるか過去の時にしておいたのですけど私を始め、提出しない人が続出。
しかし、時間をかけただけあってさまざまな内容のものがあって良かったんではないでしょうか。
この部誌が製本されて、皆のてもとにわたるのは、いつかわからないけど、……。
尚、部誌に対する多くの協力ありがとう。
最後に、提出のラストを飾ったSAKAI氏の付たしをもって編集後記をおわらしていただきます。

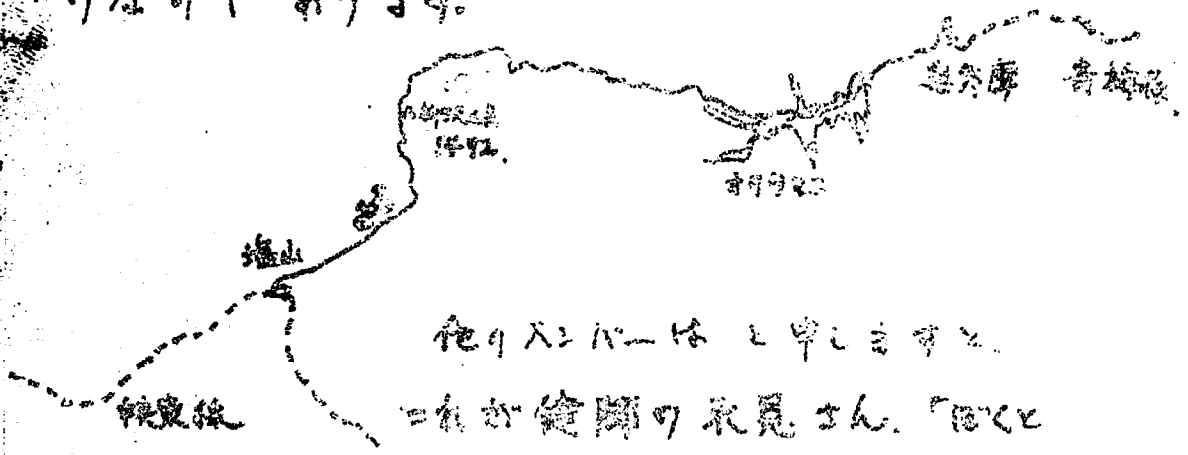
(注　上記の様な理由で冊子化の内容は、目次にはのっておりません。)

S54年　東京工業大学サイクリング部部誌
TITCC 発行
編集者　なおやま等
発行日　いつかしら？

ESCAラリー戦記

SAKAI SEIJI.

たいたい なぜ私がESCAラリーに出たかということでありますが、私は一身上の都合でTITCCフジスバルラインT.T.に参加できないという異いわから、なかば責任はらい的に、私に関係のないところからこういう話がすっかり出来上っていまして、なんとなく私もひきうけてしまったわけなのであります。



他のメンバーはと申しますと、これが鈴鹿の永見さん、「ぼくとしては……」の石田君、オーソラティー吉田君、後は、「恐怖の人マネン間」仲イガキ君なのであります。

ところで、いったいいつこのラリーが行われたかということを書くのを忘れていましたが、何と体育の日10/10に行われました。ちなみに、10/5に私は20回目の誕生日を向えた